
～シャクアスラヴィア～【純愛記】

納 平子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ｼﾞｬｸｱｽﾗｳｳｨｱ 純愛記

【Nコード】

N7700H

【作者名】

納 平子

【あらすじ】

少女は純粋な心を持って、少年は誠の愛を手にした。悪意と憎しみが蔓延するこの世界で、二人と仲間の旅が始まる――。***
*****へ（1～17）までの内容………大海に大陸が二つあるだけの世界。“神を律する”術のあるこの世界で、両大陸の狭間にある人工島『秩序の学舎』（アカデメイア）に暮らす^{しんご}苾護は、とある少女を気にながら、騒がしくも安穩に満ちた日々を送っていた。だがそれは、目覚めを告げる夢と招かれざる来訪者によって壊されてしまう。変化に乏しかった日常は激変し、渦

中にいた芯護は力を望み、手にすることとなる。守るための『器』
(うつわ)を。※△▽― 7 を修正しました。

〈二〉微睡みからの目覚め

——純粹で、一途な愛を、捧げよう——



……時は、創暦四六二年、七の月の中頃。

二つの大陸が大海に浮かぶだけの世界。人の文明が発達し、様々な国や文化が生まれた、人間が生物の頂点に立つ世界。

世界は、未だかつてないほどの危機に陥っていた。

世界の右半分に浮かぶナーリマルク大陸。北東にジド平野、さらにその北へ活火山バク・スレイクがあるその地で、大陸全土を統べる二大国家の一つ——古の業を現代に伝えし『剋帝鍊国』（こくていれんこく）レクスアが、自国の領土を拡げるべく、左半分に浮かぶルト・カウキラ大陸の国々へと侵攻を開始。

小国は抵抗する間もなく討ち滅ぼされ、奴隷と共に死体が次々と積み重ねられていく。

そんな中、レクスアに並ぶ大国『蒸機都市』（じょうきとし）トゥーラグラド、並びに大陸のおよそ半分を占める国土面積を持つ『大堅牢国』（だいけんろうこく）ロクセントが反撃へと転じて、戦乱は激化していった。

血みどろの戦いは、日中夜絶え間なく繰り返された。

大地は血で濡れ染まり、空は黒煙で覆われて光が閉ざされた。

その狭間で人々が怒り、憎しみを募らせて、悲しみを捨てて、留ま
りはせずに、

流す涙も忘れ果てて、

……誰もが希望を無くして、彼もが世界の終わりを予感した。

この地獄は世界が終わるまで続くのだと、皆が悲観した。

終わりの見えぬ地獄を切り払う、救世主が現れることを誰一人知らずに。

――、

「……多くの人達が命を落とした。そのことについて、なにか言うことは？」

少年の口から、静かな怒りが紡がれた。

「…」

問いかけられた男は、玉座の背もたれに身を預けつつ、無言で少年の周囲を眺める。そこには、先程まで男を警護していた手練れの騎

士達が、無様に転がっている。

騎士達の甲冑はボロボロに破壊されていた。

手にしていた槍や剣までも、一様に切り裂かれるか、砕かれている。到底人の為せる技ではないその光景を生み出したのは、男の目の前にいる少年だ。

大広間で起こった出来事を、左手に携えた一振りの短槍をもって築き上げた。

淡い金色の光を放つ、世界に一つしか存在しない『聖槍』の“器”。

少年は、『聖槍』を男に突きつけて声高々く言い放つ。

「お前の野望もここまでだ。降伏して各地から兵を引き上げさせろ。でなければ…」

「で、なければ？」

男に問い返されて、少年は目を細めて、

「その『劔』を、破壊する」

玉座の肘掛けに立て掛けられた劔を、言葉で指した。

鞘に納められていない、剥き身の刀劔。

……心優しかったはずの男に帝国を従わせ、行く行くは世界をも手の中に治めさせようとした、最大の要因となる『器』。

それを破壊すると言った。

世界に一つしかない『聖槍』により。

世界を奈落に突き落とした『劔』を、砕く。

「フッ」

男は笑った。

とても愉快的な冗談を聞かされたといわんばかりに。
それがまったくの冗談ではないと判りきっているから、可笑しくて
笑う。

「若造が……我が、帝国が待ち望んだ全大陸制覇を目前にして、降
伏しろと？ ……片腹痛い」

男は『劔』を手にして立ち上がる。
顔にはすでに笑みはない。

男の目には、正気の色もない。
身も心も、自身が産み出した『器』に吞まれてしまっている。

「英雄を気取りたければあの世でするがいい。我、自らが死出の旅
路へと送ってやろう」

「……そうか」

男の拒絶に、少年は表情を微かに曇らせた。
言葉では止められないと、悟った。
やはり『劔』を砕くしかない。
彼の心そのものと化した『器』を。
彼の“心”を、コロサナケレバイケナイ。

男の握る『劔』が天にかざされた。

禍々しい気配を放つ『劔』は、彼の猛る意思を反映するかの如く、刀身の形状を変えていく。

まるで、揺らめき立つ業火の柱のような形へと変わる。

少年を焼き尽くさんとする、黒い欲望の塊。

それが、振り下ろされようとする。

「我が野心を阻む者を滅ぼせ……………」
【憎悪】
「ヘイデア」

赤黒くおどましい気を纏った『劔』が少年へ襲いかかる。

凍える冷気が降りかかり、目にする者に底知れぬ畏れを抱かせる刃が群らがる。

逃げ出したくなる光景だった。立ち向かうなど不可能に近い。

逃げ切れぬと判っていても、背を向けて走り出したい衝動が駆け上がってくる。

それほどの威圧感を与えてくる。

だが、少年は逃げなかった。

「残念だよ、剋帝」

無数の刃の襲来よりも、体感的に押し寄せる畏れよりも、少年が感じて思ったのはそれだけ。

逃げることはない。畏れることもない。

何故なら彼の手には、絶えぬ光の『器』があるのだから。

「斬り祓え——」【純心】〈シャクアス〉

透き通る声でその名を呼び、

両手で構えて、向かい来る憎しみの刃を迎え討つ。

世界に平和をもたらすために。

男を憎しみから解放するために。

少年は、【純心】の『聖槍』を振り上げた。

「うおおおおおおおおお!!」

「うおおおおおおおおお!!」

「…」

教室中に唸り声が響き渡った。

少年は机に突っ伏していた顔を上げて、椅子から立ち上がり、拳を振り上げて叫んでいた。

周りの席に座るクラスメイト達は驚くか、呆けた顔で大声を上げ続ける少年を見つめる。

「おおお………お?」

寝ぼけた目の焦点が定まってきて、少年の声はしりすぼんでいく。
シン……と静まり返った。

教室中から眼差しが集まる。

痛々しいくらいに冷たいのもあれば、面白がった好奇のものもある。
視線を一身に浴びて、少年は段々と状況を理解していく。――自分
は授業中に居眠りをした挙げ句、その上さらに寝ぼけて醜態を晒
してしまったのだと。

……かなり気まずい。寝癖のついたボサボサの髪を掻きながら、さ
てどう体裁を繕うかと悩んだ少年は、
とにかく、恥さらし状態から抜け出そうと打算して席に座り――、

「座らなくてよろしい。芯護^{しんご}くん」

ずっとそこに居たらしい、机の真ん前に立つバーコード頭の教師に
呼び止められた。

四角い縁の眼鏡を掛け、手には粗野な教鞭が握られている。見た目
通りに厳しそうで、堅苦しい印象を与える男性だ。

そんな彼の顔には、普段からは想像もつかないような柔和な微笑み
が作られている。

その表情の裏に秘められた感情に、芯護と呼ばれた少年も気づかな
いはずがない。

「あー、と、これには、色々事情が」

「成績不良な上『器』も発現出来ない君に、如何程の事情があるの
かな？」

咄嗟につこうとした言い訳はピシヤリとはねのけられた。

芯護は心底嫌そうな顔で黙る。周囲からはクスクス忍び笑いが聴こ

え始めて耳障りだし、次にバーコード頭の教師がなにを言うのか判りきっているからうんざりする。そしてそれは想像通り、堅苦しい印象のバーコード頭から告げられた。

お決まりの、蔑みに蔑んだ台詞を。

「君に愛想を尽かしてしばらくは経つが、今や君との、教師と生徒としての関係すら断ちたい気分だよ。これ以上はなにも言うまい……廊下に立っていなさい、『秩序の学舎』（アカデメイア）の落ちこぼれくん」

へいゝ 2

世界には、二つある大陸ナーリマルクとルト・カウキラの他に、人工で造られた島がある。

両大陸の狭間の海域『中逢海』（ちゅうおうかい）に浮かぶその人工島に名称はなく、代わりに、島にある施設の名と纏めて呼ばれることが多い。

施設の名は『秩序の学舎』。

世界各地から集められた子供達が勉学に励み、成長期の身体を鍛え、当施設が掲げる“世界秩序の守り手”となることを基本理念とする施設。

そこで学ぶもののうち、もっとも重要な事柄が『器』……、

“神”を“律”する“器”、あるいは“律”されし“神”の“器”
——『律神器』（りっしんき）と呼ばれる道具を発現し、自在に操ることにある。



陽射しの強い、乾いた暑さが辺りを包む昼下がりのこと。

半径4kmのリング状を描く、『秩序の学舎』校舎の内側にある校庭。空は一面ガラスの天井で覆われて、降雨時にも運動を行えるようにされた閉鎖空間。

換気設備が整っているとはいえ、この頃の時期としては相当熱気がかもって暑苦しいために、授業以外でここに訪れる者はほとんどいない。いたとすれば、それはよほどの変わり者か、なんらかの罰として草むしりを命じられた者なのだが。

「……………暑い」

後者の理由で一人寂しく校庭に來た芯護は、茹だる暑さとガラス越しの日光に責められながら草をむしっていた。

「本っ当、めんどくさいな、まったく……」

だっ広い校庭に生えた雑草を延々むしり続けて十分は経過したか。上着もシャツも脱いで汗だくな芯護の口からは愚痴しか溢れない。大体、この罰は理不尽過ぎると、草をブチブチする他にやることのない芯護は考える。それは、授業中に眠りに耽った自分は罰せられ

て然るべきなのかも知れないが、その罰自体は“あの時”に受けたはずだ。その証拠に、青空の下にさらけ出された上半身のあちこちには擦り傷や打ち身の痕が残されている。…“二階の教室から吹き飛ばされて中庭に落ちて”、この程度のケガで済んだのは奇跡に近い。

「普通死ぬぞ……ちよつと眠っただけであそこまでするかよ、あのバーコード頭め」

劣悪な環境に状況、その上全身の鈍痛も重なれば気分も刺々しくなるものだ。しかしそれでも草を取るのを止めない辺りは、わりと素直な芯護だ。そんなに長く続きはしないだろうが、面倒なことをすぐに投げ出さないのは、彼にしては珍しい。

因みに、芯護（に限らず、ほぼ全生徒）が呼ぶこの“バーコード”という言葉、実は本人（達）はその意味をよく知らずに使っている。彼の教師が他の女性教師と口論をしていた際に、女性教師がその髪型を指差して罵倒したことからそう呼ばれるようになった。

どうでもいいことではあるが。それはそれとして。

「違うだろ、芯護。二階から落とされたのは、そのあとの“落ちこぼれてるのはてめえの頭だろ…”発言のせいだと思うけど」

「あゝ？」

ぶつくさ眩きながらも草取りに精を出す芯護の背中に声がかかった。聞き覚えのありすぎるその声の先に頭を向ければ、校舎の方からクラスメイトの三人が、やはり暑いらしく上着を脱いでシャツだけの状態で、ダラダラと歩いてくるのが見える。芯護と同じく“落ちこぼれ”の称号を授かっている、馴染みの面子だ。

「よ！ お勤めごころーさん。てっきりサボってると思ってたのに、今日は雨か雷か？」

「おっかしーな。空はあんまり曇ってないぞ？ 雷雨が違うなら天変地異か？」

冗談を交わしつつ笑う二人は、茶髪の長身がレンザ、体格のがっしりしたのがバーノット。そのすぐ後ろから、最初に芯護に話しかけたソバカス顔のトオルが続く。

「天変地異が起こるかどうかはさておくとして、どうしたんだ？ こんな真夏日に草取りなんてやってられないだろう。さっき見た夢の影響かな？」

「夢の影響って、どんな夢見てたかなんて知らないだろ」

機嫌の悪い芯護は、そっぽを向いて適当に返事をする。

悪友三人はお互いに顔を見合わせる。ほんの少し目配せしたあと、代表としてトオルが、

「芯護が【純心】の『器』を持って英雄になる夢、だろ？」

ピタッと芯護の手が止まった。
嫌な予感がする。

まさかとは思うが、いや、まさかそんな赤っ恥……………？

「…確認するけど、俺、寝言とかは」

「バッチリ、剋帝陛下の台詞まで代弁していたよ」

今度は全身が石のように硬直した。

あの夢の内容、駄々漏れ。

クールでキザッたらしい言い回しを朗読とか。

…………穴があつたら入りたい。いや、むしろ自ら入りたい。そんな心情で芯護は、ガックリ俯いて一言。

「最悪だ…」

「そこまで落ち込むことはないんじゃないか？ 悪くても、数日か数週間ぐらい“英雄”って呼ばれるだけだって」

トオルの励ましになってない励ましに、それだけで充分生き恥だと言いつ返したくなる芯護だったが、後ろで堪えようともせずにはバカ笑いしている馬鹿二人よりはマシなので沈黙した。

芯護はやってられないとばかりに仰向けに寝転がり、天を見上げる。斜め上から、まさか芯護が英雄志望だったなんてなく！ とか、ああ英雄様、その槍で私の心を貫いて〜！ とか、ふざけたやり取りを聞き、顔をしかめて――、

ふと、違和を感じた。

俺は英雄なんて憧れたことはない。目指すことなんて、落ちこぼれでなくなるくらいあり得ない。なのに、なんであんな夢を見たんだろうか。

【純心】の聖槍を持って悪の帝王を倒す、夢のなかの夢物語。一度だって、思い描いた試しなんてないのに。夢の内容を辿ってみても、時間が経ったせいとおぼろげにしか思い出せない。それだけじゃなくて、

——…走もここまでだ。降伏して各地から…………。

なにかおかしい。変なモヤモヤが、さらに記憶をぼやけさせている。アレは、自分が“英雄”になる夢だったのか？

——…『劔』を、破壊す…………。

あそこは、レクスアの宮廷…？　そこに立っていたのは、剋帝だった？

——…念だよ、×××…………。

俺が、手にしていたのは…？

――斬り祓……………へ……ア。

「苾護？　どうした、まだ眠いのか？」

「いや…」

不思議そうに顔を覗き込むトオルに、苾護はなんでもないと返した。思い出せないなら考えるだけ無駄だ。それがよほど大事なことから、いつかは思い出せるだろう。そう結論を出して、

先程から騒ぎ立てていた馬鹿二人が、また一段と大きな声を上げる。

「やっべ！　もうすぐ“外界組”が帰ってくるぞ。急がないと間に合わない！」

「苾護、寝転んでる場合じゃない！　トオルもモタモタすんな、早く行くぞ！！」

暑さで気でも狂ったのでは？　というくらいどんどんテンションを上げていくレンザとバーノット。それに対して。

「なんであいつらが帰ってくるのを見に行かなきゃいけないんだよ」

「向こうはエリートだからねえ。コールラスト先輩辺りに、また嫌味言われそうだし」

暑さで滅入り気味な芯護とトオルとの、かなりの温度差。
だからといって引き下がる馬鹿ではない。レンザとバーノットは声
を揃えて叫んだ。

「「お前の片想い（で終わる予定）のお姫様が帰ってくるんだぞ！
立て、立つんだ、“英・雄”！！」」

「――」

ピキッと青筋が浮き出る音が聞こえた、次の一瞬。
レンザとバーノットはその場から全力で脱兎の如く駆け出す。
その後ろをこれまた全力疾走で芯護が追いかけて。
残されたトオルは、楽しそうに友人達の戯れを眺めて見送って。

「早く来いよー、えーゆー！！」

「“ひでお”と書いてA・U！！」

ギャハハハと笑い声を残して、馬鹿二人は校舎内に消えていった。
結局追いつけず汗だくな芯護は、やり場のない怒りを地団駄踏ん
で発散。しているうちに、背後からトオルが追いついてきた。
手に芯護が脱ぎ散らかしたままの上着とシャツを握っているトオル
は、笑うのを抑え、わざわざ持ってきた服を手渡しながら言う。

「二人の言う通りだ。早く行かないと見逃すよ」

「だから、俺は」

「気になるって、前に言ってたじゃないか」

「…」

トオルの見通すような言葉に、芯護は二の句を継げない。言い返せないとか凶星とかではなくて、どう言い表せばいいのか判らないという感じに。

——芯護は以前、一人の少女のことが“気になる”とトオルらに話したことがある。いつからか思うようになった心の変化に戸惑いを覚えて打ち明けてみたのだが、“好きになった”とは言っていないはずなのに、何故か三人はそっちの方へ話を膨らませてしまい、それもあるごとからかうネタにしてくるのだから始末に負えず、苦労する羽目になった。

今では、こんなことなら相談なんてしなければ良かったと嘆息する毎日だ。

彼らからすれば、他愛のない冗談くらいの意味合いしか持っていないし、芯護もそれ以外の意味として取ったことはなかったが。

まあ、面倒なことに変わりはない訳で。

「行かないのか？」

行けば、またあいつらを調子づかせることになる。それは御免こうむりたいのだが、しかし。

「それとも、まだ草取りの罰を続ける？ やる気があるなら無理に

とは言わないよ」

「やる気なんてない」

一言で断った。

一応、トオルはからかう気がないようだし（勘違いはしているから安心こそできないが）、それに、いつまでもつまらない罰に興じる気はさらさらない。

自分に嘘をつかず、ありのままに生きるのが芯護だ。

やりたいことを自由にやって、やりたくないことは絶対にやらない。気の向くまま赴くまま、誠実でなくても真っ正直に。それが芯護の在り方だ。

だから決して、

「うん、やっぱり自分に正直でないとね。それじゃあ彼女に会いに行こうか」

「……言わなくても判ってるだろうけどな、サボるついでに、だからな」

気になる少女に会いたい訳では、ないらしい。

口でいくら誤魔化しても、自分の心は騙せないもの。

あくまで、あくまでもサボることが前提だと言い張りながら、本音は別として、芯護はトオルと共に先行く二人を追った。

わずかな松明が照らすだけの仄暗い一室を、床に彫られた溝から放たれる光が照らした。

室内の隅で座り込んでいた生徒は、光ったのを合図に反応して腰を上げる。溝によって描かれた、床一面に拡がる複数の紋様まで近づいて、しばし刻を置く。

ほどなくすると、立ち上る煌めきは一気に強まっていき、目が眩むほどの光を放った。

生徒が薄く目を見開いて注視するなか、光はすぐに収縮していく。明かりがまた松明だけになって暗闇の色が濃くなると、先程までなにもなかった紋様の上に、六人の人影が立っていた。

人がなにもないところから現れるのを見守っていた生徒は、特に驚くこともなく、笑顔を見せて話しかける。

「…転移は滞りなく完了、だね。皆、お帰りなさい」

「ただいま。お出迎えありがとうございます」

一人が挨拶を返すと、他も口々にただいまを繰り返していく。

「本日の収穫はあ……ナシ！　でしたとき。あーあ、無駄足無駄骨ムダナニク……」

「何処を見て言ってるのよー？」

「何処って、それはお前の腰まわ布ぎッ」

「ああ、疲れた……主にこの二人の仲裁に。ていうか、もう面倒だから止めないからね」

「まあまあ、元気なのは良いことですよ。ねえ、そうは思いませんか？」

「それより、早く戻って先生に報告を」

軽い冗談を交えつつ、お互いなにをしていたのか、疲れたからさっさと戻ろう、などとやりとりをして、
六人改め七人は、室内をあとにして『秩序の学舎』校舎へと歩き出す。

『秩序の学舎』の学級は、一学生から三学生に分けられている。生

徒達は皆一学生から始まり、定期的に行われる昇級試験を受けて合格すれば、次の学級へ進む。三学生まで進んだ者もまた試験を受けて、合格すると『秩序の学舎』を卒業して――とはならない。

学級にはもう一つ、『特待生』というクラスが存在する。最上級である三学生に限らず、生徒全員が自由希望で受けることを許された“適性試験”。これをパスすることで入れるこのクラスでは、唯一、島の外『外界』に出ることを許されている。

島の最東端に設置された『転送器』を用いることで、ナーリマルク、ルト・カウキラの方々へ移動できる彼らは、“世界秩序の守り手”として働くことを義務づけられる。

ついでに言えば、『秩序の学舎』に卒業というものはない。皆、形はどうあれ最終的には特待生となり、島での暮らしを送ることになる。

“世界秩序の守り手”になろうと、学生のままであろうと、生徒が『秩序の学舎』を出て大陸に移り住むことは恐らくない。成績が悪く『秩序の学舎』を追い出されて、路頭に迷う心配も、多分、ないだろう。

だからという訳でもないのだが。

特待生への昇級も“世界秩序の守り手”にもさらさら興味のない苅護達が落ちこぼれになるのは、致し方ないのかも知れない。

「世界の平和と秩序を守る、ねえ。おとぎ話の主人公になれそうで魅力的に思わないでもないけど、自分からやる気を出す気にはなれないな。だって現実味に欠けてるじゃないか」

そう話したトオルの考えに、苅護もほぼ意見を一致させた（他二人はまともな意見を出さなかったので放置）。

“世界秩序の守り手”の役割は、世界に燦る争いの火種を取り除き、処分できないものなら管理するために『秩序の学舎』へ回収する、というものだ。しかし苅護達は、この役割をどうにも理解できずに

疑問を投げかけてしまう。

実際に特待生にならなければ『外界』に出る機会は訪れないので、
芯護は周りから伝え聞かされたことしか知らないのだが、『秩序の
学舎』創設のきっかけにもなった『ラゼンティア戦役』はすでに十
数年前の話であるらしいし、現在は過去の前例を踏まえてどの国も
仲良くやっていると聞く。

とにかく、落ちこぼれが言いたいのはこういうこと。

——そんな大仰な称号を掲げて世界を飛び回り、あれこれするこ
とに意味はあるのか？

——こちらが余計に気を揉まなくても、現に世界はなんの問題も
なく回っているのなら、手を加える必要はないのではないか？

万全に万全を尽くすのは判る。とはいえ、それを“自分達がする必
要性”はあるのだろうか。

目の前で困っている人がいるなら助けようとは思う。けれど、何処
かでなにかがあつて困った誰かがいたとして、そこにいちいち首を
突っ込むのは、ちと節介が過ぎやしないだろうか。
そしてなにより、

「ただ“落ちこぼれ”って言われなかったためだけに勉強する気にもな
れないしな」

いつまで経っても一学生のままで、何度となく“落ちこぼれ”と呼ばれては蔑まれて。そのことが気にならないといえは嘘になるが、それを撤回させたいだけで特待生^{エリート}を目指すものにか違う気がする。芯護は“世界秩序の守り手”になる気はない。特待生のクラスなんて住む世界が違ふし、彼らの仕事は勿論、自分から積極的に関わっていくようなことは一生ない。

ずっと一学生で勉学に励まず、変わらぬ日々を惰性で生きていく。それが自分の一生だろうと、芯護はなんとなく決めつけていた。

数年前に特待生に上がり、とある律神器を発現することに成功した少女が現れるまでは。

特待生——とりわけ、外界での活動を主とする“外界組”は、実力派が揃っている上に容姿端麗の者が多いせいか、一般生徒からの人気が高い。

なので校舎の東側にある『転送器』までの通路と、それを囲う形で造られた庭園の内部は、男女問わず大勢の生徒でひしめきあっていた。

他とは遅れて庭園にやってきた芯護とトオルは、いつも通りの光景にいつもよりも辟易して、ひとまず到着しているはずの二人を探す……までもなく、即座に見つかった。

群衆の前で立ち往生する二人は、バーノットが下でレンザを担ぎ上げて、レンザは肩に乗り人混みの奥を見ようと首を伸ばしている。レンザの長身が駄目押しでさらに長くなった姿はことさら目立ち、そこまでは頑張れない生徒達からちよつと遠巻きにされているのが面白いやらイタイやら。

正直お近づきになりたくないなと芯護は思いながらも、背丈が同程度のバーノットに声をかける。

「バーノ、あいつらまだ戻ってないのか？」

「お、やっぱりお姫様が気になったなあ？ このツンデれめ……：イタ、痛いッ。判った、悪かったからすね蹴るなって今無防備で避けれいってえ！！」

「うお、わわ、危な！？ おい、ちゃんと支えろって、この馬鹿バノ！！」

「俺じゃない、芯護が！」

「なにをしてるの：」

三人がぎゃあぎゃあグネグネと揉めて騒いであまりに見苦しく、見かねたトオルが芯護をなだめて落ち着かせる。先ほどの分も含め、日頃の鬱憤を晴らしてやろうと拳を握っていた芯護は、しかし話が進まないからというトオルの説得に応じて、

「ウツソォ!? 全っ然応じてないって俺の腹現在進行でサンドバツぐふおオオツ!!」

「やめて、やめたげて!? その子お腹弱いの! ああほら顔もみるみる真っ青になって、そんな一心不乱に突いたらほらあ……お俺が落ちるんだってばああああぎやをう!!!!」

土台が耐えかねて、上と一緒にグシャリと潰れた。

一仕事終えた芯護は動かなくなったレンバノを躊躇なく踏みつけて（グエって音がしたけど気にしない）、人混みの奥にある庭園の出入口、蔦の絡まったアーチ状の鉄門を見渡す。門は開いた跡も開く様子もなく、生徒達の間からどうしたんだろうと心配する声や待ちきれないといった焦れた声が囁かれてくる。外界組の帰りは予定より遅れているようだ。

「なにかあったのかな。今日は『器』の探索に出てたよね?」

「知らねえよ。どうせディスクが寄り道とかしてるんだろ」

爪先立ちで確認するトオルに、芯護はいつものことだろと言って台から降りた。どうでもよさげな顔でいて、全身からは心なしか、ピリピリしたものを発している。その様子にトオルが気づいて、

「大丈夫。すぐに帰ってくるって」

「なんのことを言ってるのかさっぱりだ。戻る」

ふてくされた芯護は、用はなくなったと言わんばかりに校舎の方へ足を向ける。

直後に。

「帰ってきたぞー！」

「…！」

生徒の誰かが叫んで門の開く音が聞こえてきた。それらは瞬く間に門をくぐる外界組への歓声に吞まれて消えてしまい、芯護の足は自然と止まって、

「おやおや、帰るんじゃないのかな、英雄くん？　可愛いくらいに素な…おぶア！」

「ようし、そんなじゃあお姫様に猛烈アピールタイムだ。英雄の底力を見せるんゴむッ」

左右から復活してきたレンバノに、それぞれ顔面へ肘鉄を喰らわせ撃沈させて。

そうしている間に歓声のなかから女子生徒の集団が、私服姿の外界

組、その先頭を歩く金髪の生徒に黄色い声を上げる。青年は気取った笑みで集団に返し、ご満悦の様子で取り囲まれていく。

「ディスク様、お帰りなさい！ 本日の外界での活動はいかがでしたか？」

「やあただいま。今日は散々だったよ。『器』は見つからないし、猪女には終始襲われるし。でも、君達の可愛い顔を見たからすべて帳消しだなあ」

「可愛いだなんて、そんな」

「きゃあ！ お顔に血がついてます、早くお手当てを！！」

「ハッハッハ、このくらいどうってことないさ。この俺を誰だと思っている？」

「「それはもちろん、ディスクलग様です！！」」

キャーッと女子全員が合唱する光景に、

「「「うわあ……」」」

芯護、トオルだけでなく、鼻を押さえるレンザとバーノットも、いやさその場に居合わせた男子のほぼ全員が、一斉に引きまくった。女子に熱烈ラブコールを受けている生徒の名はディスクलग。特待生のなかでもっとも女子に人気があり、対照的に男子からは嫌われまくっている軟派な遊び人。自分のファンに様をつけて呼ばせたり、高飛車で尊大な態度を取るなど性格が酷く、それでも女子から嫌われることが滅多にないのは何故なのか、ていうか年がら年中女子を

はべらせてめっちゃ羨ましいんですけど、という声があとを絶たない。良くない意味で話題に困らない青年だ。芯護ら四人を“落ちこぼれーズ”と呼称して見下したりもするので、両者の折り合いはすこぶる悪かったりする。

と、ハーレム空間からわずかに離れた場所で、

「猪、女……？ 誰が………ッ」

淡い金色の長髪を首筋で結った女子生徒ミーシャが、ディスケルグの発言に身体をうち震えわせていた。

女子のなかでディスケルグに惑わされていない数少ない常識人の彼女は、落ちこぼれーズ以上にディスケルグと仲が悪いことで有名だ。話の内容から察するに、外界での活動でやはり二人は揉めたらしい。まあ、そちらにはこれといって関心はないので、芯護は遠目から、他の特待生に目を移していく。

小柄で外界組最年少の、空色の髪と髪留めを兼ねた羽飾りが目を引く少女クルミアは、

「クルミアちゃん！」

「今日もお人形みたいで可愛いー！！」

「大・好き・だア——！！！！」

「通行の邪魔、退いて」

鬱陶しいファンを一言で一蹴して、一人黙々と校舎へ歩き去っている（あとを追いつがるファンの一人が、先程までそこでうずくまっていたバーノットに見えるが目の錯覚だろう）。

同じく、男子生徒から絶大な人気を誇る少女——はためく薄い羽

衣を身に纏った、流れる水を彷彿とさせる美しい髪を持つフォーラムは、

「お疲れ様でした、フォーラム先輩。あの、これ……良かったら貰ってください！」

「あら、ありがとうございます。大事にしますね」

「あ、お、俺も、フォーラムさんに、渡したいものがあるんです！
どうぞ、お受け取り下さい！」

「あらあら、こんなに綺麗な飾りを貰って良いんですか？」

「はい、はい！ フォーラムさんに、絶対、似合うと思うんで！」

「フォーラムお姉様〜！ 私も肩をお揉みます〜！！」

「うふふ、皆さんありがとうございます」

おっとりお嬢様系な性格のせいか、群がるファンから抜け出せずにいる。律儀に接する方もだが、毎度毎度プレゼントやらなんやらで近づいては好感度を上げようと躍起になっている方もアレだ。あれらの情熱を理解できない芯護は、よく飽きないものだと思れつつ、視線をずらして。

フォーラムの一団からさらに後方の、他の外界組が人波に揉まれるなか遅れて鉄門をくぐる二人の待待生を見つけた。

一人は見た目に不釣り合いな、豪華な首飾りを身につけた少女。が、そちらには目もくれず、芯護は隣を歩くもう一人の少女へ視線を走らせる。

芯護のようなボサボサの髪とは違う、肩辺りまで伸びた艶のある黒

髪の少女。

名は依妃奈^{えひな}。

記憶は定かではないが、随分前から『秩序の学舎』に入校して、二年程前に三学生から特待生に移った。その理由は、適性試験に受かっただけではない。

彼女は、とある律神器を発現させたことで特待生になった。

その『器』とは【純心】。

芯護が夢に見た、あの光り輝く聖槍。“心”そのものを表す『器』。かつてこの世界を襲った災厄『ラゼンティア戦役』を終わらせた英雄《無垢なる者》が所有していた律神器。その『器』の発現に成功した依妃奈もまた、《無垢なる者》と呼ばれる。

——きっかけは『器』の発現と特待生への昇級だった。

《無垢なる者》の再来ともてはやされ、一躍有名になった依妃奈を一目見ようと友人らに誘われたのが始まり。その時は、特待生^{エリート}がまた増えただけだろうと気にもかけなかった芯護だったが、しつこい誘いに渋々ついて行って彼女を見た時、ひとたびで心を奪われてしまった。

外見が良かったからではないし、英雄と同じ『器』を発現したから

ではない。そんなちやちな理由じゃない。

忖護本人ですら説明しようがなかった。ただひたすら依妃奈しか瞳に写らなかった。

これを一目惚れとでもいうのか、まだ短い人生で一度だって恋をしたことがなかった少年には、どうしても判断に迷ってしまうのだが、彼女を見るたびに心は揺らいで、身体の内側がざわざわ騒ぎ出して、落ち着かない気分になるのはごまかしようがなかった。

「恋してる、か」

数秒と立たずザザーっと人波にさらわれていく依妃奈達を見送った
芯護は、バーノットやトオルには聴こえないくらいの小声で呟く。

……彼女のことが気になる？ それはきっと恋だよ。

相談した時にトオルが口にしたこの言葉は、恐らく正しいと芯護は
思った。

……なににいい！？ 依妃奈に恋したってエ！！ 悪いことは言わ
ないから棄権しろ、な？。

レンザのこの言葉には、固く握った拳で返しておいた。

……しゅんぐろ、分が悪すぎるって……。……でも、そこま
で言うなら協力しよう。先ずこのタキシードにきが。

言い終わる前に、バーノットの鳩尾に蹴りを入れた。ていうか何故
持ってる。

ふざけてばかりではあったけれど、レンザもバーノットもトオルと
同じ見解を出した。だから“恋をしている”という一点においては、
もう間違いないのだろう。

芯護にはよく判らなかったが。

よく判らないからこそ、

では、どうしよう？ どうしたら良い？

自分は依妃奈に恋をした。それは判った。しかし、だ。……言われて初めて知った感情は“理解した訳ではなく、胸の内にあるものが『恋』”というもののだと、そういうものだと教えられただけだ。意味そのものはなんら理解できていない。だからこそ芯護は、次にどう考えて行動したら良いのか、この不可解な感情をどう処理したら良いのか、まるで見当がつかないでいる。

過去にトオルから助言をいくつかさねたが、根本的に恋愛感情を把握しきれていないのではどれも役立たない。一から教えるようにも、その感情は芯護だけのものであって、他人から教えられるものじゃない。

先に繋げる糸口がない。それが——この立ち位置だ。遠くから眺めるだけ。

話しかけたことはない。そうしようと考えたこともあったが、そうするとこんな考えも脳裏をよぎる。——話しかけてどうなるのか、と。

話したい訳じゃない。

接したい訳でもない。

ただひたすら、気になるんだ。

彼女の存在に、自分の気持ちとは無関係に、惹かれてしまう。

“好き”ではなく、やはり行き着く先はそう、

——“気になる”。

実感を持ってないだけなのか。それとも別の理由でもあるのか。自分のことなのに何処か他人事のように感じてしまう芯護は、

「…んつと、らしくないよな」

「ふむ、君らしいといえば君らしいが」

「……………」

後ろからの声に硬直した。

ギギギツと首を無理矢理動かして、振り返ればそこには。

「次の授業も始まることだし、校舎に戻るよう生徒達を呼びに来たのだがね。君と会うことになるとは予想していなかったよ。では聞こうか……………草取りの罰はどうしたのかな、芯護くん？」

「ば、バーコード頭…！」

「私にはハロル・パフェッドという由緒ある名があるのだよ。間違っても『バーコード』などという奇っ怪な名ではない」

バーコード頭改めハロル・パフェッドが、手にある教鞭を振り上げて芯護を狙っていた。

周りに人はいない。トオル達は、薄情にも芯護を見捨てて逃げている。

天涯孤独となった不良生徒は、それでも諦めずに走り出して、ハロルが握る教鞭が、教鞭の形をした『律神器』の力が、解放される。

「私の『器』から逃げおおせる確率は0%だ。―――【反駁】へり
べーズ」



草取りの罰をサボったツケは高くついた。

大勢の生徒達がいる前で格好悪く空を飛ばされ、挙げ句に庭園の作業を手伝うようにと追加の罰も与えられた。

一度罰をサボっているのに二度目はサボらないとでも？ と、サボる気満々だった忖護は自分の考えが甘かったことを痛感する。罰の内容は庭園の作業を手伝うことで、“手伝わなければいけない相手”が必ずいる訳で。

「芯護、次はそっちの花壇の草取りをお願いねー」

「……………はいよ」

本日の授業をすべて終えた放課後、庭園の植物の一切を管理するミーシャと一緒に土いじりをする事となった。

芯護はミーシャの指示に従って、草木に水をやったり、花を踏まずに雑草を引っ抜いたり、土を均して種を蒔いたり…と、慣れない作業に悪戦苦闘しながらも、手を休めずに働く。心の奥底で面倒だとか、しんどいとか、やってられないとか考えながらも、いつものようにサボろうとはしない。

サボらない理由については極々単純なもの——ミーシャが特待生の中で唯一、友達と呼べる存在だからだ。

特待生とはとんと縁のない芯護だが、ミーシャは別だった。

『秩序の学舎』に来てからずっと一学生の芯護と落ちこぼれ組は、在学生のほぼ全員と面識がある。大抵の生徒は二学生、三学生、特待生と上がっていくにつれて芯護達とは縁遠くなっていくが、人より世話好きなミーシャはそうならなかった。機会さえあれば廊下ですれ違うだけでも声をかけてくるし、問題を起こせば叱りつけにくる。そんな日々を送っている内に、いつの間にやら友人の位置に収まっていた。

ミーシャの世話好きな面は、時々行き過ぎて鬱陶しく思うこともある。自分のすることとやかく言われるのが嫌いな芯護からすれば、ミーシャのような人は天敵にしかならない。けれど、芯護はミーシャを友人の一人として見ていた。

しつこく口を出してくるのは、相手の為を思っている証拠だ。その

好意自体、芯護は素直に嬉しいと感じるし、
なによりミーシャは芯護達を落ちこぼれとは呼ばない。――レン
ザやバーノット、トオルの三人を、“落ちこぼれ”と呼ばない。だ
から、芯護はミーシャを友人として、彼女の手伝いをしようという
気になった。

「それで、今度はなにをしたの？」

陽も傾き始めて、海岸線と空の境目が赤く染まり出した頃。
汗まみれの泥まみれになった芯護に、一息入れて立ち上がったミー
シャが話しかける。
また小言を聞かせる気なのだろうと当たりをつけた芯護は、どうせ
いつものことだし、会話をしていれば面倒臭さも紛れるかと考えて
正直に答えた。

「居眠りと罰の草取りのサボり」

簡単に、かつ簡潔に説明すると、あからさまな溜め息が返ってきた。
「授業くらいちゃんと起きて聞きなさいよ。もうじき昇級試験だっ
てあるんだから。また一学生止まりになるわよ」

「興味ない。ずっと一学生のみままで良いよ、俺は」

手は動かしたままで、ミーシャの方には目を向けず芯護は喋る。どうでも良さそうに本音を口にする。

その姿を見下ろすミーシャの顔が、いつになく真剣なものになっていることに、芯護は気づかない。

「……前から言おうと思っていたけれどね、誰かの為になにかした
いって思わないの？ 養ってくれてる『秩序の学舎』への恩返し、
とかでも良いし」

「“養ってくれてる”…」

ミーシャの言葉に芯護は顔を上げた。

———そうだ。

『秩序の学舎』に暮らす生徒の大半は、教職員達に養われている孤
児だ。

生徒達のほとんどは、戦災や飢饉で親を失うか捨てられている。芯
護も親の顔を知らない、親を持たない孤児の一人だ。

行く宛てのない自分達を拾い、ここまで育ててくれたことに感謝し
て恩を返す———ミーシャの言いたいことは良く判る。

しかし、芯護は皮肉めいた考え方をした。

「教師の皆は、見返りが欲しくて俺達を育ててくれてるのか？ と
んだ愛情だな」

「恩は感じてないって言いたいのか？」

心ない一言のせいで、ついミーシャの語気も強まる。それを受けて、
やっとミーシャが怒っていることに気づいた芯護は作業を中断して

彼女の方を向く。

どうして怒っているのかは知らなかったが、一応怒らせた原因は自分にあるようなので、芯護なりに考えて話してみる。

「感じてない訳じゃないけど……：……：される側も嫌だろ、『今から貴方になにかしてあげます。ですがそれは貴方の為ではなく、自分を育ててくれた人への恩返しなんです』って。俺は誰かになにかをしてやるにしても、そいつだけの為に動きたいんだよ」

相手のことなどお構いなしに、自分の都合だけで勝手に手を出して場を乱して、出された方は良い迷惑だ。手出しするなら、相手の方からそれを望んでからにしたい。そう持論を展開したところで、今度は芯護の頭の中がこんがらがってしまった。

「ん？ 違うな。誰かの為じゃなくて、俺の為なのか？ 俺がそうしたいからそうして……：でも押しつけがましいのは嫌いだしな……：……あゝ？」

自分で言ったことの矛盾に気づいて、考えを上手にまとめることができずに唸ってしまう。それに見かねたミーシャが助け船を出した。

「芯護が優柔不断なのはよく判ったわ。つまり、『秩序の学舎』に恩を返す気はなし、でも恩を感じてない訳じゃない。誰かが困っても助けが呼ばれるまでは放置、でも助けて欲しいって言われたら助ける……：そういうこと？」

芯護の言いたかったことをざっと整理して提示する。頭を悩ませたままの芯護は、混乱しているせいかミーシャの言葉を呑み込めず、どうだろうなと曖昧に返す。

煮え切らない受け答えにミーシャは呆れ果て、もういいと話を打ち

切った。

「芯護の考え方を、間違ってるとは言わないけどね。…それじゃ間に合わないわよ」

少しだけ、憂いた表情を見せながら言い残して。

ミーシャは汚れた手を叩いて土を落とす。その右手にある、作業を始める前に着けた黄褐色の手袋が、芯護の目に映る。

赤焼ける庭園の中心で、ミーシャは右手を花壇にかざしてすっと目を閉じた。

手は陽が沈むことで花びらを閉じていく植物に向けられ、ミーシャの意識は手袋に集中する。

「…循環せよ———【豊穰】へアムリア」

無意識に紡がれた言の葉に応じて、手袋が翡翠の輝きを放つ。

変化はすぐに訪れた。

手袋が放った光が庭園内の植物に移って、波紋のように拡がっていく。光を宿した植物が次から次へと花を咲かせ、活力に満ち溢れる。命の輝きが、注がれた『器』の力により明滅を繰り返す。言語を持たない植物が、光ることで喜びを表現しているかのように。

通常では有り得ない不可思議な光景を前にして、芯護は初見という訳でもないのに見入ってしまう。沈みゆく夕暮れを照らす翠の発光群^{ジェ}は、芸術に関心のない芯護でも目を惹かせるほどに美しかった。

これこそ——【豊穰】の名を持つ手袋に秘められた、生命^{いのち}を操る力だ。

この世界に在る、万に等しい数の理^{ことわり}——『万理』（ぼんり）が封じ込められた律神器の力。

神だけが扱うことを許された力を、易々と振るってみせる者達。天変地異すら自在に引き起こす彼らを、人々は畏敬を込めて『律神士』（りっしんし）と呼ぶ。

理解もできなければ真似もできない。他より近しい特待生でも、やはりミーシャは芯護達とは違う。芯護はそれをまざまざと見せつけられた気がした。

優秀な『特待生』と底辺の『落ちこぼれ』。

自分では不可能なことを可能にする人間との、埋まらない溝。そこから込み上げてくる劣等感はずなからず芯護にもあって、苦々しい

気分を味わう。

つまらない感情だと、芯護本人も自覚している。比較して落ち込んでも変わるものはなにもないし、芯護とミーシャは別々の人間で違うのは当然だ。見比べるだけ意味はない。

判っているながら割り切れないのが人間というものだが。

「なに、したんだ？」

心に芽生えた惨めな感情を隅に追いやり、芯護は訊ねる。勉強不足で律神器について知識がないのもそうだが、個別の『器』の力を把握しきれるのは発現者当人のみだ。ミーシャもその辺りは考慮して説明してくれた。

「言った通り、力を循環させたの。この【豊穰】に宿った万理は『生命力』だから、それを操作して養分の巡りを良くしたのね。これを毎日しておく草花は枯れにくくなるし、元気に育ってくれるから」

花が咲いたのは循環の余波だとミーシャはいう。人で例えるなら身体をくすぐられたの変わらず、時間が過ぎれば蕾は閉じるのだそうで、話している間にも花は元の状態へ戻っていき、庭園からは光が消えた。

芯護は単純に植物を操った、程度の解釈をして肩を竦める。

「さすが特待生は出来が違うな。発現なんて、仕組みもなにも判らない俺じゃあ一生無理だ」

「はいはい卑屈にならない。発現の仕方は授業で習ってるでしょ。それに特待生は関係ありません。適性試験に合格できれば、『器』を発現して律神士にならなくても特待生にはなれます。忘れたの？」

忘れたのではなく、最初から覚えていないだけなのだが。それを話すとまたガミガミ言われそうなので、芯護は代わりに減らず口を洩らす。

「特待生になる気なんてねーし」

「………」

返ってきたのは無言。

芯護は言ったあとでしまったと気づく。そんな言い方をしたら、会話が最初へ逆戻りしてしまうだろう。

けれど、ミーシャはそちらへの追及はして来なかった。なにやら別の方に気が向いたのか、考え深げに芯護をじっと見つめている。その妙な表情に芯護は訝って、

「好きな子に近づけるチャンスなのに？」

ぶふッ?! と吹き出した。

不意を突かれた。

予想していなかった。

ついさっきまで真面目なことを話していたミーシャから内容を180度回転してくると思いきや思ってもよらなかったし、それよりも芯護が気になったのは、

「…なんで知ってんだよ」

「あっはは、バーノとトオルがね、苳護が恋愛に尻込みしてるから
くってアドバイス貰いに来て……苳護、せっかくだから言っとく
わ。自分から積極的に行かないと女の子は振り向いてくれ」

世話焼きスキルが全開になる前に、牽制として花壇の土を投げつけた。
両手一杯に掬って。

「ちょっとやめッ、やめなさい！ 汚れるでしょ!？」

「ほっとけ！ 忘れろ！ 構うな!！」

堪らずミーシャは叫ぶが、苳護は聞く耳を持たない。一欠片の情け
で石は投げなかったが、その分、寮塔に帰ったらバーノット達を叩
きのめすと決めた。それと、他に喋っていないか尋問しなければな
らない。

八割方喋っていきそうな予感がしたが。

その時は徹底的にやろう、そうしようと不穏なことを考えて、

「苳護、もう、いい加減にしなさい！ 人が親切に助言しただけで
なんで!？」

泥をかけられっぱなしだったミーシャが我慢の限界を越えた。

恋愛に疎い少年へ、先輩から温かな優しさを施そうとしただけなの
に何故に仇で返されなければならないのか。とまあ、彼女の怒りも
もつともで、しかしこっちはこっちで悪友に散々からかわれてきて
いるし、この期に及んでまだからかうのか、それも無いと油断して
いたお前から!？」と苳護も白熱。

負けじと声を張り上げて、
地雷を踏む。

「頼んでねえだろ！　ありがた迷惑なんだよ！！　お前はディスクと仲良くやってりゃ良いだろ！！！！」

「ハア！？　なんでアイツの名前が出てくるのよふざっけんじやないわよッ！！　私がいつあんなちゃらんぽらんな奴と仲良くなんかした！？」

「してんだろが！！　仲睦まじくはしゃぎ回って、アイツのファンクラブが遠くから妬ましそうに見てたしな！！」

「うわ、有り得ない。鳥肌立ってきた。ちょっとその勘違いした子を軽くシメてきて良い？　てかだからさ……………土かけるのヤメッて言ってるでしょオオオオオオオオッ?!?!」

身の毛もよだつ鬼の形相で臨戦態勢を取り、律神器の発現も辞さないミーシャの反撃が始まる。『器』のない無力な芯護は、例え劣勢極まりなくとも最期まで戦うことを此処に誓い、迎え討とうと気合を出す。

ジリ…と両者はにじり寄った。

互いの誇りと信念を賭けず、言い争いから始まったこの醜い争いに終止符を打つ為、

二人は今、飛びかからん――、

「貴方達は庭園の手入れをしているのか、それとも遊んでいるだけなのか、私には判別がつかないのだけれど？」

「……………」

話しかけられて。

薄暗い庭園の中、一人の女性教師が近づいてきていたことに二人はようやく気づいた。

女性は厳しい目つきで泥まみれの二人と汚れた花壇の周辺を一瞥し、眉間に皺を寄せて苦言を呈する。

「これ以上汚されると、掃除するのに時間がかかるわね。貴方達だけで処理できるのかしら」

「すみません、セイレ先生。すぐに綺麗にしますので！」

ミーシャは慌てて戦闘姿勢を解いて佇まいを直し、頭を下げて謝る。はしたない姿を目撃されて顔が少し赤い。

一方の芯護は、土を投げるのはさすがに止めたものの、謝らずに目を反らすだけにとどめる。人に頭を下げるのはどうも性に合わなくて意地を張り、それを視界の端に捉えらたミーシャが、セイレと呼んだ女性教師を上回る鋭い目で謝りなさいと訴えてきた。

睨まれたくらいで謝るような芯護ではないが、とはいえ、自責の念がないでもない。

悩んだ末、渋々妥協案を出すことにする。

「セイレ、散らかしたのは俺だから俺が全部片す。ミーシャは片付けなくていい」

「え？ でも……」

「一人ですべてできるの？ 私の見立てでは、二人で片付けても夜遅くなるでしょうね。途中で投げ出されても困るわ」

「投げ出さねーよ。言ったからにはちゃんとやる」

セイレは値踏みするような目で見つめ、良いでしようと了承した。日頃の不真面目さのせいで信用がなく、断られるかと予想していた芯護は即決されたので驚く。それはミーシャも同じだったようで、

「先生、芯護だけだと勝手が判りません。監督責任もありますし、最後まで面倒見ます」

「いえ、どのみち貴女には庭園の作業は中断して貰うつもりだったから。こちらの用事に付き合ってくれるかしら」

「用事……、」

その為に貴女を呼びに来たのだしとセイレが話すと、なにか思い当たりがあるのか、ミーシャは食い下がらなかった。判りました、すぐに向かいます。お願いね、でもその前に服は着替えてきなさい。と、二人は口早に言葉を交わして、約束を取りつけたセイレは速足で立ち去っていく。

セイレを見送ったミーシャは、次に手持ち無沙汰で聞いていた芯護へ振り返る。

「それじゃあ任せるけど、芯護、サボったら駄目だからね？」

「サボっても終わらないし、帰れないしな。判ってるからさっさいけよ」

芯護にはなんの用事なのか知らなかったが、ミーシャは見るからに急いでいる様子だ。俺に構わずに早くいけと手を振ってやると、何故か難しい顔をされる。

「…こういうところは褒められるのにねー……」

「? どうした?」

「なんでもないわ。ありがとね、芯護」

パツと表情を切り替え、それだけ言い残して駆け足で遠ざかっていった。

自分の不始末を片付けるのになんで礼を言われるのか、芯護は首を傾げながらミーシャを見送る。今日はいつもよりやけに突っかかってきたし、外界でなにかあったのか――…、

「どうでもいいか。さっさ終わらせて帰ろう」

詮索しても仕方ない。それよりも芯護は、空腹で氣力を失いつつあったので、手早く目の前の問題を消化しようと花壇へ向き直り、

「……………」

惨状を直視して五秒ほど静止する。

あれ、俺こんなに土投げたっけ? と疑問を浮かべてみるが、答えてくれる人は自分しかない。否、答えが自分でしかない。

ミーシャを黙らせるのに躍起になっていたから加減を忘れていた。作業をしていた花壇だけでなく、隣の花壇も、通路の石畳の上も、見渡せば、人魚を象った立派な銅像を頂く噴水の所々にも土が飛び散っている。

これを一人で綺麗にするとなると、本当に夜遅くと言わず朝までかかるのではないか。夕食までに終わらそうなんて夢のまた夢じゃないか?

――ああ、でもやるって言ったしな。宣言した以上はやらないと

な。

「…頑張るか」

灯りもない暗がり、一人だけポツンと残った芯護は、寂しさをまとりつかせながらいそいそと掃除に取りかかる。

芯護とミーシャが庭園でギャーギャー騒いでいた頃。

西陽が届かなくなって暗くなった北側一階の廊下で、壁に備えつけられた灯籠に火を灯すハロル・パフェッドの姿があった。

ハロルは種火の点いたランプを持って、等間隔に並ぶ灯籠内に火を移しながら昼間のことを思い出す。

「いつまで経ってもあの子らは……あの四人は手に負えんな」

口から溢れた“あの四人”……即ち芯護達のことだが、ハロルはほとほと頭を悩ませていた。

「成績は不良、トオル以外の三人は素行も不良ときて、芯護に至っては人のことをバーコードバーコードと……ッ」

落ちこぼれ達への愚痴は最早私怨になりつつある。幼い頃から成長

を見守ってきたが、何処で育て方を間違えたものか。

育児方面に関しては、手の空いた女性教師か事務員、特待生の誰かが請け負っていた。いや、当時はまだ特待生は一人もいなかったから、上記二組の影響を大きく受けたのではとハロルは推測する。

例え子育てに経験がなくても、自分も口を出しておくべきだった。教養さえ与えていれば、目上に敬語を使えるくらいにはなっていただろうに。

「後悔先に立たず、か。悔いのないよう生きるのはやはり難しいものだ……と、」

考え事に没頭している内に、廊下の灯籠は灯し終えていた。近くには教職員室の扉も見えて、ハロルはそちらへ足を運ぶ。若葉の彫刻がなされた木製の扉を開けて中へ入ろうとして、

「おっと！」

「ああ？」

室内から出ようと扉の前まで来ていた教師とぶつかった。

ぶつかった相手は一体誰か、灯籠の仄かな明かりを頼りに目を凝らして見ると、飛び込んできたのは長柄の黒鎚。肩に担がれたそれは持ち主の身長をも越えていて、そんなものを常時身につけている職員は一人しかいない。

「申し訳ない。大丈夫ですか、たん——」

「んだよ、誰かと思ったら“バーコード頭”か。なに怒ってんだ？」

「…」

そうだ。

最初にその蔑称をつけてくれた、原因の女性教師。後頭部で結った腰まである黒髪を煩そうに払う、粗野な振る舞いと喋りがなんとも教師の名に似つかわしくないその人。

懲りずにまた“バーコード”と呼んできた彼女に、ハロルはふつつ煮えたぎる劣情を抑えながら訂正する。

「私の頭はバーコードではないと何度言えば判りますか、丹波先生」たんば

「バーコードをバーコードと言ってなにが悪いんだよ。それに、バーコードがなんなのか“この世界”の人間には判らないんだし」

「ええ、ええ、判りませんとも。その言葉を口にする時、嘲笑を浮かべて見下すように言わなければねえッ」

堪えが効かずに顔を真っ赤にするハロルとは対称的に、忠告を受けている丹波は何処吹く風だ。悠長な物腰でさりと受け流して、こめかみをひくつかせるハロルに構うことなく話を進める。

「で？ えらくでかい独り言喋ってたのはなんなんだ？ 芯護がどうとか言ってたみたいだがよ、あいつがまたなんかやらかしたのか？」

指摘を受けて、ハロルの込み上げていたものが途端に萎んだ。

声に出していたとは迂闊だった。もっと気を引き締めねばと生真面目に己を叱咤して、

生徒が問題を起こしたのに、何処となく楽しげに返事を待つ丹波を複雑に思いながら説明した。芯護が授業中に居眠りしたこと、罰として与えた草取りをサボったこと、追加で与えた庭園での手伝いも

まともにこなすかどうか、などなど。

それを聞いた丹波は、怒るところか笑い飛ばした。

「ハッ、良いじゃねーか。元気があって結構、ガキはそのくらいが丁度良いんだよ」

「またそうやって貴女は……いいですか、この『秩序の学舎』では、」

「良いじゃねえか。ここに連れてきた時の“あの状態”に比べれば、随分まともになった」

ふざけた調子を幾分か引っ込めて、丹波は懐かしい記憶を引っ張り出す。

苳護がまだ『秩序の学舎』に連れてこられる前。街の片隅に座り込んで動かなかった幼児の姿。

丹波は今でも鮮明に思い出せる。あの時の、後に『苳護』と名付けられるかつての子供は、誰の目から見ても明らかに“異常”だったと。

「戦災孤児はいつもこいつも心に傷を持つか、物心つかねえで人形みたいな面をしてるがよ、苳護はそのどれでもなかったからな。あの状態と比べりゃあ、悪ガキに育っただけ全然マシだろ」

「悪ガキに育てる必要もないと私は思いますがね。苳護の教育も、確か貴女が受け持ったのでは？」

「おう、俺好みの馬鹿に育ってくれたぜ」

悪びれもしないで笑う丹波に、ハロルは頭を抱えそうになる。駄目

だ、これ以上会話を続けても不毛だなと結論に達して、話を別の方向に変えた。

「そういえば、丹波先生はどちらへ？」

「校舎の見回りにな。今日の当番はアインだが、あいつはミーシャを呼びに行ったからよ」

「ミーシャ……ではまた？」

丹波の頷きにハロルの表情も強ばる。自分の机に向かっていた足を返して丹波の元へ戻り、その行動の真意を掴みかねた丹波は聞く。

「なんだ？」

「二人で見回った方が早いでしょう。それに“なにか起こった時”、私なら大抵のことに対処できます」

ああ、そりゃ助かる。教師の中で一番強い律神士が一緒なら安心だ――と丹波は茶化しながら合意して。

二人は職員室を出て二手に別れ、校舎内の見回りに出た。

「……あ、芯護だ。って、凄い泥と汗だね。まさか今の今まで庭園の作業してたとか？」

「お？ サボらないとはこれまた珍しい。昼のことといい、今日はどうし……芯護ー？」

「おっす、芯護！ 罰は辛かったか？ ……飯？ それならもう片付けてあるぞ。いやゝ惜しかったな、もうちょい早ければ残って……残念、それでチャラにしてやろうと思ってたのになにがだ？ おーい、芯……どぶろはぁッ！？」

「な……なに、そんなにお腹空いてた！？ え、違う？ なら………うえ？？」

「と……トオルー！！ 芯護がトオル殴るなんて滅多にないぞ………ハッ、まさか俺も！？ 待て待て芯護、なにをそんな怒ってるのか知らないけどな、気持ちを落ち着けて冷静にい…………ッ」

「そこ退け、レンザ。俺はもう寝る。じゃあな」

“神を律する器” または“律されし神の器” という意味を持つ律神器——『器』ですが、これらには大別して四つの種類があります。

一つは心から産み出される『器』——【精神】。

一つは魂から産み出される『器』——【魂魄】。

一つは体から産み出される『器』——【肉体】。

一つは世界から産み出される『器』——【自然】。

律神器とは誰かが造り出すものではありません。例えば【肉体】から派生する律神器は、使用者が長年使用、愛用した衣服や道具類などに『万理』が宿って産み出されることがよくあります。【自然】から派生する『器』は、世界の力がより集約する“脈”のような場所に置かれた物体に宿り、産み出されます。

【精神】、【魂魄】の二つは、前述と同様に産まれることもあります。基本的にはこちらの『器』が産み出される条件は別にあります。その条件とは知恵を持つ生物——つまり人間の想い、もしくは性質と適応する『万理』とが繋がって『器』を形成することです。この場合、『器』の所有者は産み出した本人となります。

律神器の力の優劣は一概に決めることは出来ませんが、所有者の能力を最大限まで高められるのは【精神】から派生する『器』です。律神士の想い、精神力が強ければ強いほどにその力を際限なく引き出すことが可能です。

【魂魄】から派生する律神器も精神と深く繋がっているため、想いの力がすべての原動力となります。しかし、【魂魄】は生まれつきの才能や人格、“性”（さが）に強い影響を受けてしまい、精神に関係なくその力を暴走させる危険性を秘めています。

【肉体】は『万理』に適応する部位の身体能力を高めるだけで真価を発揮する便利な『器』です。ですが、人の筋力には必ず限界というものがあり、引き出せる力も律神器の中では弱くなりがちです。

【自然】から派生する律神器は大自然の恵み、天災の『万理』を主とします。『器』も個々で強大な力を秘めているものが多いですが、かわりに『器』の力を具現化する『発現』の条件が他の派生器よりも複雑で、扱える者が限られます。

これら四つから派生する『器』を発現するにあたって言えることはただ一つ、強靱な精神力を養う必要があるということ。神だけが持ちうる力を人が振るうのですから、並大抵の覚悟では足りません。

律神器の力を制御出来なければ、自己の破滅を招きます。『器』の発現に挑む際は、そのことを念頭に入れて臨むことです。

それでは次に、“侵蝕”についての説明に入ります。教科書の七十五ページを捲って――…、

「ふあ、あゝあつ」

「…」

特大の欠伸で、長々と流されていた律神器の解説が途切れた。
時間帯は昼過ぎ。

現在は授業の真っ最中。

迫る昇級試験のための予習としている時間に、およそ欠伸をしていられる時ではないそんな折の妨害行為に、教壇に立つアイン・セイレの機嫌も宜しく、鋭利な視線を突き刺してきた。

隣の席に座るレンザからは、よほどその目が恐ろしいのか、献身的な意見をくれる。

「芯護、露骨過ぎるぞ。アインの目が凶器になってる。あんなの、俺なら一睨みで死ぬ！」

「睨まれただけで死ぬのか。ならまんま“見殺し”だな。はは、笑えう……くあふ」

あほー！！ と切羽詰まった突っ込みが繰り出されたが、芯護は相手にしなかった。

本当なら芯護だって欠伸もそっちのけで眠っていたところなのだ。それが出来そうもなくて、退屈な授業を聞いて辛抱している。

眠れない理由は昨日の罰だ。ミーシャが居なくなったあの後、丸々一晩かかりそうだった庭園の片付け（という名の自業自得）を短時間で済ませることに成功した芯護ではあったが、結局夕食には間に合わず、疲れであまり眠れもせず、極めつけに翌日は全身筋肉痛で悲鳴を上げるとてんこ盛りで、正直な話、授業自体抜け出そうとすら考えていた。

：廊下でハロル・パフェッドが目を光らせていたので、あえなく断念したが。

とにかく眠い。熟睡したい。なのに疲労の為か頭は冴える。座っていても身体が痛くて落ち着くことも困難となれば、欠伸だってしたくもなるさ。

なんて道理が通用するアイン・セイレでもなくて、

「：次に授業を中断させた生徒は、トイレ掃除一ヶ月の罰則を与えようかしら：」

直接叱りには来なかった代わりに、ボソッと不吉なことを囁いてきた。

トイレ掃除を、一ヶ月。

草取りの罰の比にならない、苛酷で辛い罰を、月単位で。

「―――芯護！！ お前の負けだ、降伏しろ。あの苦行は皆で分かち合ってこそだ。一人で背負い込もうとするな！ な！？」

「……判った。判ったから、欠伸しないように気をつける」

他のなにを差し置いてでもそれだけは回避したい。さすがの芯護も、今度ばかりはレンザの警告に従うしかなかった。

やむなく、芯護は軋む身体に鞭を打って姿勢を正し、真面目な態度を取り繕う。それを見たセイレも、手にした教本に視線を落として

授業を再開、

一分くらいは経過したか。

「…やってられねえ」

最速で芯護の忍耐力が底をついた。

卓上に頬杖をついて現状最も楽な体勢を選び、セイレの読経（たまに生徒からの質問）に耳を傾ける。

言葉は脳に留まらず、耳を通り抜けていくのみ。

終業の鐘が鳴るには時間も余りある。筋肉の痛みと解消出来ない眠気の板挟みの中、芯護はなんとか教本内容を読み上げるセイレの声を子守唄に、昨晚に実行した“目を瞑ればじき眠れる”作戦を試みる。

「寝るな、とは言っていないしな」

静かに眠っていれば授業の邪魔になることもないし、寝てしまえば一時でも辛さを脱せられる。

目先の安逸を求めて事後に頭が回らない芯護は、思考を止めてすっ…と目を閉じた。



……闇夜に空いた、 紅い穴……♪

歌が、聴こえた。

幼さが残る子供の声で、楽しそうな歌が。
楽しそうで、何処となく切なそうな声が。

……二つを結ぶ、獣道。跳び跳ね越える、ウサギさん……♪

歌は何処から聴こえてくるのだろうか。

右も左も違う。上も下も違う。前も後ろも、違う。

……頭の中から、響いてる？

……野を越え、山越え、刻を越え……♪

歌う声は次第に大きくなっていく。
耳元へじかに喋りかけてくるように。
判然としない俺の意識を、呼び起こそうとするかのように。

……繋ぎに往くよ、刻^{とき}兎……♪

最後の歌詞を歌い終わると、目の前の視界がザアッと開けた。

「……………ん？」

芯護は数回瞬いて辺りを見渡す。

そこは、見晴らしの良い草原の中心。

地平線の果てまで続く青々とした牧草。平坦な、あるいはなだらかな傾斜の大地から自由に生え伸びている。

澄み切った青空と白雲を除いて、見当たるものは目一杯の草しかない。いっそ気持ち良いくらいに清々しいとも思えるし、無さすぎて心もとない寂しさを感じさせもする、開放されているようで閉鎖されているような空間。

訪れた記憶などないその土地の風景に、芯護は疑問符を浮かべる。

——ここは一体全体何処だ？ 自分はどうしてこんな寂れた場所にポツンと立っている？ ここに来る前、俺は何処でなにをしていた？ …と。

次々に湧いて出てくる謎に出てくる答えはない。考えても考えても頭の中はゴチャゴチャになるだけ、焦れったださに苛立ちを覚えて考えるのを止めようかと思った矢先、

「ここは、貴方の夢の中です」

「え？」

つい先程まで誰もいなかった場所に人がいて、苺護は驚かされた。白い修道服らしきものを着込んだ、眩く輝く白髪の子供。苺護の胸辺りまでの背をしたその子は、隠れられる物陰のない原っぱで唐突に現れ、苺護より数m離れたところで微笑んでいる。人がなにもない場所からいきなり現れるとは、現実的に有り得くはないか。

「て、だから夢なのか。それなら人が一瞬で現れてもおかしくない、か……………」

言いながら、苺護は自分の発言こそおかしいと感じた。

白髪の子供は夢の中だと言ったが、夢と言い切るには真実味リアリティが有り過ぎる気がする。

暖かい風がそよいで肌に触れる感覚。

風に運ばれた草の匂いが鼻腔をくすぐる感覚。

どれもこれも夢のものとは思えない。詐欺にでも遭うか、騙されているような気になってくる。

納得のいかない苺護は、試しに頬をつねってもみるが、

「……………痛い」

痛覚あり。

イコール、現実？ と疑いまくると、子供は愉快そうにクスクス笑った。

馬鹿にされたと思い、苺護はムツとして食いかかる。

「なにが可笑しいんだよ」

「いえ……………判りやすく申し上げると、ここは貴方の世界です。貴

方の認識を反映した世界であり、貴方が意識する限り、それらは現実のものとなります」

「あ？」

子供は、子供とは思えない事務的な口調で小難しいことを並べていく。理解力に乏しくてちんぷんかんぷんな芯護を気遣う様子はなく、淡々と喋り続ける。

「貴方は頬をつねってみせましたが、実際に『起きている』時に行えば痛みが生じるはずです。“外的要因を加えれば必ず反応が返る。それが当然のこと”……そう『認識』していることが夢の世界にも反映されて、感じるこのない『痛み』を感じたのです」

つまりは錯覚ですよ——と締め括って。

ニツコリと笑顔を見せる子供だが、芯護に理解出来たのは“勘違い”の部分だけだ。脳内をグルグル引っ掻き回される気分に陥る傍ら、これは夢で錯覚で勘違いで……と話を半ば無理矢理呑み込んだ。

「これが、全部俺の勘違いか。俺の……認識？　を反映した、俺の世界………」

青空と、白雲と、草原だけの世界。

芯護はもう一度自分の世界をじっくりと見渡して、一言。

「なんにもないな」

「なにもありませんね」

子供も同意した。

そこで今度は、ようやくではあるが、子供の方へ注意を向ける。当たり前のようにそこにいる子供。男なのか女なのか判別つかない幼い顔を、芯護は知らない。『秩序の学舎』以外の人間に面識はないから外界は当てはまらないし、生徒の内の誰かを忘れてしまったのか。

それ以前に、夢に現れているということは芯護が作り上げた虚像な訳だから、やはりこの子供とは過去に出会ったことが、

「ありませんよ。私と貴方が出会うのは、これが初めてです」

キツパリと否定された。

口に出してもいないのに。

芯護の思考を見透かして、口にするより先んじて応えてきた。

——夢だから、なのか？

自分の考えを読み取られることも、会ったことも見たこともない子供が現れるのも、自分の認識を反映した世界と謳っておきながら、あるのは空と雲と草だけなもの。

そうだ——反映するというのはなら、何故真っ先に『秩序の学舎』が浮かんでこない。

何故レンザやバーノットやトオル、ミーシャやいけ好かない気取り屋、丹波やハロルといった教師達、その他諸々が現れない。

芯護の中身は、どうしてこんなにも矛盾で溢れている——？

「今の貴方には理解出来ません。“微睡んだまま”の貴方では」

またしても、見透かされる。

ここまでくると薄気味悪さすら感じてしまう。現実と幻覚が入り乱れた世界で、謎めいた子供が不可解なことを喋る、なんて。

内心、夢でもなんでも良いから早く目覚めて欲しいと願い、子供の言葉にも惹かれて芯護は問いかける。

「どういう、意味だよ」

「…」

子供は答えない。

現れたその時からずっと微笑み、崩さずに芯護のことなど意に介さないで一人語る。

「準備は整いました。多少強引な干渉ではありますが、『刻』が動き出した以上、やむを得ない処置です。それに…、修正は可能です」

「だから、どういう意味だよ」

芯護は段々腹が立ってきて噛みつく。

きっとまた相手にされないだろうと予感しながら。

それなら、こちらも相応の怒りを見せようと待ち構えて、

「気にしなくていいよ。どうせここでの出来事は消しちゃうから」

予感は的を外した。

これまでの事務的な口調ではない、外見通り、年相応の喋り方で子供は話した。

とても無邪気に。

とても楽しげに。

とても……悲哀を滲ませて。

「ぴょん♪」

かけ声と共に。

子供が眼前まで迫った。

瞼を見開きする余裕もなく。

一瞬で、子供の白い髪と見上げる笑顔が視界に入る。

同時に、世界が紅色に染まった。
くれない

……ぴょん、ぴょん、跳ねる、ウサギさん……♪

また、あの歌。

子供が歌っている。
軽やかに口ずさみ。
声音そのものは、頭に、直に。

……繋ぎに往くよ、刻鬼……♪

とき、うさぎ？
つなぐって、なにを？
おまえは、なに……？

…道越え、土地越え、界を越え——……♪

こどものかおが、すんぜんまで、
むねのまんなかに、てをあて、
みずにつけるように、からだをすりぬけ、
はもんが、ぜんしんに
うちがわが、ぞわりと、
たましいが、ざわざわと、
おれのめと、こどものめが、
あかいろの、けもののめが、

す
い
こ
ま
れ
――…、

「さあ、目を覚まそう？ …――《愛せし者》」

「――！」

ガクンツと杖にしていた腕から顎を落として、芯護は目を覚ました。教室の、波状に並べられた弧を描く長机の一つの一角。授業は終わっているのか生徒の数はまばらで、皆次の授業の為に教室を出ている。

芯護は廊下に出る生徒達をボンヤリ見つめ、頭を振って眠気を払う。……不思議な夢を見た気がする。どんな夢だったのか上手く思い出せないが、寝起きにも関わらず気分が変に高揚している。夢のせいだろうか

昨日に見た夢に似て、見た気はするのに記憶に残っていない、不思議な夢。

「疲れてんのか、俺？ ……疲れてたな、そういや」

うつ伏せていた身体を上げて各所の筋肉が強ばるのを感じて、そちらの方を思い出した。座った状態で眠り体勢を変えなかったせいで、さらにピキピキになっている。

芯護は立ち上がって、辛さを我慢して腕と背を伸ばす。肩と腰も捻って身体をほぐし、次は体育の時間だから適当に動かすかー、と呑気に動き出して、

「芯護…」

「レンザ？」

隣の席にいて、眠っていた芯護が起きるのを待っていたレンザにくわした。

驚くほど悲しそうな表情で。

身内の訃報でも聞かされたような、しめやかな顔で、女性教師の意思を伝える。

「トイレ掃除、一週間だって」

「…」

しばし、言葉を失い。

なんのだよ、授業の邪魔はしてない、静かにしてただろ、と反論しようとしたが、

「…なん」

「居眠りは論外」

先にトドメを刺された。

ガラス越しの空は、誰かさんの心情を表した悪天候になりつつある。その誰かさんは校庭に仁王立ちで腕を組んで、正面に据えられた正座中の二人を厳粛な面持ちで見下ろしている。冷や汗混じりの二人へ、誰かさんこと芯護は、

「言いたいことがあるなら言え。怒らないから」

「…もう、怒ってらっしゃ」

ズンッ！ と足を踏み鳴らして口答えしたバーノットを黙らせた。同罪で正座させられていたトオルは、思いきって怒れる芯護に訊ねる。

「ごめん、本当に心当たりないんだ。……怒らせるようなこと、した？」

「さあな。自分の胸に手を当ててよーっく考えてみる。運が良ければ思い出すかもな」

芯護の返事はにべもない。

昨晩からトオルとバーノットに対して怒り心頭な芯護は、午前中もずっとこんな調子でいた。教室では席を離して座ったり、顔を合わせれば凄まじい形相で迎えたりと陰険な態度で接して。

いつものおふざけとは違う本気の怒りに苛まれ、遂に耐えきれなくなった二人が更衣室で勇気を振り絞って声をかけたことで、現在の構図が出来上がった。

渦中から身を遠ざけて見守るレンズは終始ハラハラ、自分に飛び火

しないよう細心の注意を払いながら芯護をなだめようと努めるも、

「芯護ー…？ その辺で許してあげたらどうかなー…。ほらほら、まだ基礎トレ終わってないし、グレアムじいさんに見つかるしさー
ー……」

「見つかったって、グレアムは腰が悪いから逃げるのは楽だし。余計な横槍入れんな」

芯護達からほど遠い場所にいるクラスメイト達、その先頭で指揮を取る老人教師を指差しても、芯護は聞く耳を持たず。

レンザは心の中で、逃げても罰則からは逃げられないんだけどなーと真っ当に思う。言っても我が身を危険に晒すだけだから、声になかったが。

レンザの懸命な説得（本人主張）を軽くあしらひ、芯護は改めてトオバノを向いた。二人はなにが芯護を怒らせたのか思い至らなくて、けれど怒っている以上はなにかしたんだろうと反省して、しおらしく座っている。

——考え込まなくてもすぐ判ることだろうに。バーノットはいつもからかっているから、トオルはからかっている自覚がないから、逆に盲点なのだろうか。

放つといってくれと言ったのに、要らない節介を焼くなどっておいたのに。

こともあろうに、第三者に漏らすんだもんなあ………ッ。

「……お前らさ、ミーシャに話したろ」

「「あ」」

言われてやっと気づいて、二人は間拔けた顔で手を鳴らした。

リアクションが癪に障ったので、芯護は拳骨をお見舞いした。

「あが!? ……ひ、ひは、ひははんらア……………(し、舌、舌噛んだあ……………)」

「う、お、お……ッ。ちょっと相談したただけだろう? 俺達は良かれと思っ……」

「何が良かれだ、誰が恋愛に尻込みしてるだ! お前らだけでも厄介なのに、ミーシャの奴からもあれこれ言われなきゃならなくなっただぞ。それでなくても、周りにベラベラ喋るような真似しやがって……………!」

言っていない、言っていないとトオバノは必死に弁明するが、芯護の二人への信用度は底辺まで下がりきっている。

相手の本音を聞くには拳で語らねばならない。そんな非常識で偏った育ての親の教えを守り、芯護は二撃目を、

「本当だってば! ミーシャなら他の誰にも言わないと思ったし、ミーシャ以外に芯護のこと相談するはずないって!」

「そうそう、下手に噂を広めたら後が恐いしな。恋する芯護が皆から寄ってたかってからかわれるのを、ものスゴく見たかったのに、俺我慢したんだぜ!??」

暴力の脅しは思いのほか効果てきめんで、予想以上の本音が聞けた。取り敢えず用意していた二撃目は墓穴を掘ったバーノットの脳天に振り下ろしておいて、芯護はいくらか怒りを治める。

芯護本人は恋をしているつもりはないのに、何故周りはこちらも取り沙汰して、自分が気を揉まなければならないのか。釈然としなくて

また苛立ちが募る。

が、情報漏洩がミーシャ一人に留まっていることについては、そこは樂觀視出来て良かった。ミーシャは人の秘密をおいそれと吹聴する性格ではないし、油断ならない悪友三人を監視しておけば、大事には至らない。

それに、まだ考えうる最悪の事態には陥っていないのだから。

“奴”に知られるよりは、ミーシャの方が断然マシなのだから。と、安堵したのも束の間。

「へー、落ちこぼれーズの特攻隊長が恋のお悩みねえ。はは、無理無理」

軽い調子の、気障ったい声が聞こえて。

途端にとびっきりの嫌らしい顔をした芯護が振り向けば、見たくもないのに見慣れた金髪が立っていた。

お洒落のつもりなのか、手を怪我をしている訳でもないのに常時包帯を巻きつけて、余分に長い布を腕から垂らした青年。手はズボン両側のポケットに突っ込み、背は反らして傲岸不遜な態度を以て芯護達を見下す。

噂をすればなんとやら、芯護が今一番に会いたくないその人、ディスケルグだった。

授業中なのも構わず校庭に立ち入ってきたディスケルグは、一学生の一団から離れてサボっていた芯護ら四人の会話を盗み聞きしていたらしい。ニヤニヤと不快な笑みを貼りつけて注目して、芯護の不機嫌を悪化させる。

芯護は、怒るだけ労力の無駄だと自らに言い聞かせ、

「なんか用かよ、ディスク」

煩わしそうに訊ねると、ディスクケルグはムカつく仕草でチツチツと指を振って訂正してくる。

「なっていないな、落ちこぼれ。俺の名はディスクケルグ・リカル・コールラストだ。呼ぶならディスクケルグ様、ディスク様、卑しいワタクシめのご主人様、だ。繰り返そうか？」

「で、用がないなら帰れよ、“気取り屋”」

相手にしてられないので辛辣に受け答えた。

ディスクケルグは眉尻を上げて睨んできたが、すぐに気を取り直して、用件ならあるさと続ける。

どうせ馬鹿にしに來ただけだろうが、

「落ちこぼれーズが授業から落ちこぼれてるみたいだから、ありがたくもこの成績優秀優良のディスクケルグ様が、嫌味を聴かせてやろうと思ってね」

予測は百発百中で大当たり。

芯護、レンザ、バーノットは当然頭にカチンときて、三人は口々に攻め返す。

「ウツゼ。そんなに喋りたいなら他所に行け。消えろ」

「でかつ鼻伸ばした天狗は山に帰れ！ 二度と里に下りて来んな！
！」

「俺らより後輩のくせに威張るよなあ。その性格は本気で尊敬する。うん、反面教師にしたい」

人の良いトオルですら苦笑いを隠せず、

「コールラスト先輩、嫌味過ぎますって」

三人よりは穏やかだが忠告して。

四対一という数の理で押しきろうとする落ちこぼれ組に、エリート特待生の余裕は消えなかった。

刃向かってきた四人へ一人ずつ、熨斗のしをつけて返却する。

「芯護。他所で喋っても仕方ないだろ。俺のご高説を聴かせるべき人間の屑は、ここにいる落ちこぼれーズ以外にいないんだから」

宣言通り嫌味ったらしく、

「レンザ。天狗は、地方と信仰によっては神格化されているんだ。神と同列に見てくれるとは嬉しいね。存分に敬いたまえよ、愚民」

ネチネチといやらしく、

「バーノット。確かに俺は『秩序の学舎』に来て五年しか経っていない。けれど、創立時期から『秩序の学舎』にいて万年一学生のお前達と、一年も経たずに三学生まで昇って、適性試験も楽々合格。堂々の特待生入りを果たした俺と、さてどちらが格上かな？」

優越感を惜しげもなく漂わせて、

「トオル。お前は特に言うことはないけど、敢えて挙げるとするな

ら、この俺を敵に回す奴は万死に値するってことだ。利口良く胡麻をすれよ、落ちこぼれから下僕くらいには格を上げてやるから」

ついている隙を微塵も与えず、

「「……………」」

四人は、ぐうの音も出なかった。そんなに喋りたいなら他所に行け。消えろ」

「でかつ鼻伸ばした天狗は山に帰れ！ 二度と里に下りて来んな！
！」

「俺らより後輩のくせに威張るよなあ。その性格は本気で尊敬する。うん、反面教師にしたい」

人の良いトオルですら苦笑いを隠せず、

「コールラスト先輩、嫌味過ぎますって」

三人よりは穏やかだが忠告して。

四対一という数の理で押しきろうとする落ちこぼれ組に、エリート特待生の余裕は消えなかった。

刃向かってきた四人へ一人ずつ、熨斗のしをつけて返却する。

宣言通り嫌味ったらしく、

「芯護。他所で喋っても仕方ないだろ。俺のご高説を聴かせるべき人間の屑は、ここにいる落ちこぼれーズ以外にいないんだから」そんなに喋りたいなら他所に行け。消えろ」

「でかつ鼻伸ばした天狗は山に帰れ！ 二度と里に下りて来んな！
！」

「俺らより後輩のくせに威張るよなあ。その性格は本気で尊敬する。うん、反面教師にしたい」

人の良いトオルですら苦笑いを隠せず、

「コールラスト先輩、嫌味過ぎますって」

三人よりは穏やかだが忠告して。

四対一という数の理で押しきろうとする落ちこぼれ組に、エリート特待生の余裕は消えなかった。

刃向かってきた四人へ一人ずつ、熨斗のしをつけて返却する。

「芯護。他所で喋っても仕方ないだろ。俺のご高説を聴かせるべき人間の屑は、ここにいる落ちこぼれーズ以外にいないんだから」

ネチネチといやらしく、

「レンザ。天狗は、地方と信仰によっては神格化されているんだ。神と同列に見てくれるとは嬉しいね。存分に敬いたまえよ、愚民」

優越感を惜しげもなく漂わせて、

「バーノット。確かに俺は『秩序の学舎』に来て五年しか経っていない。けれど、創立時期から『秩序の学舎』にいて万年一学生のお前達と、一年も経たずに三学生まで昇って、適性試験も楽々合格。堂々の特待生入りを果たした俺と、さてどちらが格上かな？」

つけいる隙を微塵も与えず、

「トオル。お前は特に言うことはないけど、敢えて挙げるとするなら、この俺を敵に回す奴は万死に値するってことだ。利口良く胡麻をすれよ、落ちこぼれから下僕くらいには格を上げてやるから」

「「「……………」」」

四人は、ぐうの音も出なかった。

言い返せないのではなく、よくそこまで人を貶^{けな}せるものだとは半ば感心すらしてしまい、喉から声が出なかった。

ディスケルグは才能に恵まれている。

『秩序の学舎』へ入校する前から『器』を発現して律神士となり、何をやらせても他の生徒より頭四つ分は秀でていた。性格の悪ささえ除けば、特待生一、いや『秩序の学舎』一の秀才と褒め称えられ、でも何ら不思議ではない才覚の持ち主だ。

生まれ持った性格を視野に入れなければ、だが。

それさえ無ければ万人に愛されただろうに、彼の性格に改善の余地が残されていないのは非常に悔やまれる。

本人曰く、

『——天は人の上に人を造らず、但し、この俺様を造り賜うた』

だそうで。

誰より、何よりも己れこそが唯一の存在。至上にして最上なのだと公言してはばからないディスケルグは、今日も今日とて他人を見下すのだ。

正直、付き合ってられない。

芯護もトオルらも、もう面倒だからひたすら無視しね？

と暗黙の

内に了解を交わし、そつと距離を置こうとする。

「あれ、何処に行くんだ？　口で敵わないからって逃げなくても良いだろう？」

気取り屋がしつこく言い寄って来たが、芯護達は無視する。

空気扱いをされたディスクルグは、四人の態度を見て取り、そうくるか、と頷く。引き下がる気は毛頭ないらしく、一笑に付して、

「話と違うなあ。気高き【純心】の使い手くんは、血迷った剋帝陛下にも怖れることなく突撃する“英雄”だって聞いたんだけど……：おっとそうじゃなくて、居眠りした挙げ句にシンバラシーおとぎ話を聞かせてくれた方の“英雄”だったかな？　それともどちらともか？　どうなんだ、え・い・ゆ・う・？」

「……………」

「（抑えろ芯護！　相手にするな！）」

挑発で頭に血が上る芯護を、レンズが腕を掴んで踏み止まらせた。手を出せば負け、そう目で訴えている。

芯護の中では、馬鹿を殴りたい気持ちと我慢して見返してやりたい気持ちとがせめぎあっていた。ここで売り文句に買い文句でかかっていくのは容易いが、それではディスクルグの思う壺だ。相手にしないことこそ、この場合のもっとも冴えたやり方だろう。

辛うじて後者を選択した芯護はぐっと堪え、ディスクルグは少し意外そうな顔をした。

「おや、大人。まあいいさ。億年底辺で『器』も発現出来ない最下層の諸君らを、これ以上苛めるのも忍びないし。俺って寛大だし？　見逃してやっても良いぞ、腰抜け」

「…やっぱり殴る」

「心変わり早いよ！ ストップ、ストップ！！」

進路を変えて拳を握る芯護をトオルが急いで阻止、レンズとバーノットも加わって必死に止めに入る。

止めなければいけない。ディスケルグはまがいなりにも『律神士』なのだから。

「待て待て芯護！ 気持ちには判るけどな、相手にするだけ損だつて！」

「そうだぜ。それにいくら偉ぶったって、どうせあいつは外界組の律神士の中で一人だけ【肉体】の『器』なんだからさ」

二人は、トオルが芯護の進行を妨げている間に気を逸らそうとするが、芯護の耳には届かなかった。自分が優越感に浸りたいが為にトオル達を侮辱されるのが許せなくて、芯護はディスケルグを強く睨みつけ、

面白がって鑑賞していたディスケルグの表情が消えていることに気づいた。ディスケルグの視線は真っ直ぐバーノットに向き、そのことに気づかないバーノットは、

「そりゃあさ、発現出来るのはすげえよ？ でも、律神器中最弱の『器』が使えるってだけで、そこまでデカイ顔されてもさ。みつともなくてこっちが恥ず——」

目を見開いたまま、突然黙った。いや、黙らされた。

バーノットの眼前にはディスケルグの足がある。先程まで普通の靴

を履いていた足が、今は膝当たりまでを覆う頑強な鎧を纏った脚が、バーノットの鼻先に突きつけられている。

音も風もなく、気配も匂わせず。ポケットに入れた手もそのままの状態で。

両者の距離を瞬く間に詰める神業を披露したディスケルグは、それを誇りもせずに、ただ問いかける。

「…発現時の『真銘』（しんめい）破棄、『器』の形状変化を0・二秒で終えて、所々の説明は到底理解不能だろうから省こうか。お前の寸足らずな鼻に踵をつけたのは一秒足らずってところだが……、聞かせて貰おうか。——この俺以上の天才が、『秩序の学舎』にいるのか？」

「…ッ」

バーノットは、毒気を抜かれて答えられない。レンズ、トオルも身体が硬直して動けずに押し黙る。

ただ一人、芯護だけは怯むことなく動いていた。

一瞬で四人の前に移動したディスケルグのことを、わざわざ殴りやすい位置に来てくれた、程度にしか捉えなかった。

実力の差は歴然、それでも構わずに芯護は振りかぶる。対するディスケルグも嘲笑うことはしないで、五月蠅い虫を叩き潰すような気持ちで脚を振り上げる。

芯護の拳は、脚の長さで勝るディスケルグには届かない。

結果は目に見えていた。

「そこまでしておけ、デイスケルグ。でなければ、我輩も『器』を使わなければならんぞ?」

デイスケルグの脚と芯護の拳は、ゴツゴツした大きな両の手に防がれた。

手の持ち主は、鍛え抜かれた巨軀に側頭部だけ白髪を残した禿頭の老人教師、グレアム。凶暴な熊でも連想させそうなグレアムは、身体もさることながら目付きも険しいものとなって芯護とデイスケルグを睨んでいる。

より厳密に、律神器を発現しているデイスケルグを。

「律神士はその強大さ故、むやみに力を行使用するのを控えねばならん。己れを律せられん者に神を律することは叶わんのだ。判っておるか、デイスケルグ」

芯護には何も言わず、手も離さず、デイスケルグにだけ叱責を浴びせる。それが無性に気に入らないし、手を掴まれたままなのも嫌で芯護は抜け出そうともがくが、グレアムの握る手はピクリとも動かない。

一方のデイスケルグは、既に剣呑な雰囲気捨て去って、また軽薄な笑みで受け答える。

「アッハッハ、百も承知だよ、グレアム。俺は自分のことを誰よりも御しきれているさ。それでこそその天才、だろ?」

「ふむ、ではもう一つ。特待生が授業過程全免除の利権を持っていたとしても、他のクラスの授業を妨害して良い理由にはならん。お主は此処で何をしておる？」

「…あゝ」

グレアムの返しにディスクエルグは言い淀んだ。これは言い逃れは出来そうになく、ディスクエルグが出した答えは、

「……………【俊足】へソルシンクゝ！」

「ぬ！？」

グレアムの掴んでいた脚ごと、ディスクエルグの姿は消えた。逃げの一手を打ったようだ。

いつの間にか空を掴まされたグレアムは渋い顔で、逃げてでも罰則からは逃れられんというに…とレンザと同じ考えを口にする。それから、

「いい加減離せよ、グレアム」

「む？ おお、すまん、芯護」

ぶすつとした顔で申し入れる芯護を見て思い出し、やっと手を離れた。

解放された手をブラブラ振って、芯護は苦虫を噛み潰す。グレアムが止めに来なければ、やられていたのは自分の方だった。

ミーシャに感じた時と同じ溝だ。選ばれた人間と凡庸な人間との、絶対的な差異だ。

…悔しい。

今までもディスケルグとは衝突したことはあるし、殴り合いだって何度もしてきた。何度だって負けた。いつもの通りだ。

でも、今日は違った。いつもなら気にしないのに、変に意識してしまふ。

ディスケルグや大勢の律神士が持っているその『力』が、この上なく羨ましい。

俺もあんな力を手に入りたい。

この手に納めて、使ってみたい。

あの力で、俺は――…、

「……手にしたって使い道ないだろ。アホらしい」

律神器の力を得たいだなんて、羨んだことはあっても欲しいと思ったことはない。

これまでも、これからも、ある筈がない。

込み上げてくる何かが溢れないよう蓋をして、考えるのを打ち切った忖護は、天敵がいなくなったことで調子を取り戻したレンバノに目をやる。

二人はディスケルグを撃退してくれたグレアムに感謝の意を伝えている。

「いやゝ、さっすがグレアムじいさん！ あの生意気なディスクをギャフンと言わせるなんて、禿げ頭は伊達じゃない！」

「何処かの国の騎士団長やってたって話は本当だったんだ。目から鱗だなー」

うん、それって褒めてないだろお前ら、と忖護が内心で突っ込むと、グレアムもそう思ったのか呆れて、親指と人差し指で両目の瞼を押

さえながら訊ねる。

「お主らは、我輩の授業も聴かずに何をしておるか？」

「「「……………」」」

一同、無言。

ディスケルグが現れたお陰で失念していた。そうだ、グレアムに見つかっても駄目じゃないか。

グレアムはもう怒りを通り越して爽やかな笑顔を見せて、盛り上がる腕の筋肉をことさら盛り上げて準備万端。
芯護達に残された道は、一つしかなかった。

「——逃げろ!!」

罰則がどうのこうのと考えていたレンザからの一声で、四人は一斉にその場から走り出した。その行動を読んでいたグレアムは先回りして、

魔の手を掻い潜っていく悪ガキを逃すまいと全身を捻った直後、腰元からグキリと痛々しい音を響かせて。

「ふぐお!?! こ、腰があアア……………ツツ」

「「……………」免なさい!」

「謝るな、トオル。必要な犠牲なんだ…」

「バノ、勝手に死なすなよって。ってー、あれ? 芯護は?」

皆が非情にもグレアムを置き去りにして走り去る中、芯護は足を止めてある方向を見つめた。

本校舎北寄りの一階。窓の向こう側の廊下を早足で歩く二人組がいる。二人組は、アイン・セイレとミーシャだ。

注目するような組み合わせではなく、別に目を奪われたのでもなかったが、二人の顔がかなり深刻なもので芯護の印象に残った。そういえば昨日の夕方にもセイレはミーシャを呼んで、その時もミーシャから焦りの色が窺えなかったか。

芯護が行き先を目で追っていくと、二人は奥に続く廊下へ曲がって見えなくなる。その先には確か、渡り廊下で校舎と繋がる診療塔があった。『生命力』を操る律神士ミーシャがそこへ向かったということは、誰か怪我を負ったのだろうか。昨日と今日と続けて？

「何なんだ、一体…」

胸の内がざわめく。

これから良からぬことが起こりそうな、不吉な予感がしてならない。言い知れぬ不安が芯護を襲い、それが急速に迫っていると感じる。恐ろしい予感の背後にまで近づいて、ハッと振り返った芯護は、

ガッ！と。

老体を引きずってきたグレアムに、頭を鷲掴みにされた。

「……………応急処置、終わりました」

長く息を吐いて、【豊穰】の手袋を外しながらミーシャは顔を上げた。

診療塔の一階、人が裕に百は入れる一室。窓から見える空は暗雲が立ち込めて雨足が近い。部屋も大分暗くなり、天井に吊るされたいくつかの灯籠には火が灯されている。

嫌な天気だ、とミーシャは思う。太陽を遮る黒い雲が、光と一緒に幸福な気分も奪っている気がする。錯覚に過ぎないが、目の前の光景と合わせてみると、より一層思い込んでしまう。

落ち沈んだ気持ちでいるミーシャの隣では、アイン・セイレが引き継いで働いている。手を動かすのを止めず、作業をしたままミーシャに話しかける。

「ご苦労様ね。貴女がいてくれて助かるわ」

「あ、手伝います。…私は、そんなに役に立てていません。進行をなるべく遅らせるだけで精一杯で」

それでも充分よ、とセイレは諭して励ましてくれたが、ミーシャは楽観的に取れなかった。

状況は刻一刻と悪くなっている。

早く手を打たなければならぬのに、有効な手を打つことが出来ない。これ以上の悪化を遅らせることは出来ても、防ぐことが出来ない。では、喜べる筈もない。

もどかしさが増す一方だ。

二人の前には、縦六つ、横十二で並べられた寝台がある。そのほとんどに、手当てを受けた生徒達が寝かされている。

生徒達は全身の至るところに、あるいは全身に包帯を巻かれていて、気持ちの悪い膿らしき汁を滲ませている。全員、アイン・セイレの律神器で眠らされているが、時々苦しげにうなされる。

……ここ最近、一部の生徒達が発症し出した奇妙な病だ。原因も治療も見つからず、治すことに関しては一目置かれているミーシャでも、遅延が限界の難病。

空気中から感染する病気ではなく、しかしある懸念によって一般の生徒には情報を伏せ、病人達をこの場へ隔離している。その懸念とは。

セイレは、治療を終えて寝台から体を離し、陰惨めいた室内を見て固い表情を作る。

「……被害は広まるばかりね。貴女にも苦勞を掛けるわ」

「いいえ、私なら全然。それよりも先生、やっぱりこれ……」

直に手を施したミーシャはそれとなく察して、セイレも診察を重ねる内に疑惑を確信へ変えていた。

ここにいる生徒達は、単なる流行り病に冒されたのではない。通常の病気なら、ミーシャの【豊穰】で充分対処出来る。

律神器の力を以てしても治療出来ない奇病。その原因となりえるのは、必然的に数も限られてくる。即ち、

「——律神器でしょうね。それも恐らくは『禁器』（きんき）。有する万理は“病魔”の一種でしょうけれど、『秩序の学舎』保管庫のものではないわね」

元凶は律神器、そして『秩序の学舎』が所有する『器』ではない。それはつまり、“外部の何者かが島に侵入した”ことを意味する。有り得ないことだ。

島を取り囲む『中逢海』は、“ある理由”で航海が不可能とされている。島と外界を結ぶ唯一の道は『秩序の学舎』教師が管理する『転送器』のみ。部外者は勿論これを使えず、ではどうやって侵入してきたのか。

不可解なのはそれだけではない。

「これだけ事を起こしておきながら、痕跡を残さずやり仰せているなんて、ね。律神器を発現すれば、なにがしか力の波動を放つものだけれど……気配もなにも感じないなんて不自然過ぎるわ」

奇病を発症した生徒は全員、発見された時すでに意識はなく、誰も襲われた現場を見ていない。犯人の行方は知れず、校舎、島内を隅々まで搜索したが、手掛かりは一つも得られない。

犯人を捕らえる手段がない、これは大問題だ。増え続ける被害に歯止めを掛けられないということなのだから。

「セイレ先生……」

深刻な顔で俯くセイレに、ミーシャもなんと返せば良いのか判らない。

島の外から誰かが入ってきたことはこれまでになかった。犯行を悟らせず、悪意を持って『秩序の学舎』の生徒を攻撃されたことも。目的、手段、動機……どれも皆不明瞭で、出来ることと言えば、

被害が出てから早急にままたらない治療を施し、急場を凌ぐことくらいか。

犯人の動向が掴めない今、どうしても後手に回らざるを得ない。こちらから先手を打てれば、事態を好転させられもするが…。

そこまで思案を巡らせて、ミーシャはふと重要なことを伝え忘れていたのを思い出した。好転させられるかは判らないが、闇に紛れる侵入者を見つけ出す方法を。

そのことを話すと、セイレの表情にも明るさが戻った。

「先生、話しそびれていたんですけど、クルミアがもしかしたら【透視】を発現出来るかも知れないと言っていました」

「【透視】を？ それは朗報ね。長年発現者が現れなくてやきもきしていたの。なるべく急いで貰えるよう頼んでおいてくれるかしら」

「はい！」

ほんの僅かにだが、先行きの不安が払われた。自分の力が及ばないのは依然として歯痒いが、ミーシャは良しとしておく。頼みの綱であるクルミアが間に合うまで、自分も出来ることをしなければ。自分に、出来ることを。

「…、」

「ミーシャ、包帯の取り替えは私がするから、貴女は教室に戻りなさい。連がまた授業を空けると言い出して聞かなかったから、代理で監督して欲しいのだけれど……ミーシャ？」

返事が来ないことを不審に思い、セイレは視線を超越す。ミーシャは気まずそうな、思い悩んだ様子で手を組んでいる。

こんなことは前にもあった。ミーシャが特待生に上がってから幾度も繰り返されたこと。この頃はめっきりして来なかったので諦めたと思っていたが、そうはいかなかったらしい。

セイレは、大体の予想を頭に浮かべながらミーシャへ訊ねる

「どうしたの？」

「セイレ先生……校舎内と島の見回り、なんですけれど…」

ああ、やはり。

セイレの予想は的中した。

何度も話し合って、何度も駄目なものは駄目だと言った。それでも意思を曲げられなかったか。

悪いことではない。いや良いことだ。ミーシャのそういうところをセイレは高く評価しているし、反対するほどのことはない。

でも、セイレの返答は前回と変わらなかった。

「貴女の気持ちも、特待生の気持ちも、とてもありがたいわ。でも貴女達はまだ子供。“外界”でのことも、ブロイツから聞いています。辛いでしょうが」

答えはノー。

セイレが言い終わる前にミーシャも予想をつけていて、すぐさますいませんと頭を下げて部屋を後にする。騒がしくないような小走りで扉まで向かい、くぐって、静かに閉めた。

部屋に残ったセイレは、ミーシャに対しての感謝と申し訳なさで一杯になる。寝込む生徒達の包帯を代える為手早く取り掛かり、部屋を出ていく後ろ姿を脳裏に浮かべて、小さく呟いた。

「後五年……最低でも五年は待つて。それまでには…」

――、

それから一週間。

裏で何かが蠢き、そんなことは露知らない芯護は平穏な毎日を過ごした。

耳に寄ることといえば、校庭での一件でディスクलग“も”罰を受けることになり男子生徒らが歓喜に湧いたとか、バーノットが特待生クルミアに玉砕覚悟で突っ込み儂く散ったとか。

芯護自身は、アイン・セイレとグレアムの罰に勤しみながら、授業共々適当にサボり。

ハロル・パフェッドの授業に見た夢は、しばしばからかわれることもあったので忘れることはなかったが、内容の方は自分が英雄になった、程度しか思い出せなくなった。

あの夢から、一週間と一日が過ぎた。

今日も変わらぬ一日が始まる。そう誰もが思っていた、その日の午前中。

変わらぬ日常に変化が訪れる。

保たれていた平穏が、音を立てて崩れていく。

芯護を取り巻く世界が移り変わる。その兆しが現れて、

——芯護の覚醒^めの“刻”が、やって来る。

△▽ | **12** (後書き)

△▽ | 12

少女は、誰よりも早く異変を察知した。

もっとも早く、それでいて、遅すぎた。

どれほど急いだとしても間に合わない。事は確実に起こってしまう。

そうだとっても。

最悪の事態だけは避けなくてはいけない。そうしなければならぬ。

だから、少女は言いつけを破った。

隠しておきなさいと言われた、教師との約を破り捨てて。

少女は、連日続く悪天候の只中へ飛び出した。



丹波が授業を放棄した。

…ではなくて。

今日も“また”補習なのだ、代理で来た特待生の誰かが説明した。クラスの大半は授業が潰れたことに喜び、丹波が来ないのは何でかを知りたがった。

丹波は授業を空けることが多い。これまでも週に一回は休んで姿を消し、近頃はその回数を頻繁に増やしている。どうも外界に赴いているらしいことが生徒の調べで判ったのだが、外界で何をしているのかまでは調べようがなくて、こういう時は決まって芯護が事情を聞かれる。

聞かれても芯護は困ってしまう。芯護と丹波は、口調や性格が似通った為に本当の親子のように見えるから誤解されがちだが、二人は普段からそんなに顔を合わせていない。住む部屋は芯護が『秩序の学舎』に入校した特別々になっているし、お互いに会いに行くことがないのだ。二人の仲が悪い、のではなくて、校舎内でも鉢合わせる機会があるから、いつでも会えるから必要性に駆られない、それだけのことだ。

それに、芯護は丹波が外界で何をしていようと気にはしなかった。あの丹波が人に言えないような、悪事に手を染めるようなことをするとは思えないからだ。

「…だから、俺も知らないって言ってるだろ。本人に聞けよ」

「だって教えてくれないし……」

「なら諦めろ。ほら、帰った」

補習とはいえ、授業中に自分の席を離れて群がるクラスメイト達に囲まれた芯護は呆れ、煩わしそうにあしらう。本来なら特待生が諫めてくれるべきところなのだが、教卓を前に立つ特待生女子はやる気ゼロで、私は関わりありません、と傍観を決め込んでいてまるで役に立たない。

仕方ないので質問責めを知らぬ存ぜぬで堪えていると、皆は不満げな様子だったが、諦めて席に戻っていった。それらを見届けた芯護は、だるそうに身体を机に預けた。

今日の芯護は調子が上がらない。というのも、いつもなら嫌っているうほど寄ってきて騒ぐ三人がいらないからだ。

バーノットは数日前の玉砕から立ち直れず自室に籠っているから良いとして、レンザとトオルは何処へ行ったのやら。罰則でトイレを掃除している時ですらからかいに来ていたのに（それでいて手伝いは頑として受け付けないのだから友情とは素晴らしい）、二人してサボりだろうか。それなら芯護を誘いそうなものだが…？

芯護は隣に離れて座っている、レンザと良く話をしている二才年下の男子に聞いてみるが、

「さあ、風邪でも引いたんじゃないの？ 流行ってるでしょ」

確かに“性質たちの悪い流行り病が蔓延たちしていて、病原菌が広がらないよう患者を診療塔に閉じ込めている”らしいが。
残念ながら、それには当てはまらない。

「違う、朝は食堂に来てた。他に心当たりないか？」

「うーん……ごめん、判んない」

大した収穫は獲られなかった。

男子生徒に軽く礼を言った芯護は、胸にもやもやしたものがあるのを感じる。

別にあいづらがいなくても気にすることはない。何処で何をしているようと自分の知るところではなし、いつもうるさくてやかましくて面倒にしかならないのだから、むしろいないのは丁度良い。…はずなのだが。

いざいなくなってみると物足りなさを感じてくる。居て当たり前が居ないと、調子が狂うというか。

あれ。俺、寂しいと思ってる？

「……………それでも良いから、次に顔見せた奴を殴っところ」

認めたくなくて不穏なことを口走ったら、隣の男子生徒に聴こえてぶるっと身体を震わせた。そちらに危害を加えようとは思っていないのに何故ビビる？ と芯護は謎に思い、

バン！ と、勢い良く扉が開かれて驚いた。

「な……………なんだ？」

芯護も、やる気のない特待生も、教室にいる全員が、一体何事かと首を向ければ。

「芯、護……………」

「…レンザ？」

扉を開けたのはレンザだった。

現れた顔が馴染みのものだったことで、芯護の逆立った神経はすぐ平坦に戻る。周りも、なんだレンザか脅かすな、と落ち着きを取り戻して―――、

「しし………芯護ォ!!」

「うわ!?! 何だよ?」

一人だけ取り乱したレンザが、猛烈に走り寄ってきて芯護に掴み掛かってきた。芯護はつい反射的に拳を握り、思わず反撃しかけてしまう。殴る予定もあったことだし、止めなくて良いかな、なんて面倒くさがり、

レンザの顔を見て、かろうじて手を出すのを止めた。

殴れる訳がない。こんな顔を見せられたら、誰でも殴る気は失せる。

——蒼白だった。

ふざけているのではない。芝居をしているのでもない。レンザの顔は血の気が失せて、恐ろしげに筋肉を引き吊らせている。

今まで見たことのない友人の顔色から、芯護はただならぬ心配を感じ取って問い詰める。

「どうした? 何があった!?!」

「と、トオル……が、あの、あ、あいつ………」

「落ちて着けて! トオルがどうした?」

レンザは気が動転していて、上手く呂律が回らない。それでも何かを伝えようと言葉を絞り出そうとする。周囲も尋常でないレンザの様子に緊迫して、固唾を吞んで目を見張る。

「トオル………支度するって、自分……部屋、に、……遅く。て、呼び、行った……た、たら」

「行ったら？」

「うあ、あ…、アイ、ツウ……」

「お、おい。しっかりしろって！」

ここまできて、レンザは喉に詰まらせた。

頭を抱えてしゃがみそうになるレンザ。肝心なところで黙られては
芯護もどうしようもなく、先を促そうとレンザの肩に手を置いて揺
らす。

——続きが気になる。レンザの言い方からして、トオルの身に何
か良からぬことが起こったらしい。急を要することなのか。まさか、
命に関わるなんてことはないよな。

こんなことは初めてだ。『秩序の学舎』は安全を確保された施設。
数少なくとも『律神士』が擁護するこの島で、怪我や病気で寝込む
ことはあっても、命を脅かされることはない。ある筈がない。

レンザが話すのを待ちきれなくて、芯護は顔を上げる。話から推察
するに、問題のトオルは自室にいるらしい。現場へ行つて、この目
で直接確かめた方が早そうだ。それなら善は急げと、前に屈んだレ
ンザを通り越した、開け放されたままの扉に視線を移した。そして、

二人目が現れた。

見たこのない人だった。スラリとした長身で一見華奢にしか見えな
い、厚化粧を施した人物。性別は化粧で判りづらいが、男臭さを消
せていない。どうみても男性だ。女を下手に演じている男が、薄ら

笑いを浮かべながらごく自然に入ってきた。

芯護は怪訝な顔でその男を眺めて、即座に違和感を覚えた。――
“誰も気づいていない”。

男が教室に入ってきたと知覚したのは、芯護だけだ。目立つ風貌、
しかも見慣れない男が姿を見せたら、一人くらは注目しても良さ
そうなものののに、他はレンザに集中して見向きもしない。

次から次へとやってくる出来事に頭がこんがらがる芯護を余所に、
厚化粧の男は不気味な笑みをそのまま、左手に持った何かの束を
離して床に落とした。

それは折り畳まれていた紺色の鞭。柄の部分は指で挟んだままで、
革製の蔓だけを広げる。

鞭それ自体は初めて見る芯護は、男の行動の意図が読めなくて困惑
する。ただ、男は芯護の方を向いて笑う。

こいつは何者だ？

なんで誰にも気づかれない？

俺を見つめて、何を…

「トオルが……ッ」

レンザの声を聞いて、芯護はハッとすする。

男は芯護を見ていない。芯護の前で訴える、レンザに焦点を定めて
いる。

獲物を狙う眼で、ニタッと笑みを広げて、ブン！と腕を振る。
毒々しい一言を添えて――、

「暴れろ、【腐蝕】へバイダ」

「——ッ、避ける!!」

叫びながら、芯護はレンザの肩に置いた手で掴み、真横に飛ばうとした。

咄嗟の判断。鞭の動きは素早く、けれど迅速に動いたお陰でギリギリかわせる。

——かわされた鞭の行く先に、二歳年下の男子生徒がいたことを、思い出す——。

「ッッ」

レンザを突き飛ばして、身体を無理矢理振じ込んだ。

男子生徒は芯護の行動をポカンと見つめている。

芯護にしか見えていない男は、芯護が反応したことに多少驚き。

放たれた鞭は、芯護の顔をしたたかに打ちのめして。

芯護の意識は、暗転した。

教室は無惨な有り様になっていた。

机や椅子は半壊して端に追いやられ、生徒の大多数も軽重傷を負って壁際に寄り添い、カタカタ震えている。

全員、怯えていた。

年の低い生徒は泣きじゃくり、十代半ばまである生徒も嗚咽を洩らしている。それを聞かれて注意を引くのが恐ろしくて、必死に息を殺している。

教室中央には、恐怖と悲痛が充満する中で平静を失っていない男がいた。

鼻歌を口ずさんでいる男は、気を失っているボサボサ頭の生徒の上に腰掛けて寛いでいる。生徒はピクリとも動かず、されるがままに尻に敷かれている。

生徒は、男が手で弄んでいる鞭で昏倒させられた。意識は一瞬で刈り取られ、鞭を叩きつけられた箇所――左目から頬にかけて“腐り始めていた”。

他にも数名の生徒が男を囲む形で倒れて、身体のとろろを腐らせている。皮膚が剥がれ落ちる言い様のない感覚と痛みに苛まれて苦しむ。

苦痛を与えた張本人は嬉々としてそれらを眺め、そして教室入り口に向いて、数分前まで整然としていた教室の面影も残らない空間を目の当たりにする、黒髪的女子生徒に声をかけた。

「あら、早かったじゃない。もう少し時間がかかると読んだのに、頑張ったわね！………《無垢なる者》さん？」

「…」

そこにいたのは依妃奈だった。

息を切らして、頬を紅潮させた彼女は、大急ぎで此処へ来たことを窺わせる。隅で震えていた生徒達は依妃奈の姿を見て驚き、すぐに思考は一つに絞られて一杯になった。

——《無垢なる者》が来た。戦争を終わらせた英雄が来てくれた。自分達は、助かった——と。

皆が希望の眼差しを送り、事の成り行きを見守った。

依妃奈は教室内の様子を確認して、惨状を築いた男にきつめの視線をくれる。睨まれた男は何処吹く風で受け流し、腰を上げて依妃奈と向き合う。

容姿に合わせた女口調で、

「遅れてきてくれても良かったのよ？ アナタが来るまで“コレ”で遊んでたから」

足元に転がる生徒を蹴った。ゴミか何かを見るような目で、ぞんざいに扱う。

依妃奈の目が僅かに細り、男は軽い調子で、どーでも良いけど、と強く蹴り飛ばして、

「さてと。自己紹介をしましょうか。礼儀って大切なものね。まずワタシから、ウクスって言うの——」

聞く耳を持たず。

依妃奈は男の懷へ飛び込んだ。

何処から取り出したのか、身の丈より短い聖槍を両手に握り。

大きく振りかぶって、斜め横に薙いだ。

ウクスと名乗った男は、機敏に跳び下がってそれをかわし、口から

文句を垂れる。

「…になってないわね。話くらい最後まで聞きなさいよ。初対面なのに挨拶も無しって、ご立派な教育受けてんのね」

「…」

不意打たれても調子は崩さないウクスに、依妃奈は相手にしなかった。手にした聖槍を逆手に持ち換え、切っ先を床に突き刺して意識を聖槍に集中させる
小さく、しっかりと囁く。

「毒を清めて、傷を癒して―――【純心】へシャクアス」

コォー…ン、という高い音色が、淡い暖色系の光と共に拡がった。光は教室中を満たして生徒達を包み込んで身体に浸透していく。するとたちまちに痛ましい傷が癒されていった。

腐っていた皮膚は弾けて、新たな皮膚が造られて痕も残らない。擦り傷や打撲もみるみる内に消えていく。

【純心】の輝きが、皆の心に温もりを取り戻させる。

一方のウクスは、依妃奈の行為を面白くない顔で見ていた。

「ふーん。まずは自己紹介より人命救助、ね。いやーん、《無垢なる者》様ったらやさし」

人を小馬鹿にした態度には、隠しきれない苛立ちが混ざっていた。さながら、せっかく手に入れた玩具を取り上げられた子供だ。所持した鞭を床にピシャッと打ちつけて怒りをあらわに、前方にいる依妃奈を狙う。
その前に、

「ウクスさん、でしたね。『器』を手離して、降参してくれませんか？」

「アン？」

依妃奈が口を開いて機先を制した。

何を言い出すんだ、コイツ？ と表情で表すウクスに、依妃奈は繰り返す言う。

「私がこの場にいる限り、他の人達に手出しさせません。貴方がどんな目的があつて暴力を振るうのか判りません。けれど、どんな理由があつても皆を傷つけるのは許せません」

真摯な目でそう訴える。混じりつけのない、穢れのない言葉で。迷いなく、敵に情けをかける。

「お願いします。武器を捨てて、投降して下さい」

「……………プツ」

返って来たのは、吹き出した音。

ウクスは直後に笑い、依妃奈の意を介した。

「ハハハッ！ くっふ……、話してた通りねえ。なんて優しいのかしら。皆を傷つけるのは許せないから、投降しろ？ それって、自分が必ず勝つから、ワタシと争いたくもないから、穏便に済ませましょうってこと！？ アッハハ！」

何がそんなに面白いのか、ウクスは腹を抱えて笑い通す。周囲で恐

々と眺めていた生徒達も眉根を寄せる。

依妃奈は、緊張を解かずに聖槍を持つ手に力を入れた。

肌にひしひしと伝わる。彼が殺意を募らせていることを、気取ったから。

「つとに、良いわねえ、必要とされてる人間って奴は。綺麗事しかのたまえないんだからさああ……ッ」

天井を見上げて笑っていたウクスは、呻くような低い声で言うのと、見上げたまま、ギョロツと目だけを向けて依妃奈を睨んだ。血走った、狂気の眼で。

「良い子ちゃんぶツツてンじゃねえよオツ！！　ぶちのめせえ！

【腐蝕】へバイダ！！！！」

怒号と同時にウクスの鞭が唸った。

【腐蝕】の名を持つ律神器、宿された万理は“病魔”。細胞を壊死させる病原菌を生み、自在に操る狂鞭。

発現者の意思を体現して蛇のようにのた打ち、複雑な軌道を描きながら依妃奈に差し迫る。襲いかかれることを事前に察していた依妃奈はこれを聖槍の柄で受けて、角度を微妙に調節して鞭を後ろに弾き、和解は不可能と悟ってウクスめがけて走り出す。

初撃を外されたウクスはチツと舌打つ。一投目で仕掛けていた“小細工”は効果を現さなかった。それならと、腕を後ろに引いて伸びきった鞭の蔓を戻す。

荒れ狂った鞭の尖端が、今度は背後から依妃奈を狙い打つ。それを察して振り返った依妃奈が防ぐと、鞭は高く跳ね上がって天井を叩いた。

準備は整い、ウクスは楽しげに叫ぶ。

「もう一発イクわよ！」

先程と変わらない攻撃が繰り返される。依妃奈は走りながら弾く為に聖槍を構え、その様子を見たウクスの口元には笑みが広がった。
——獲物が、罠に掛かった。

「知らないのお？ ……腐るのは、肉だけじゃあないんだよ」

瞬間。

“腐った天井が抜けて、依妃奈の頭上に崩落してきた”。

「！」

「ホーラ、こっちがお留守ウー！！」

直上の危険へ迅速に対応しようと動いた依妃奈を、さらに毒牙が襲う。速度のある鞭が先に届き、依妃奈は紙一重でかわしたが、上から降り注ぐ瓦礫を回避する余裕を失ってしまう。

聖槍をかざしても盾にはならず、為す術の無い依妃奈の姿は、瓦礫と砂埃に埋もれて見えなくなった。

「アラ、上の階に人はいなかったのね、残念。ガキ共につぶされるのを期待したのに」

ウクスは伸びた蔓を手元に引き寄せ、巻いて束ねる。視界を悪くさせている埃を手で払い、瓦礫が積み上げられた場所を目で探った。崩落に巻き込まれた依妃奈はすぐに見つかった。下半身と右手を瓦礫に挟まれ、度合いはあれど軽傷を負って、うつ伏せで倒れ伏している。

敵が近づくの知らない依妃奈は、くぐもった呻き声を出しながら意識を取り戻す。何が起こったのか、自分はどうなったのか、痛みがアドレナリンで抑えられている内に必要なことを確かめて、下敷きにされていない左手を動かして――手にしていた聖槍が紛失していることに気づいた。

依妃奈は焦り、辺りを見回す……ことはしなかった。無事である左手に聖槍のイメージを思い浮かべて、“新たに発現しようとする”。キン、と金属音が鳴って『器』の輪郭がうつすらと姿を現し、依妃奈はその名を呼ぼうとして、

手のひらを、ウクスの足で踏まれて集中が途切れた。

「うぎ!？」

「【精神】の律神器を使う奴って面倒なのよねえ。『器』と“心”が直接繋がってるから、好きな時にいつでも何処でも発現出来ちゃう。『器』が遠く離れていても、念じるだけで呼び戻せちゃう」

ほんと厄介、とぼやきながら、ウクスは依妃奈の手を踏みにじる。床に押しつけられた手はゴリリと骨の擦れる音を発して、依妃奈の顔に苦悶が浮かぶ。

痛みに耐える彼女を無視して、それに、とウクスは続けて、

「心持ち一つで馬鹿げたチカラを発揮するしさ。アタシらみたいなザコ律神士じゃ、百年かけても使えないような神の業を。…だ・か・ら」

手が潰れるほどに押しつけていた足を、ほんの少し高く上げて。

「アンタの“純心”、へし折ってあげる♪」

メギイツ!! と、

勢いをつけて足を降ろし、手の甲を踏み砕いた。

「ギ……あああああ!!?」

「キャハハハッ!! なぁに? そんな可愛い声で鳴いちやって! もっとイジメてちょうだいって催促してるみたいじゃない!?」

依妃奈の絶叫にも劣らないウクスの笑い声が響く。人生最良の瞬間を極めているという様子で、手の甲の折れた箇所を、何度も、何度も、踏みつけた。

指の関節も丁寧に狙って踏み外し、捻り、ひたすら潰す。その度に

依妃奈は短く叫び、自由な半身を跳ねさせて振る。

ビクビク震えるその姿にウクスはウツトリと恍惚感に浸って、ますます調子を上げていく。

「クヒ！ 最っ高ね。最初アナタのこと聞いた時はゼツツタイに仲良くなれないと思ったけど、考え直すわぁ……………今なら、肉片だって愛せそう」

「う……ヒッ!? ギア! ガア!？」

手を潰される音と悲鳴が交互に繰り返される。次第にそこは血溜まりが出来上がって、ビチャツ、バシャツ、と水面を叩くのに似た音へと変わり、依妃奈の反応は希薄となる。それではつまらないと、ウクスは【腐蝕】の鞭を掲げてさらに追い打ちをかけた。

「キャハハハハ! キャハ、アハツハハハハハ!」

しなやかな鞭と高笑い、依妃奈の身体を打ち据える。声を上げることも、ピクリとも動かなくなっても、ウクスにとってはもうどうでもいいらしい。鞭を振る腕が疲れるまで、ボロ雑巾となっていく依妃奈をいたぶり抜く。

拷問の時間はおよそ五分くらいで終わったが、その十数倍もの時が流れたかに思えた。ウクスの腕が止まる頃には、依妃奈は見るも無惨な姿に変わり果てていた。

「可愛くなったわねえ、英雄ちゃん?」

「う、…」

依妃奈はまともに声も出せない。集中して鞭打たれた背中はずたず

夕に裂けて血に塗れ、あちらこちらに赤い飛沫が斑に散っている。弱々しく、うつすらと目を開けた依妃奈が首を上げれば、英雄を好き勝手になぶったことでご満悦なウクスが懲りずに腕を振りかざしているところだ。一思いに息の根を止めようとはしないで、出来る限りの痛みと苦しみを味わわせてやろうと鞭を振り下ろしていた。それを止めたのは、ウクスの視界に不愉快なものが写り込んだからだ。

「ア？ 何だよ、そいつは」

「…」

周囲でずっと震えていた生徒達の何人かが、すくむ足腰に活を入れて立ち上がっていた。手に各々、机や椅子の千切れた足や、拳大の石くずを持って、情けない顔をしながらもウクスと対峙した。

怪我を治してくれた。助けに来てくれた。そんな優しい人が自分達の代わりに苦しんでいるのに、何もしないで見ではいられなかったのだ。

そんな彼らを、ウクスは鼻で笑った。

「あー……勇気が湧いたから立ち向かうって？ まるで蛆が涌いたみたい」

どれだけ束になろうと敵いはしないと、無力な生徒達の反抗を馬鹿にする。そして、なけなしの勇気を振り絞った彼らに“面白い”選択肢をくれてやった。

「じゃあ選ばせたげる。誰か一人でも良いから『身代わり』になるっていうなら、親愛なる《無垢なる者》（えいゆう）様を愛でるのを止めてあげるわ。たーだーし、身代わりになった奴はその何十倍

も痛めつけて腐らすから。さ……選びなさいよ」

言葉の締め括りに、鞭を瓦礫に跳ねさせる。鞭に触れた瓦礫は途端に腐り、衝撃で粉微塵に弾けた。

ウクスの脅しはよく効いた。立ち上がった生徒達は、弾け飛んだ瓦礫に自分の末路を重ねて怖じ気づき、後ずさってしまう。

それでも、退かない生徒はいた。小刻みに震えていながら、手に持った武器とも言えない武器を離さないで、ウクスに挑む眼差しを向けた。全員がこれで黙るだろうと期待していたウクスは裏切られて、

「……………けて」

誰も予想していなかった声が聴こえた。

掠れた、小さな声が。弱りきった、英雄の声が。

依妃奈が、その言葉を口にした。

「たすけて……………おねがい……………」

タスケテ、オネガイ。

今のやりとりを聞いて、助けを求めた。

生徒の一人を身代わりに――犠牲に、して。

私を、助けて下さい？

――ブふ？！ と、堪らずウクスが吹き出した。

「アハハハハハ！！ ちょっと聞いたあ？ 命乞いたわよ、命乞い！ こんなのが“英雄”だなんて笑わせるわよ！ アハハハハ！！」

依妃奈の取った行動がツボに入って、一人だけ大笑いする。生徒はそれよりも動揺して、尚且つ失望した。

最後まで弱音を吐かないと思っていたその人の命乞いは信じがたく、生徒の多くは彼女から目を逸らしたり、あからさまに毒づいたりす

る。彼女の為に立ち上がった生徒も、手にしていた物を落として膝をついた。助けたい気持ちはまだあるのに、見たくないものを見せつけられて、心が挫けてしまった。

最後の一人まで依妃奈を見放したのを受けて、ウクスの喜びは頂点に達する。

「あーら、残念ねえ。みんな愛想尽かしちゃったわ。ま、当然でしょうけど。全員助けるとか言っというて、自分が助けて、とか！」

依妃奈を詰るように喋り、それからまた笑い出して。

…高らかに笑うウクスを止められる者は、いない。

止めに来たはずの依妃奈は潰れてしまい、生徒達は勿論、そんなことは出来ない。

いつもの日常は狂い、教室という隔離された世界は狂い、男の狂った笑い声は止むことなく――、

「…ああ？」

唐突に止んだ。

止められるはずのない、笑い声が。

ふらりと立ち上がり、依妃奈とウクスの境となるように立った生徒が。

——— 芯護が、ボヤけた目でウクスを睨み、依妃奈を背にして立ち
はだかった。



無音の闇に包まれていた。

何かを考えようとする度に、頭の裏側がズキリと痛んで邪魔された。顔もジクジクと痛みが貼りついて取れなかった。

暗くて、痛くて、寒さに身も心も凍えた。凍てつく寒さから逃れたくて手足をバタつかせたが、手足はそこにはなかった。

手足どころか、身体もなかった。

闇だ。

ここには闇しかない。俺は闇に溶け込んで同化している。

頭も顔も手も足も何一つない。物足りない。痛みは何処から感じたのか、寒さの意味はなんだったのか、苦しいのは何処のどなただったのか、俺の裏側はどうしたらバタついて溶けるのか。

グルグル回る。

バラバラ散らばる

グチャグチャ乱れて、ガラガラおちる。

おれがあなたできみはわたしでわたくしのおれはぼくのかれであの
このあなたはわれわれのおれだからおれというおれはだれかれどれ？

これというあれのおまえは、いま、なにまで？

ここはあそこのどこからが、なに？

あなたにおれから、ど、う、し、た、ら……………？

「毒…………めて、…を癒し…………——【純心】〈シャクアス〉」

コォー…ン。

音のない闇色に、綺麗な音色が変わった。

途端に暗闇は、真っ白へと変わった。

白は光になって俺を抱き寄せ、凍った心を溶かしてくれた。

暖かさが戻ってきた。その感覚を感じるくらいには、意識が回復した。

光はちょっと眩しくて、目を開けていられない。閉じたままできると、白い景色の外で何かが激しく動き、崩れる音が聞こえた。

薄く目を開けてみた。目は光に眩んでよく見えない。

誰か、喋ってる。上手く聞き取れない。

何…？

「ク……！ 最っ…ね。…初ア………と聞……時はゼツツ……イに………れないと………、考え……わぁ………。……ら、肉………って『愛』せ……う」

あ、

い。

——ドクン。

聞こえた単語に、心臓が大きく脈を打った。

心地よい響きだ。長年慣れ親しんだような、不鮮明な感触を覚える。

俺は『愛』を知っている。

『愛した』ことは一度もないのに。

記憶にない。なら、なんでこんなに揺らぐ。

なんで、深々と心に食い込む。

俺が、かつて愛したのは。

好きになった人の、覚えは。

「たすけて…………おねがい……………」

聞こえた。

その声が。

愛した覚えがないかを、考えて。

真っ先に思い描いた、その人のか細い声が。

光はとっくの昔に消えて。

俺の視界は良くなって。

目に飛び込んできたのは、痛ましくも憐れな彼女。

自分の流した血の赤に彩られた、傷だらけで倒れたえひ
ひ
な
。

ドクン。

また、脈打つ。

心臓が、俺の感情を色濃く反映する。

許せない。

堪らない。

依妃奈のそんな姿、片時だって見ていたくない。

俺は。

俺は………、

―――。

意識を取り戻した芯護は、グラつきながらも立ち上がって前に出た。ウクスの鞭で脳を揺さぶられ、一時的に悪質な病原菌に冒された影響で頭は混濁し、とても物事の判断が可能な状態ではなかった。荒れて定まらない思考では、今ここで何が起きているのかも理解出来なはずだ。

それでも、芯護は目の前で困っている人がいることを理解した。

耳に聞き届けた。助けを呼ぶ、その声を。

他の誰でもない、依妃奈の声を。

——助けを呼ばれた。だから助ける。

助けたいから、助けるんだ。相手がそれを望んで、自分もそれを望んで。それに何より、

——助けを呼んだのが依妃奈だから——。

彼女の呼び声だったから、無性に助けたいと思った。いいや、助けなければならぬ。何故なのかは知らないが、心はそればかりを叫んで止まない。

心が、

——助ける。

身体が、

——助け出せ。

魂が、

——助けるんだッ。

芯護^{おれ}自身が——、

ハ・ヤ・ク!!!!

「う…ぐ、う」

芯護の意識が乱れてグラリとよろめいた。

思考がまるで別人のもののように働き、意思を溢れさせて混乱させる。それらをまとめきることは土台無理で、芯護は頭を押さえる。そうしている隙を見せていられる状況ではないのに、自分のことで手一杯で、彼の存在を見失う。

あまりの怒りにはらわたを煮えくり返した、ウクスを。

「あー、あー、あー、あー。なんなんだろうなー、オマエ。フラッフ
ラでワタシの前に出てきて、一体何がしたいワケ？」

それはこっちの台詞だと、いつもの芯護なら言い返しただろう。今は暴れる感情に掻き乱されて、ウクスの声すら届いてはいなかったが。

仮に届いていたとしても、返せはしなかった。ウクスが言い終わらない内に振るった鞭が、またしても芯護の顔を強打したのだから。

「……ツツ!？」

「あゝ………アアアアアツツツツぜえんだよオ!! テメエ空
気読めよな!？」 《無垢なる者》を全員が見放したところでボッコ
ボコにのしてやるのが最ツツツ高の終わりかただったろうがそれが
わかんねえか!？」 シラケさせんじゃねえよ!!!!」

壁や窓ガラスがビリビリうち震えるほどの大叫声で喚き散らして、
激しく芯護を打ちのめす。それだけでは飽きたらず、ウクスは荒々
しく歩み寄って倒れかかった芯護の腹を蹴り上げて『宣言』する。

「ぐぶ………ツ」

「のたうち回れ、【腐蝕】へバイダ」

「あゝ? があゝ あゝあゝ!？」

芯護の脳天に割れそうな痛みが走った。

身体の至るところが変色してドロリと零れる。病魔が細胞を蹂躪し
ていき、激痛と相まって意識がまた断ち切られそうになる。

それを防いだのは、これまでとは違った、焦りの色を含んだ声。

「………【純心】へシャクアス」

キーン! と光が高速で駆け巡り。

蹴られた反動で真後ろに倒れた芯護の傷を、病魔を、瞬時に癒した。
そんなことを可能とするのは、一人しかない。

——【純心】の『器』を再度発現した、依妃奈だ。自分の傷は後
回しで、芯護を蝕む病毒を取り除いた。

そのせいで、ウクスの矛先が逆戻って依妃奈を向いてしまった。

「…………ツツ！！　どいつもこいつもオ！！　ウゼエことしかしやがらねえよなア！？」

「うく…」

突くような鋭い一閃が依妃奈を襲い、片手では防ぎきれず、【純心】がまたも手から離れた。

丸腰の上、腰から下が瓦礫に埋まったまま動けない依妃奈を、完全に逆上したウクスが見下ろす。

遊びは終わりだと言わんばかりに、無感情で言葉を綴る。

「もういいわ。いちいち治されてもメンドーだし。テメエから死ね」

無情の一打が振り下ろされる。

依妃奈に回避する術はない。

これから始まり、終わりとなる悲劇を、離れた場所で動けずにいた芯護の目にも入った。

二年前から気になりだした女の子が、依妃奈が、突然現れた男の手によって、ウクスによって、壊される。

その瞬きの間を――、

ドクン…。

やめろ。手を出すな。

ドクン。

そいつに、もう指一本も触れるな。俺が絶対に許さない。

ドクンッ。

頼むから、俺からその人を奪わないでくれ。もう、これ以上………

ドッ……クン。

ワ
ガイ
トシ
キヒ
トヲ、
キズ
ツケ
ル
ナ
！！！！

「――」

内側から何かが沸き上がった。芯護の身体から迸った。

右手のひらから強い想いの塊が、霧のようなもやとなって現れた。

芯護の想いを投影して、ある形を構成していった。

守りたい意志が、

手にいれたい望みが、

奪いたい欲が、

アイされたいアイが、

形を成して、具現化していった。その最中に、完成を待たずに振る
おうとした。

だって、待ちきれなかった。

だって、待ちきれないじゃないか。

だって、

だって、

だって、さあ。

無理だろ。

愛する心は、止められないんだから!!!

「え？」

気づくと、ウクスは尻餅をついていた。

依妃奈にトドメを刺そうとした、そこへ眩い閃光が教室中を照らし、直下に轟音が鳴り響いた。一体全体何が起こったのか、近場に雷でも墜ちたのか？ 毒気を抜かれて腰を上げるのも億劫なウクスは目を瞬いて、

「え？」

廊下側の教室の壁が、向かいの壁までなし崩しに、大きくぶち抜かれていた光景を見た。

ぽっかりと空いた穴からは外の湿った風が入り込み、吹き荒れた埃を流していく。白んでいた空気も落ち着いて、ウクスの目先で前屈む人物の姿が捉えられるようになる。

「え」

ウクスは口をだらしなく開け、食い入るようにその人を見つめる。脈動するかの如く揺らめいて、白桃色の光を放つ不鮮明な物体を右手に宿した、芯護を見る。

芯護を通り越して、目を丸くして、芯護の持つ“それ”を凝視する。

「嘘でしょ……………“律神器が、産み出されようとしてる”？」

自分で言いながらも半信半疑で、けれど間違いようがない。律神器が自然界で産み出される確率は、およそ六千分の一。人の肉体と魂から産み出される確率は、七千五百分の一。人の心から産み出される確率は、

六十二万跳んで、八百分の一。

そう易々と、都合良く産み出されるはずのない律神器——『器』が、たった今、この場で生まれようとしていた。

新たに産み出された『器』が発見されることは滅多にない。それを見つけるだけでも幸運なことだというのに、『器』が産まれる最中の場面に立ち会っている。

予想の斜め上に行く展開に、ウクスは力なく笑った。

「あっはは………すごい、凄いわ！ 一生にそうそう見れるものじゃないわよ。本当、驚かされたわ」

恐らくは自分を倒したい一心で、極致的に高まった思いが『器』を産み出すきっかけになったのだろう。そう推測したウクスは、そんな理由で『器』を産み出そうとしている健気な芯護が可笑しくて、馬鹿馬鹿しくて、止めどなく笑った。

………芯護は、『器』が完全に産み出される“前に”その力を引き出した。『器』が『器』として完成する前の、未成熟な状態で。ろくに練りもせず、形を整えただけで焼いてしまった陶器の出来は言わずとも知れている。それと同じで、『器』の形成が完了して

発現されるまで、力を行使してはいけなかった。そんなことをすれば、発現者の身にどんな弊害をもたらすのか。

それなのに芯護は『器』を振るってしまった。後先考えず、気のままに動いた。ウクスはその事実が判っていて、だから笑っているのだ。——コイツは途方もない馬鹿だ。律神器の扱い方をまるで判っていない。こちらから手を下さなくても、自分で自分の身を滅ぼすだろう、と。

『器』を産み出されたからといって焦ることは何もない。コイツは放っておいても勝手に自滅する。仮に無事でいて刃向かってきたところで、馬鹿の対処なんて容易くこなせる。

大丈夫だ。何の心配も懸念も要らない。アタシはまだ優位に立っている。悠然と立っている。だから、大丈夫。

ここの支配者はアタシ。《無垢なる者》も、ガキ共も、力で屈服させてやった。心を根元からへし折ってやった。アタシに敵はいないのよ。だから、

だから。——なんで？

「（なんで…… “震えと汗が止まらないのよ！？”）」

頭で知ったことよりも、身体の方は正直に感じた反応を見せた。

言葉にするなら——そう、『恐ろしい』。

芯護の全身から放たれる威圧感。怒気とも、殺気とも取れるそれらすべてが、ウクスに集約されて定まっている。全方向から串刺しに

して、ウクスをがんじがらめにする。
精神を絡め取られて、逃れられない。

先程までと状況は一変して、芯護からの威圧に圧倒されたウクスは動けなくなった。どう転んだところで、自分にとっての最悪な結末しか迎えそうになくて進退極まった。

その内に、芯護の方から動き出す。手に掴んでいたもやが光を伴って形を作り始め、中途半端だった発現を再開し始める。

厚さのある壁二枚を跡形もなく吹き飛ばす破壊を行っておきながら、無理な使い方をしたせいで“歪んだ”可能性がありながら、『器』は、問題なく形成を進めていった。

暴走することなく、発現を終えようとしていた。

発現し終えれば、次は果たしてどうなるのか。

考えるまでもない。矛先を『敵』に向けるだけだ。

「あ………ば、【腐蝕】へバイダ〜!!」

上擦った声で、せめて出鼻を挫こうとウクスが鞭を唸らせる。気持ち半分は気圧されていたが、命の危機に身体が奮い立ったらしい。

【腐蝕】の鞭は、ここ一番の威力を以て芯護を狙った。

けれど、ウクスは致命的な間違いを犯した。

自分の発現する『器』の形状が鞭だった為に、肝心なことを見落とした。

ウクスの持つ『器』の名は【腐蝕】。宿った万理は“病魔”。

細胞を破壊し、肉を腐らせることに本領を発揮する『器』だ。決して“打撃の威力を上げる『器』ではない”。

鞭で打つより、病魔の万理によって攻撃した方が得策だった。そのことを失念して、相手に到達するまでに時間のかかる打撃を選んできました。

芯護の『器』が完成する前に——と、気を急いだ。そして、

芯護だって、完成を待つ気はさらっさらなかった。

無理に強引に無茶苦茶に、理屈も常識も問答すらもすっ飛ばし、右手の力を振り回した。

振り回される間にも発現は続き、形を整えた。

形状は剣^{つるぎ}。宿りし万理は×××

その『器』が律せし“神”は、

冠せられし、真銘は——。

「切り払え。―――【誠愛】〈ヴィリア〉!!!!」

上段から下段へと振り下ろした、なんてことはない袈裟斬りだった。初めて握った剣を、ただがむしゃらに振るっただけ。子供のちゃんばらごっこよりもお粗末だ。

上から、下に。それだけで、空気は乱れて荒れ狂い、突風を巻き起こして向かい来る鞭をざんばらに切り分けた。

暴風となった一閃は音に乗ってウクスの左耳を掠り、背後の壁を穿った。ウクスには戦慄が走って仰け反り、情けなくもへっぴり腰で転けた。

左手の鞭は、鞭としての機能を失った。蔓の部分はほんのちよつとしか残っておらず、柄だけでは鈍器としても役立たない。

しかし、『器』としてはまだ十全に機能していた。病魔の万理は柄だけの鞭に収まり、力を発現できた。

追い詰められたことで逆に失念していた事柄も思い出して、ウクスは慌てふためいて叫ぶ。今からでも遅くない。芯護の身体を腐らせようと全力を振り絞って、

「腐らせろ、【腐蝕】〈バイダ〉!!」

「浄化して。【純心】へシャクアス」

ギン！ と、

足掻きは呆気なく打ち消された。瓦礫から這い出した、依妃奈によって。

骨まで見えていた怪我の治癒を終えて、血の塊がこびりついたままの左手で支えた、聖槍によって。

「て、メエ……………ッ！」

またしても邪魔されたウクスは苛立ちを募らせる。相手をいたぶる道具は失っても、憎しみを込めた眼差しを送る。

「あ」

「……………」

視界は芯護が立ち塞がって遮った。右手の剣は、ウクスの首に差し向けてある。

ウクスは間抜け面で、必死に喚き散らす。やれたかが冗談だの、やれほんのお遊びだの、やれふざけただけだから見逃してくれだの。耳に障る言葉を並べたくる。

戯言を口走りつつ、隠れたところで床に四散した木片から鋭く尖ったものを探し、芯護が隙を見せたら喉元を抉ってやろうと抜け目ない。

芯護は、そうしたウクスの行動をあまり視野に入れずに、ボーツと佇んでいた。

意識の混濁はなくなったが、今度は頭の中が空っぽで満たされない。何か考えると虚空に消えて、まともに物を考えられない。

ふと、右手にある固い感触を覚えて目の前にかざす。今しがた發現したばかりの、【誠愛】の剣だ。

なんでこんなものを持っているんだ？　——守りたいと願ったからだ。

頭の中で自問し、自答した。

次に視線を傾けて、軽い口を忙しなく動かしている男に目をやる。教室に現れて自分に、皆に、依妃奈に酷いことをした、ウクスに。

こいつは俺にとってなんだ？　——“大切な人”を傷つけた、憎い敵だ。

芯護は一つ一つをゆっくり確認していき、途切れがちな意識の中で、状況を断片的に把握していく。

戦う為の武器が手中にある。

倒すべき敵が目の前にいる。

ならば俺はどうしたら良い？

この剣で、俺は何を為せば良い？

「…これ、切れ味良さそうだな」

「——！」

ギクリ、と身体を強張らせるウクス。

芯護はそちらにも目をやりつつ、また【誠愛】に視線を戻す。

人を斬ることに使われる、剣。鏡のように自分の顔を反射して見せる刀身を見つめて、

透けた心に黒い火種が、チロリと灯る。

憎い敵を、コロシテ良いか？　——許しがたい奴だ。コロシテ良いに、

黒い火種は燃え盛って、

——駄目に、決まってるだろ。

何処からか吹いた、烈風に消されて。

「…」

柄を、強く握りしめた。

「…………けど、使ったらお前、死ぬよな」

希望を匂わせる言葉を呟くと、ウクスの目は輝く。反省の色なんて毛ほどもない。芯護は抑揚のないままウクスを見て、続けた。

「斬るのは、勘弁するか…」

その一言で。

ウクスは邪な笑みで応じた。

馬鹿なガキの甘い考えで大馬鹿を見させてやろうと、隠し持った鋭利な木片を突き立てる。一片の情けをくれてやった芯護の急所を、寸分の狂いなく――、

「代わりに、思いっきりぶん殴ってやる」

「この、馬ア――――ツツツがぺえ??」

ゴパンツ!! と。

刀身の腹で、腰に捻りを加えて、力一杯にウクスの横っ面をフルスイングした。

手加減のない一撃は改心痛烈、ウクスは白目を剥いて、揉んどり打って教室の隅に転がっていく。床との摩擦ですぐに止まり、ヒクヒクと痙攣するだけで立ち上がっては来なかった。

ウクスが動かないのを、腕を振り切ったままの芯護は眺めた。敵は意識を失った。次はどうする? と、短絡的な思考を紡ぎ合わせて、急に足から力が抜けて、操る糸を切られた人形のように崩れ落ちた。

「:??」

芯護はキョトンとして、なんで自分が倒れたのかを考える。そしてそれは、すぐさま虚空に消えていった。どころか、意識すら遠のき

始めていた。

精神的に、肉体的に限界が来ていたことに気づいていない芯護は、自分の身に何が起こっているのか、これからどうなってしまおうのか、この騒ぎはこれでお終いなのか、それとも始まりなのか、考えが目まぐるしく駆け抜けて——全部消えて無くなった。

芯護の意識も、もたなかった。

最後に駆け抜けていった思考：——依妃奈や皆は、無事だろうか

——…を、最後にして。

芯護は瞼を閉じて、深い眠りへと沈んでいった。

〈一〉微睡みからの目覚め…了

〈S〉落ちこぼれと腐れ縁の密談（前書き）

Sの意味………ショート、サイド、それとなくパロディ。

〈S〉落ちこぼれと腐れ縁の密談

〈1〉芯護

ボサボサの黒髪と無愛想なのが特徴。孤児で路頭に座っていたところを丹波に拾われ、『秩序の学舎』（アカデメイア）へ。過去の記憶が若干乏しく、孤児だった頃の記憶を覚えていない。育ての親に似て口悪し、言葉より先に手を出すタイプ。信条は“嘘をつかない”。自分から積極的に話しかけるのは苦手で、馴染みの三人以外とはあまり話さない。

最近、とある少女が気になって遠くから眺めることが多い。

「…」

「――ヒナ、依妃奈。アイツまた見てるわよ」

「誰？」

「ほら、あのボサボサ頭の。ずっとヒナをかじりつくように見てる。気持ち悪くない？」

「う、うん、そうだね。でも、見ているだけなら良いんじゃないか

な」

「えー？ 止めさせた方が良いつて。ヒナが行かないなら私が行ってくるよ」

「良いよ、リエ。それよりも次の授業に行こう？」

「むう。まあ、ヒナがそう言うなら。……ホント、気持ち悪い奴」

「苾護、また見てんのか」

「おー」

「……なあ、気づいてなさそうだから一応言っとくぞ」

「何だよ、レンザ」

「人はそれを、ストーカーと呼ぶ」

〈2〉レンザ

茶髪で長身、あまり笑みを絶やさない明るい性格。孤児で『秩序の学舎』に拾われた。普段から不真面目な態度が目立ち、悪友のバーノットと一緒に芯護をからかう。人付き合いの良さと場の空気を盛り上げるのに長けているので、馴染みの三人以外にも友達が多く、交友を深めている。

不良生徒ではあるが、勉強は出来る方である。ただし、基本は馬鹿。

「――レンザ、ここの数式ってどうやったら解ける？」

「またかよ、バノ。そこは、教本の四十頁に書いてある応用をさ……、」

「――レンザ、トゥーラグラドの主な産業ってなんだったかな？」

「トゥーラグラド？　…は、蒸気機関の工学技術を利用した日用品の生産と、それから、他国の都市整備を請け負ったり……、」

「…」

「なあ、トオル。レンザって結構頭良いよな」

「あ、芯護もそう思う？ 俺も薄々思ってたんだ。たまにどうして落ちこぼれなのか判らなくなるよね」

「ああ。まあ、落ちこぼれなのは仕方ないけどな。だってあいつ…」

「……セイレーン！？ なんで俺のテスト結果が0点なんだよ！ 今回かなり頑張ったんだぞ？ 採点ミスだ！」

「名前を記入しなさいと前々々々々々々々回から注意しているのだから」

「わは」

「抜けてるんだよな、どっか」

「致命的にね」

〈3〉バーノット

体格のがっしりした、力持ちの印象を与える。孤児で『秩序の学舎』に拾われた。普段から不真面目な態度が目立ち、悪友のバーノットと一緒に芯護をからかう。芯護同様にとある少女（芯護とは別人の子）を気にして、周囲にはばかることなく追いかける。

性格は言動よりも存外真面目で、規則正しい生活を心がけている。朝起きたら必ず歯を磨き、布で全身を念入りに拭いて清潔感を保ち、昨晚の内に用意しておいた黒い背広をしっかりと着こなし、両手に真っ赤な薔薇の花束を抱える。

「…クルミ…アちゃん！！俺の想いを受けと——」

「散れ」

「ってばさぎ?!」

「――手羽先が食いたい」

「へ？ 急にどうしたの、お腹減った？」

「ん、なんかな。腹は減ってないんだけど、名前が浮かんできたから」

「手羽先かぁ。パリパリの皮が美味しいよねえ。言われたら俺も食べたくなって――て、」

「芯護！ トオル！ ニュース、ビッグニュース！！」

「うるせえな……なんなんだよ、レンザ」

「バノの馬鹿がやらかした！ タキシード着込んで薔薇持ってクルマに突っ込んだって！」

「ブッ！？」

「うわ……それで、どうなったの？」

「聞かなくても判るだろー！ 見事玉砕、てか返り打ちー！ アツハッハーー！！」

「間抜け過ぎて笑えねえ」

〈4〉 トオル

身体的な特徴はあまりなし。物腰穏やかで目上にもきちんと敬語を使う、落ちこぼれの中で唯一良心的な性格。孤児で『秩序の学舎』に拾われ、芯護と同じく丹波に育てられた。

名は元々『透』だったが、“漢字”という文字が日常でまったく使われない上、覚えにくいと丹波に直談判して今の『トオル』に変えてもらった。一緒に育てられたこともあって、芯護とは他二人よりも親密である。

「トオル、拭くもの何か持ってきてないか。汗かいたんだけど」

「良いよ、はい」

「サンキュ」

「…」

「芯護、ちょっと席外すよ」

「トイレか？　じゃあ、俺も一緒に行く」

「…」

「風呂入ろー。仲良く入ろー」

「背中流してくれるか？」

「いいよー。俺も頼むねー」

「ああ」

「…、」

「トオル、そろそろ寝るぞ」

「うん、判った。今日は芯護の部屋だったね。枕取りに行ってくる」

「早くしろよ。遅れたらベッドには入れないからな」

「えー？　なんだかんだで入れてくれる癖に！」

「…ッ」

「芯護…身体が熱い……………」

「俺もだ…………お前を触っていると、興奮して夜も寝つけない……………」

「芯護お……………」

「トオル……………」

「アツ——」

「うお——い。君達その辺にしときなさいよ、どんな関係だよおお!?」

「どんな関係って……なあ？」

「うん…」

「『なあ?』『うん…』じゃねえよ! ポツと顔を赤らめるなあ!
! ちよ、もう、リセット! その設定はなし! 普通の友達、俺
とバノと同じ友人関係! 以上でも兄弟未満!! : 異議は認めね
ええええええええええ!!」

——BL設定は、削除されました。BY作者

〈4〉セイレと丹波

「……………うーっす、お疲れさん」

「あら、お疲れ様。苾護は目を覚ました？」

「おう。身体に異常はなし、ピンピンしてたぜ。問題はなさそうだったから帰した……………てかよ、なんでここ、こんなに暗くしてあるんだ？」

「雰囲気よ」

「いや、真顔で言うな。まあ良いけどよ。んで、これが浸入したカマ野郎の持ってた『器』、の残骸か。ふうーん…」

「どう？ 私の見立てでは『禁器』、万理は病魔……………なのだけど、

「なんだ？」

「貴女はまだ現場は見えないわよね。……この『器』、天井を腐らせて崩落させたそうよ」

「天井を？ 有り得ないだろ。 “病魔の万理がどうやって無機物を腐らせられる” っていうんだ」

「ええ、不可解なの。だから貴女に鑑定を」

「ふん……こんなろくでもないのより、あいつが発現した律神器の方を見せろよ。本人の無事は確認したが、『器』がどうにかなったら事だからな。できるなら手を加えて修正してやらないと」

「それには及ばないわ。——はい、これ」

「…………こりゃあ、」

「綺麗でしょう？ 発現段階で無理に力を使ったのに、歪みは何処にも見当たらないのよ。【純心】と見間違うばかりに、ね」

「…はは！ あいつの【精神】が、こんなに良い『器』を産み出すとはよ。…………ん？ これは、【魂魄】か？ ちょっと判りづらいな」

「…ねえ、浸入者のことで話があるの」

「気づかなかったんだろ？ 依妃奈が向かって一通り騒動が終わる

まで、お前も、隣の教室にいた奴らでさえも、騒ぎに気づかなかった」

「ええ、でもそれだけじゃない」

「依妃奈が、動いちゃったってことか…」

「彼女があそこに向かわなければ、被害は最悪のものになっていた。それには厚く感謝したいのだけれどね。今までしてきたことは水の泡よ」

「それなんだがよ、ちょっと神経質過ぎやしないか？ “外界への外出を禁じる”にしても、【腐蝕】に冒された連中の治療をさせなかったことにしても、ちいと過保護な気がするぜ」

「そう、ね。どちらにしても、依妃奈はもう動いてしまったのだし、終わったことをうだうだ言っても、ね。でも、外界にはこれからも行かせないけれど」

「はいはい、了解っと。あ、そういや依妃奈がカマに命乞いしたらしいな」

「したようね。生徒達も動揺していたわ」

「依妃奈が『秩序の学舎』に残ってたのも合わせて、言い訳は？」

「“『転送器』で送り出す時に体調が優れなかったので、私が居残らせた”。命乞いは…別の方に気を向かせたわ」

「別ってのは、」

「貴女の“英雄”さん」

「やっぱりな。苦勞するぜ、あいつ」

「しばらくの間よ。皆に平静に戻るまで、私の『器』で根回ししたいと」

「しゃーないか。そんなじゃ、当面の問題はカマ野郎と校舎内の見張りだな。こうなった以上、もう我慢できないだろ。特にミーシャ」

「ふう……ええ、良いわ。浸入者への尋問はどうしましょう」

「俺はパス。拷問なんて下らねー真似はできないんでな」

「誰だっけしたくないわよ。私が、落としてみるわ」

「任せた。なら、俺はこいつの解析といくか」

――――〈二〉へ続く。

＜二＞戸惑いの変化

ゆらりと、影が踊った。

岩の壁が剥き出したそこは、一面だけ鉄製の檻でできた立方体の牢屋がある地下室だ。松明は通路側にしかなく、明かりは牢屋の手前までを赤く照らしている。

ここは長雨と夏期で湿気が多分にある。ジメジメするのが苦手な投獄者は檻の側に身を置いて、仏頂面で来訪者を迎えた。

「あら、遅かったじゃない。もう少し早く来てくれると思ったのに。《無垢なる者》を見倣いなさいよ」

そう憎まれ口を叩いたのは、派手に着飾った女装の男、ウクス。服は所々擦りきれ、左の頬と耳一帯が腫れ上がっている。

『秩序の学舎』（アカデメイア）校舎内の一室を襲撃した彼は、想定外の反撃に遭って倒れ、罪人としてこの地下牢に閉じ込められた。その際、彼が持っていた律神器は壊され、『秩序の学舎』側に回収。律神器の力なしに脱獄のできないウクスは、こうして“仲間”が来るのを待つしかなかった。その仲間は、

「…ていうかさ、その格好は何、当てつけ？　ムカツ腹立つからやめて頂戴」

「…」

虫の居所が最悪なウクスの愚痴を黙って聞いていた。

「それで、上手くいきそうなの？　ワタシがこんな目に遭ったんだから、成果は出せたんでしょね」

「…」

「ワタシが見た限りじゃあ、使い物になりそうにないカンジがしたわ。あんなのを『計画』の主軸になんて出来ないでしょ。“漆黑”はなんて言ったの？」

「…」

「ねえ、ちょっと」

「……五十点」

何の応答もなしにウクス一人が喋り、無視されていると知って切れようとした時だった。牢の前で囚われの女装男を眺めていた仲間達は、声の変わり目か若干低い少年の声で一声上げた。

言われたウクスはちんぷんかんぷんだ。何が五十点なのか、自分に対しての評価なのか、百点満点中の五十点だとするなら、残りの減点は何なのか……と、訝しげに仲間の顔を見る。とても冷たい表情を、見た。

「《無垢なる者》と『秩序の学舎』生徒への攻撃は、まずまずの結果だ。アレは“予備”として残しておくことになった」

「ア…う、そなの？　そういう風には見えなかったけれどね。それで、」

「“選別”も、お前が起こした騒動で滞りなく終わった。こっちは細かく精算しないといけないらしいが、“漆黑”のことだ。面倒になったら大雑把で済ませるだろ。どうせ稼ぎに過ぎないし」

「そう、それなら、問題は…」

少し、首筋に汗を掻き始めたウクスは結論を急ぐ。自分は役目を全うしたのだから、ならば減点される要因はないだろう。そう締め括ろうとして、

「問題は」

仲間が、それを許さない。

「例え出来の悪い『粗悪器』（そあくき）だろうと、“計画”に必要な『器』であることに変わりはない。なのにむぎむぎ破壊された。お前のつまらない感情一つで、だ」

おもむろに右腕を上げて、手に何かを握る仕草をする。手の内側には、濁り気味の白いもやが妖しげに渦巻いて、平たく、細長く地上へと伸びていく。

仲間の決まりきったその行動はウクスを震え上がらせて、冷静を欠いて喚かせた。

「う、ううウソ嘘、嘘でしょ？ 冗談はやめてよ。だって、ワタシ達“仲間”でしょ？」

——地下牢に現れたアナタは、ワタシを助けに来たのでしょうか？ 当然だ。同じ目的を持って、同じく行動し、同じように助け合う…… “仲間である以上、当たり前のことである”と。

ウクスが抱いていた幻想を、仲間とは一度たりとも考えたことなかったその人は、突き放した。

「仲間？ “捨て駒”だろう？ 『粗悪器』には利用価値はあるが、お前にはそれが無いじゃないか。五十点もくれてやっただけ感謝しろよ。その加点が、“捨て駒”が必要とされた“証”で“ご褒美”なんだから」

愕然とするウクスに、トドメとばかりに言い捨てる。

「良かったな？ 最期に“誰かに必要とされて”」

「――」

ウクスの息が止まった。

滴っていた汗は何処かへ消えた。

顔から表情の色が無くなった。

焦りも、嘆きも、何もかも忘れて檻に近づき両手で掴んだ。考える余地が残されていれば、牢屋の隅へと下がる判断も出来ただろうに、それすら考えつかないほどの怒りの炎に包まれて檻を激しく揺すつた。

「――けるな……」

檻は頑丈でびくともしない。

檻の外にいる奴には、微塵も伝わりはしない。だとしても、ウクスは吠える。

自分を“仲間”ではなくて“捨て駒”として扱った、その人を。同志として、どころか人としても見ていなかった。しかしそんなことは意識の範疇内になくて、ウクスが激昂したのは“褒美”と言われたことだ。

ご褒美？ 証？ 必要とされて、良かっただと？

「…………ふざけるなア！！！！ ワタシは、そんなもの望んじやないわよオツツツ」

鉄製の檻をへし折らんばかりに握り締め、手の皮の方が張り裂けた。焼けるような痛みが走ったが、すぐに感じなくなった。

痛みや恐怖に怯んでいられなかった。ウクスは、自分の猛りを牢の前にいる輩にぶつけようと喚き立て、

「ハッ、知ったことかよ。使い道の無くなった不要品を、いつまでも『秩序の学舎』の連中に渡しておけないから、こうしてわざわざ処分しに来てやったっていうのに、礼を言うより唾を飛ばすのか。ますます、使えない」

ウクスへの感想は、それだけで終わった。

早々と興味は失せて、口元にあった笑みもすぐに引っ込めて、無慈悲に腕を振り下ろす。

誰からも必要とされなかった彼に、“必要とされた”誉れを授けて。律神器を、発現する。

「斬り殺せ。【誠愛】へヴィリア」



匂いがした。

甘ったるくて鼻につく匂いだ。鼻腔をくすぐられる感覚は気持ち良さよりも痒みを伴い、背筋がゾクゾクして吹き出そうとした。

ポフツ。

くしゃみをした。…のではなくて、くしゃみをする前に鼻を何かに

塞がれて止められた。

弾力のある、柔らかい素材の球体だった。それが鼻の両穴を塞いで、甘い匂いはしなくなったが、ついでに呼吸も出来なくなった。

……いや、本当、苦しくて仕方がない。丸い球体の感触は何処か懐かしく、ずっと触れていたい気持ちに駆られたが、このままでは窒息してしまう。

どうにかこのフワフワなものをどかそうともがき、息が足りなくなってきた切羽詰まる。もう柔らかいのは良いから、とにかく息をさせてくれ。

もがいても、球体は鼻からどいてくれない。息がもたない。

苦しい。

空気が、酸素が欲しい。

どけ。

どけてば。

俺を死なせたいのか。本っ気で死ぬから、ごめん、マジで、ほんとお願いだから、良いからそこお——…、

「モボえ！！（どけえ！！）」

意識を取り戻しつつ、くぐもった声で芯護は叫んだ。

目覚めて、まず目の前一杯に広がったのは、二つの丸い球だ。芯護の鼻に乗ったそれは豊満な胸で、その持ち主は、ベッドに横たわっていた芯護の上から前のめりに覆い被さっていた。

黒い長髪を後頭部で結い上げた、うら若き女性。言わずと知れた芯護の育て親、丹波だった。

「…もい（…おい）」

芯護が目を覚ましたことに気づかない丹波は、自分の胸が芯護の鼻を、面積が余り余って口まで塞いでいることにも気づかないで、ベッド横の棚に置かれたコップに手を伸ばしていた。あともうちよい、あともうちよい、と呟きながら、なおも芯護の顔に胸を沈めてきた。

「ぼい、もごごげ！　びいみがべみばい！！（おい、そこどけ！息が出来ない！！）」

「もー…：ちよいで届きそうなんだがなー」

「みいぶうべえゝゝッ！？（気づけゝゝッ！？）」

この肉の塊には神経は通ってないのか！？　と冗談抜きで青ざめてきた芯護は、やけに重たい腕を動かして丹波の背中や肩を叩く。お？　と丹波は反応して、これで退いてくれると安堵した芯護は、

「悪い、あと少しだから我慢しろな」

「ば？　…ブギえ！」

コップを手を取る方を優先した丹波の全体重に押し潰された。

「ゝゝゝゝゝ！　ゝゝ…：…？！　…：…：…、」

顔全体に胸がのしかかって何も見えなくなる。相変わらず無呼吸は強いられたまま、息が吸えなくなつてそこそこ経っている。芯護の意識は目覚めてまもないのに、再び失われていく――…、

「よっし、届いた」

「……………ぶはぁッ!？」

息の根が止まる前に、紙一重で丹波が退いた。咳き込みながら新鮮な空気を必死に取り込む芯護を余所に、椅子に戻つて悪びれる気配もない丹波は、コップに入つた水を口へ運ぶ。芯護は目尻に涙を滲ませながら、そんな酷い親の名を呼んだ。

「な……に、してんだよ。連!！」

「何って、水を飲んでる」

「じゃなくて! ……連の胸で危うく窒息死してたぞ? 他に言うことないのかよ」

「だから悪かったって。目と鼻の先にあつたから手を伸ばせば届くと思つてよ」

「ベッド迂回しろ!!!」

震える声であー!! と怒鳴る芯護だが、丹波にはちつとも伝わらない。その薄い反応がまた芯護の怒りに拍車を掛けた。

楽をしようとした分、大惨事だ。成人女性が、子供とはいえ男の頭に胸を乗せるのは衛生上良くない。健全な男子なら照れ笑ひして喜びそうな状況でも、育ての親を相手にやましい気持ちには抱けない。

否、芯護は抱きたくなかった。そんな下劣な感情は、最果ての地にも置き去りにしたい。

丹波は自覚を持つべきだ。外見が、特待生外界組にも劣らない美人であるということを。

もつと気を遣うべきだ。自分が、紛いなりにも女性であるということ。

幼い頃から育てられてきた芯護がもつとも承知している。それらが無理難題で、どう苦心したとしても実現不可能であるということ。
その理由とは。

「恥じらいつてもものを持てよな……女なんだから」

芯護が“それ”を口にした、刹那。

「嗚呼？」

凜としていた美人顔が“荒れていたであろう時代”へ速攻タイムリ
ープ。

芯護の首襟を無造作に掴んで引き寄せると、ジリジリと烈火の眼差
しで表面を炙り、ゴツンツと一発頭突きをお見舞いしてお決まりの
文句を言う。

「誰が女だあ？　おいコラ、何編も同じこと言わすなよ。俺は、オ
ト・コ・だー！！！」

……………“男”、なのだそうだ。

どの視点から眺めてみても、どう角度を変えたとしても、れっきとした女性の身体にしか見えないのに。堂々と、誇りすら匂わせて、己の性を真っ向から否定する。それが丹波という男性^{ひと}だった。

丹波は昔からそうだった。口を開けば粗暴の目立つ言動、一人称はワイルドに俺、終いに自称は男性と、丹波の残念過ぎるその個性は世の野郎共に血の涙を吞ませた。そっち方面で捉えることのない芯護は、それは至極どうでも良かったが、歳を重ねて物事の分別がつくようになると丹波の在り方が異常だということに気づき、異性でありながら同性よろしく接してくる倫理的問題行動にはよく頭を痛めた。

丹波は言うだけ言うと言を離した。喧嘩っ早さも彼女の困った短所で、芯護は強打された頭を押さえて痛みに悶える。まだハッキリしてない意識に鈍痛が潜り込み、ボヤけ気味だった視界は涙に濡れながらも鮮明に、

そこではたと気づいた。———そういえば、ここは何処だ？

目を覚ましたらベッドの上だった。服は青い布地の寝間着に着替えさせられ、丹波が介抱(?)していた。左の壁にある窓はカーテンが閉められていたが、微かに雨の降る音が聴こえた。

部屋の雰囲気からして、ここは恐らく診療塔の病室だ。つまり、自分^{自分}は気を失ったかして此処へ連れてこられたことになる。

では、気を失う前は何をしていた？

自分はどうして気を失ったのだろうか。肝心なところが曖昧で、上

手く思い出せない。記憶にあるのは、確か丹波が授業を休んで補習になり、皆から質問責めにされたような…、

「あれ。連って外界に行ってたんじゃないかったのか？　もう戻って来たのか」

「あ？」

微量に残された記憶を手繰りながら喋ると、丹波は不審そうな顔で見してきた。何言ってるの、お前？　と言外に語った表情を向けられて、芯護は内心少し焦って質問した。

「ごめん、ちょっと記憶悪くて思い出せないんだけど……、何かあった？」

「覚えてないのか？　…いや、無理もねえか。頭に【腐蝕】を受けたって聞いたし、律神器の産出までしてのけたんだ。記憶が飛んでもおかしくはないな」

頭の上に疑問符を浮かべる芯護に、丹波は一から説明してくれる。

丹波がいなかったあの日――昨日のことだ。『秩序の学舎』に一人の侵入者が入り込んで、芯護達のいる教室を襲った。

その男は律神士で、【腐蝕】の鞭を発現して暴れた。芯護はその時真っ先に攻撃されて一時気を失い、それからすぐに、偶然『秩序の学舎』に残っていたらしい依妃奈が駆けつけて撃退しようとしたのだが、これも返り討ちにあい。

誰も侵入者の蛮行を止められずに困窮した。その時、気がついた芯護が奇跡を起こした。律神器を産み出すという、この世界で最大の奇跡を。

「俺が……律神器を……」

「思い出さないか？ 【誠愛】の剣だ。発現してカマ野郎をのした後、お前は力尽きて倒れたんだが。感覚はまだ残ってるんじゃないか？」

言われて、芯護は自分の手のひらに目をやる。自らが産み出した『器』を掴み、振るった右手をじっと見る。

いまいち実感が湧かない。記憶は、話を聞くうちに断片的に取り戻せたが、律神器発現の下りになると、まるで別人の話を聞いているような錯覚に陥る。

だって都合が良すぎるではないか。悪者が猛威を振るっているところに、今の今まで落ちこぼれたった少年が不思議な力を手に入れてこれを倒す、なんて。おとぎ話の主人公ではあるまいし、それも本物の『英雄』を差し置いてだ。

百歩譲って現実にあリだとしても、自分ではないだろう。自分は英雄なんて柄じゃないから、そういう気持ちの方が俄然強いから、想像と実像との噛み合わせが悪くなっていた。なりたいたいも思ったことのない自分像が勝手に出来上がって示されて、はい判りましたそれが私なんですと受け入れられる人はそうそういない。

あれは、本当に自分だったのか。

俺が力を望んで、『器』が産まれた？

【誠愛】の剣——へヴィリアへ。

誠の愛を欲した。それは一体、誰の…、

「……そうだ、トオルは？ レンザが、トオルがどうとかって言ってた気がする。その侵入者って奴に何かされたんじゃない？」

顔が火照りそうな予感がして、芯護は深く考えない方向に決めて話題を変えた。思い出すと、発端は取り乱したレンザから始まった感があった。直接関連はなくても、トオルの身は心配だったし。そしてその危惧は、ズバリ的を得ていた。

「ああ。その日、最初に襲われたのがトオルだった。自分の部屋でな」

「最初……って、大丈夫なのか！？　まさか、どうにかなったなんて、」

気を逸らせた芯護に、落ち着けと丹波が制する。丹波の方に深刻そうな気が感じられないので、どうやら大事には至っていないようだ。

「トオルは無事だ。運よく特待生に見つけられて、ミーシャの方に運ばれた。ミーシャの実力はお前も知ってるだろう？」

「まあ……」

「ただ、第一発見者はレンザだったらしいな。錯乱してたせいもあるってか、俺ら教師陣に知らせないで、バーノットの奴が部屋に閉じこもってて他にお前しか思いつかなくて、教室へ行ったんだと」

話を聞いている限り、三人は一先ず無事らしかった。そのことに芯護は安心しつつ、今度は居場所を気にかけた。

「あいつらは、今、」

「授業中だよ。お前が目え覚ますまで看てるって聞かなかったから、俺のハンマーで説得しといた」

気軽にそう話した丹波は、ベッド右側の部屋の壁に立て掛けた黒鎚を指差した。柄が細長く、丹波の身長すら悠に越えた化物鎚だが、それよりも気がかりなのが、鎚全体に血痕が散りばめられていたことだ。

ハンマーによる説得って。

それは、平和的に行われたのだろうか？

「（すごい安否が気になる……あいつら大丈夫か？）」

芯護は侵入者よりも育て親にあらぬ危機感を覚えた。直接レンバノトオを見に行かないと、どうにもこの不安は払拭されそうにない。身体は、目覚めてから感じた重さはほぼ消えたようだし、帰っても良いか訊ねようとして、

「…！」

ポンポンと。

ベッドに手をついて前に屈んだ丹波が、もう一方の手を芯護の頭に乘せて、優しく撫でてきた。やけに嬉しそうな表情で。

丹波のこんな行動を見るのはあまり、ほとんど、いやさまったくなかったもので、芯護は変にドギマギしながら聞いた。

「連、あの、これは何を、してる？」

「頑張ったじゃねーか、芯護」

え？ と、一瞬訳の判らなかった芯護を、ナデナデを止めない丹波は褒めた。

丹波にとっても芯護からしても、珍しく“母親”の態度で接する。

「お前が頑張ったお陰で、皆が助かったんだぜ。お前に救われたんだ。誰がどう考えたって、間違いなくお前が『英雄』だ」

テストで良い成績を取った我が子を母が愛でる感じで、本当に誇らしげに、芯護の頭を撫でた。

幼かったあの頃、見せはしなかったものの雰囲気伝わってきた、懐かしい感覚だ。近頃は離ればなれでめっきりなくなった親の温もりが、ここにある。

笑顔で喜ぶ丹波を見ると、芯護も段々嬉しくなり、こそばゆさに結局頬を赤色に染めながら笑みを溢した。それから、もうしばらくこうされていたなと思い、されるままでいたのだが、

あれ、この構図って端から見たら、結構恥ずかしいことになってない？

「……………ツツツ!!?」

ズザザァ!! と一気に駆け上ってきた羞恥心により、芯護は全身を丹波から離してベッド端まで後ずさった。いきなりのもので呆気にとられる丹波はキョトン顔で、構ってられない芯護は彼女を直視できず、とにかく沸騰した顔と息を静めようと鼻から大きく息を吸い込む。途端、

「ふえ……………ぶえつくしッ!!」

辺りを漂っていた甘い香りをもろに吸い込んで、豪快なくしやみをした。

顔が赤いこともあって、丹波は違う解釈で受け取ったらしくベッドを横断、鼻を吸る芯護に近寄り手を伸ばしてきた。

「風邪か？　長雨の寒さで身体冷やしたかな。どれ、熱があるか触らせろ」

「え、違う。そうじゃない。変な、甘い感じの匂いがただけだって風邪じゃないから待ってって来るなよ手を退けろ！！」

丹波の無遠慮な仕草は照れの残る芯護には耐え難いものがあり、手で払い除けたり、頭を振ってこれを回避して誤解を解こうとする。意識が覚醒する前から感じていた、嗅いだことのない匂い。そのことを指摘すると、頭をナデナデしようと迫っていた丹波は手を止めて、訝しげに芯護へ聞き返した。

「甘い？」

「そう、部屋中匂ってる……これって香水か？　まさか、連がつけてるなんて言わないよな」

芯護の知る限り、丹波が香水をつけるような女っ気を見せたことは無きに等しい。なので期待はしていなかったが、それでも僅かな希望を胸に返事を待ってみる。

丹波は何故かその質問に表情を固くさせて、険しい顔つきで首を横に振った。

「いや、俺じゃない。この手の匂いは苦手か？」

「苦手……って言われれば。こういう不自然なのは好きじゃない。あまり肌に合わないっていうか」

「不自然、ねえ。……そりゃああながち間違いでもないが……」

「？」

腕を組んで小声で呟き、終わると今度は物珍しい顔で覗き込んでくる。丹波の真意を掴みかねて困る芯護は、もう一度訊ねてみるか検討、

したところへ、忍んでいた丹波が転じてニヤリとほくそ笑み、隙だらけな芯護の頭を執拗に撫で回した。

「……てえ、だからやめろって言ってん……、だ、あつと、お、お、おお？ ……オだ!!」

ベッドの端っこだということを忘れ、慌てて丹波の手を避けようとしたせいでバランスを崩して。

芯護は滑るシートと一緒にベッドから落ちて、間抜けな格好で天を仰いだ。丹波はそれを見て明け透けに笑い、芯護の機嫌は著しく損なわれた。

「……………帰れ。もういい帰れ。連の顔なんて見たくもない。さっ

さところから出ていけ男女」

「待てやコラ。男女？ 男っぽい女って意味か？ そうだな？ よっしやお前リンチ私刑決定」

「意味わかんねえよ……ちょっと待った判った、男女より女男って言われたかったんだなそうだなそれは俺が悪かった謝るだから殴るのやめろお——」

屈辱を味わわされた上に病み上がりな身体をボッコボコにされる不運息子。と、怪我人を相手に一切手加減なしで殴り倒す鬼畜親父。『秩序の学舎』ではよく見られる、親子の、ありきたりで和やかな風景が繰り返された。

「じゃ、俺はそろそろ行くな。服はそっちの棚に置いてあるから、着替えて教室に戻れよ。調子が良くないなら部屋で休んでもいいしな」

ひとしきり芯護を殴りまくったその後、概ね満足した丹波がそう切り出した。ベッドに沈んで死に瀕した芯護はブスツとして、答えられる程度の余力は残されていたので、素っ気なく返した。

「…………教室に行く。あいつらの顔を見ておきたいし。そういえば、連は授業に出なくて大丈夫なのか？」

「特待生に任せてある。試験が近いと補習で片付けられるから楽で良いな」

それで良いのかよ教師。と思わなくなかったが、万年居眠りサボり常習犯に言えた義理ではないし、知ったこっちゃないので閉口。丹波は黒鎧を担ぎ、芯護を残して退出した。

「…………あー、もう。しんどいったらない」

扉が閉まって一人つきりになった芯護は、力なく寝返りを打った。殴られた部分が冷えている布に触れて癒される感触に浸りつつ、いつか必ず丹波との喧嘩に勝てるようになろうと無謀な決意を抱きながら、昨日の事件について色々と思ひ起こした。

『秩序の学舎』に、謎の侵入者からの襲撃。

今まで起こり得なかったことだ。あったとしても、ここは律神士を養成する最高機関。おいそれと攻められる場所ではないし、攻めても『秩序の学舎』教師陣、特待生の実力者に駆逐されるのみで、事が成される確率は極めて低い。

けれど、事は起こされた。芯護達のいる教室に侵入者は現れ、生徒達は狙われた。

『秩序の学舎』（ここ）は絶対に安全が保障されている。その考え方が覆されたばかりでなく、外界の治安についても疑問を覚えることになった。

——“世界秩序の守り手”、か。

脳裏を掠める、疑念。

外の世界は、まだ荒れたままなのだろうか。

昔あったとされる戦争の傷跡が残っていて、あの侵入者はそこから派生した膿なのか。どんな目的があったにせよ、『秩序の学舎』に悪意と敵意を向けたのは、先の戦禍に起因したものなのか。

判らないことだらけだ。謎の侵入者に『秩序の学舎』の安全性、偶然発現した【誠愛】の律神器に、それに関与する少女。

——そうだ。依妃奈があの後どうなったのかを聞いていなかった。あの時間帯、特待生外界組は全員出払っていたはずなのに、どうして依妃奈は『秩序の学舎』にいたのか。理由としては、体調不良か何かで休んだ、なのだろうが、そうすると依妃奈は、弱った身体に無理をさせて侵入者と対峙したことになる。

侵入者に負けたと丹波が話した時はそれなりに耳を疑ったが、肉体的に万全でなかったのなら、振り返られても納得がいく。むしろ我が身を省みずに皆を助けようとした依妃奈は、称賛されるに値するだろう。流石は英雄《無垢なる者》とでも言うか、やはり『英雄』の称号は自分よりも依妃奈に授与されるべきだと芯護は思う。

「英雄……英雄か。柄じゃ、ない」

以前にも考えた気がする。自分は英雄になりたいと願ったことはないし、気取るつもりもない。律神器を発現したって、落ちこぼれであることに変更はない。

俺は『英雄』でなくていい。ただ、本物の『英雄』である彼女を守

れば、それで。
彼女を守れば。それで、

——なんだって？ 彼女を守れば????

「いやいやいや。依妃奈を守ったのは不可抗力だし、守れて良かったのは事実だし、嬉しくなくはないのもウソじゃないんだし、結果良ければすべて良し!？」

芯護は自分でも理解不能なことを口走ってしまった。丹波に殴られ過ぎて脳がイカれたか。

心の中に浮かんだ気持ちを全力で否定する。芯護が結果的に守ったのは依妃奈含むクラス全員であって、決して“依妃奈個人を守ったのではない”。なのに、さも依妃奈を守りたくて奇跡の律神器産出及び発現を成し遂げた、なんてとち狂った考えをするのは馬鹿げている。

何度だって自分に言い聞かせてやる。俺は依妃奈のことはなんとも思っていない、ただ“気になる”だけだと。

発現した律神器が【誠愛】だったのは、……………良い言い訳が思いつかない。細かいことは気にするな。

……よくよく思い返すと、律神器発現の引き金は、依妃奈が倒れていたのを目にしたからじゃなかったか？ どうなのかな？ おや？ あれ、考えれば考えるほど泥沼に嵌まっていつてる気がするの、気が気でない？ ではなくて、木の精？

「落ち着け、落ち着け、取り乱すな、俺。そんなんじゃない、俺は

そんなキャラじゃない。じゃあどんなんだよって言われたって、答えはいつも一つだろうが。だからな、依妃奈のことは、なんでもな言って言ってるだろ。どうしてそうそっちに持っていきたがるのか、俺にはサッパリ判らない」

判らないのは、パニックってる芯護の脳ミソだ。なるべく考えないようにならないうにしていたことを不意に考えてしまったせいで、自分でも収拾つかなくなってしまうた。

それも仕方ないことではある。これまでずっと違うと言い張っていたのに、思わぬ形でそれが立証されてしまったのだから。

【誠愛】の剣——へヴィリアへ。

誠の愛を欲した。それは、誰がどう考えたって、彼女しかない。

芯護が欲しがった愛の人は。

芯護が愛して、愛されたがっているのは……、

「悪い、良い忘れてたことがあるんだがよ」

「アッ——！！?!?!?」

扉が開いて丹波が顔を覗かせた瞬間、芯護の魂が雄叫びを上げた。

戻ってくるなり叫ばれた丹波はギョツとして、面白いほどのドン引きぶりを見せた。

「な、なんだ、気色悪いな。俺はノンケだぞ」

「嘘つけ。連がノンケな訳あるか。自分のことを男だって言い張る奴が、一般人に分けられてたまるか」

反論したら、部屋の真ん中まで余裕な黒鎧が突き出てきた。鎧頭部の平たい面が芯護の眉間を捉えて黙らせ、丹波はうずくまる芯護に忘れていたことを伝えた。

「お前の律神器な、発現は継続されてて、今はアインが預かってるから。調べ終わるまでは返せないからな」

「調、べるって、なんでだ。悪いことでもあるのか？」

「違う違う。純天然物の『器』、しかも産まれたての新生児とくれば、稀少価値はとんでもなく高くなるだろ。調べりゃ、未だに解明されていない律神器の構造なんか判るかも知れないからな。俺も今から合流して調べるんだ」

「あっそ。それは良かったな。頑張れよ。じゃ」

律神器自体に特別興味や関心のない芯護は、俯いたままいい加減に受け答える。

直下、カチンときた丹波から、後頭部に黒鎧を振り落とされる羽目になった。

瞼の裏で星を散らした芯護を放って部屋を出た丹波は、閉めた扉を背にしばらくその場に立ち尽くして、長く息を吐いた。

「……問題ない程度だが、多少情緒不安定だな。【誠愛】に影響されてる感は否めないか。まあ、我を抑え込む嫌いがあるアイツにはあれくらいが丁度良いだろうが。それより……」

部屋での暴力一辺倒な面を潜めて、冷静かつ明晰に芯護の状態を分析、把握する。それから後ろを振り返って、扉越しにいるであろう芯護へ向く。

彼に律神器を預かっていることを言いに戻って来たが、その他にも、まだ言っていないことがあった。そちらを優先的に言おうと踵を返したのに、機会を逃してしまった。

「結局言えず終いか。俺もつくづく、意気地がねえ」

丹波らしくない独り言をする。

言いたいことはズバリ言っただけの丹波が、最後まで言うのを躊躇ったそれは、自責による謝罪の言葉だ。トオルや、その他の子供達にも言えなかった一言。口にするだけ無駄な、自己満足にしかないもの。

その言葉を、誰もいない廊下で吐き捨てるように呟く。誰にも知られることのないまま、内々に処分した。

丹波から遅れて数分後、新品に取り替えられた制服に着替えた芯護は診療塔から出てきた。

外の雨は大降りになりつつあって風も強かった。芯護は屋根つきの渡り廊下を駆け足で、急いで校舎内に入る。せっかく新調された服が飛沫や霧で濡れて気持ち悪く、服の表面についた雨粒を払いながら速度を落としてそのまま歩いていく。目的地は、現在一学生が授業を受けている一階の教室。そこにトオルら三人もいるだろう。まだ授業中で誰もいない廊下を闊歩する芯護は、丹波が会話中に洩らしていたある言葉について考える。

『――お前、教室に行ったら覚悟しといった方が良いぞ』

覚悟ってなんだ、また誰かに襲われでもするのかと聞いた芯護に、丹波は笑うだけで何も答えなかった。念のため、念のため、と繰り返し返していたアレは一体何だったのか。

（意地の悪い顔をしてたから、良からぬことだったのは想像つくんだけどな）

まさか本当に襲われることはないだろうと樂觀視してみるが、一方で丹波は、芯護と同様に悪ふざけで嘘をつく性格をしていない。何かが待ち伏せているからこそ、思わせ振りを言ったのだ。果たしてそれは？

「心当たりは、ないな。直に確かめればいいか。……つくしゅ！」

診療塔からつきまとう鼻の不調に顔をしかめつつ、緩やかに曲がる長い廊下を歩いて着いた、教室前の扉。まだ授業は終わっておらず、ハロル・パフェッドの教義の声が途切れがちに流れてくる。

芯護はしばし授業が終わるまで待つかどうかを考えて、病み上がりで空気の冷たい廊下に立ちたくない、どうせもうすぐ終わるのだから大して邪魔にもならないだろうと即決。

特に気遣うことなく、無作法に扉を開けて中へと入った。

「「「……………」」」

聞こえていた音が、吹き荒ぶ雨以外に消えてなくなった。

教本と教鞭を両の手に持って長々と朗読していたらしいハロルはジロリと睨み、生徒達は全員芯護の入ってきた扉へ注目する。

特に変わった様子はない。多少身構えていた芯護は肩透かしで、トオル、レンザ、バーノットの三人を探して——、見つけた。三人共窓際の席で隣り合って座っていた。

三人も他聞に漏れず芯護を向いて目を見開いている。どうやら驚いているらしく、要らぬ想像でもしていたのか、人の無事な姿を見て驚くとは失礼な、と心でぼやきながらも、変わりない三人を見れて気を緩めた芯護は、

「「「芯護……！」」」

「え…………ええ!？」

示し合わせたように声を揃えて、一斉に立ち上がり、どっと押し寄せてきた生徒達に度肝を抜かれた。

先んじてやってきたレンザが芯護に飛びつき、その周りをトオル、バーノット、興奮状態の生徒達が包囲していく。悲鳴にも似た歓声が沸き起こり、想像すらつかなかった出来事に対応しきれない芯護は、とにかく首に両腕を回してわんわん泣き喚くレンザを外そうとする。

「芯護ー!! ……無事で良かったあああああ」

「うるっせえ! なんだってんだ、ちょっとレンザ離れろ。首が絞まって息しづらい」

「ごべえええん!! 俺、お前と結婚するから! お前に身も心も捧げるから!! 味噌汁作りは任せろォ!？」

「任せてたまるか話聞けえ!! おいトオル、バーノ、見てないでこいつをどうにかしろ!!」

「芯護……無事で良かった。半日も眠ってたからどうしようかと」

「そうだな、気持ちは嬉しいけどこのままにされたらもっかい眠ることになるから、首絞めだけでも外せつつってんだよもしもーし?」

「芯護、お前は英雄だ!! 命懸けで皆を守ったお前を、俺は誇りに思うぞ、コンチクショウ!!」

「誇りに思って畜生はねえよ。失恋したショックで気が触れたか、

タキシード」

げぶるあ！？？　とバーノットは撃沈するも、レンズは首から離れないしトオルも感涙して抱きつきかねない手で手に負えない。周囲は周囲で異様に盛り上がりを見せ、『芯護！！　芯護！！』と熱狂する始末。

そんな中で、唯一教室内で芯護以外に正常なハロルは、まさかの全員授業放棄に身を打ち震わせてなだめにかかるが、

「全員、座りなさい。大声を上げずに、静かに！！　授業はまだ終わっていないのだから、席に戻り…」

折り合い悪く、続きの言葉をリンゴーンと響いた鐘の音が被さった。授業終了を知らせる合図だ。

熱弁を振るおうとしたハロルは一時停止して、押し黙ったあとに発言を改めた。

「……………よろしい。それではこの辺で終わりにしましょう。休憩時間中ならば、存分に英雄君を祝ってあげても問題はありません。君達への、私の内にある評価が斜め右下に急降下する、その程度の些事です。ええ、なんら問題はない。役目を全う出来なかった私は、速やかに退出することにしよう。では失敬」

「待て待て放っていくなバーコード！！　そんな捨て台詞誰も聞いてないし、問題ならあるだろ！？　戻るならこれを鎮圧していけ、丸投げすんな！！」

教師までもが職務放棄する事態に（それも厳格さで教師中一、二位を争うハロルの放棄に）底冷えするものを感じ取った芯護が、懇願にも似た叫声でハロルを呼ぶ。しかし残念ながら『バーコード』の

単語が彼の神経を逆撫でてしまい、むしろ教室を去る足の動きを速める結果となった。

孤立無援となってしまった芯護は担ぎ上げられ、時折ワッショイの掛け声と共に胴上げされたりしながら、教壇に連れていかれる。ジタバタもがいても為す術なし、何処からともなく用意された椅子に座らされると、全員の輝きに満ち満ちた眼差しが集まる。思わず、芯護は怯んでしまった。

「さあ、律神器を発現して悪者を成敗した我らが英・雄☆芯護を、褒め称えようではないかー!!!」

誰かが調子の良い声を上げれば、また沸き上がる歓声、拍手、称賛の嵐。

芯護は目を回したような錯覚に陥る。クラス全体が異常なノリとテンションに包まれていてついていけない。

そもそも、ここまで注目を浴びたことなんて芯護の知る限り一度もなかった。それも皆から注がれる感情が、好意や尊敬、憧れで占められ、普段の落ちこぼれを見る嘲笑や好奇などは一切感じられない。悪い気はしないのだが、何分不特定多数から好意を寄せられる幸福に遭遇したことがないので、慣れない事態にまごついてしまう。そうしている間にも、皆からの集中砲火が始まった。

「それでは芯護に聞いちゃいまっす！ 英雄になられた、今のお気持ちちは!？」

「気持ちち？ えー………そこそこ」

「はい『そこそこ』頂きましたアアアッ!!!」

ワァーっと熱気がさらに盛り上がった。

いやいやいやと苾護は首を振る。面白味もなにもあったもんじゃない『そこそこ』発言で、何故そこまで興奮する。

「苾護、カッコイー！！」

女子生徒の黄色い声が聞こえた。格好良いか？　と真面目に不思議に検討する。

「苾護くん大好きー！！」

やたら野太い声が聞こえた。ぶん殴ってやろうか。

「俺達、『英雄☆苾護を愛し隊』を結成したぞ！　これからずっと応援するからな〜！！」

だからなんで野郎が集まる。即刻解散しろ。永久に潰えろ。

「……落ち着け。お前ら落ち着け！　俺は英雄じゃない、お前らが思ってるような人間になってない。担ぎ上げるのをやめろ、いいから話をちゃんと聞けえ！！」

さすがにウンザリして怒鳴ってみても、誰も聞く耳を持ってくれない。正気かどうかすら疑いたくなるクラスメイト達を前に、苾護は頭を抱えそうになる。

………これか。これが丹波の言っていた『覚悟しろ』の意味か。皆が皆、『英雄』が出現したと有頂天になって騒ぎ立て、本人の意

思に関係なく決めつける。

芯護は、英雄になんて興味すら持っていないのに。望んでもいない称号を押しつけられるのはた迷惑なだけなのに。誰も芯護の心情を察してくれない。調子の良いことを舌の上で踊らせるばかりで、一人もだ。こんなことなら、自室に戻って英気を養い、ほとぼりが冷めるのを待っていた方が良かった。

今からでも遅くない。強引にでもここを抜け出して寮塔に帰ろうか。そう考えて、眼前の光景に飽き飽きした芯護が席を立とうとした時だった。

「芯護、こっちこっち」

「…?」

呼ばれた方に顔を向けると、先程から姿が消えていたトオルら三人がそこにいた。何処に行ってた？ と一瞬考え、それよりも中央に立つレンザの前にいる小柄な男子生徒が、もじもじしながら芯護を見上げていることに気づく。

芯護の記憶がさっと蘇る。男子生徒は、レンザと仲の良い二歳年下の男の子だ。昨日の襲撃事件で芯護が咄嗟に庇った彼。それがどうして三人に連れられているのかと疑問に思い、その答えを、男子生徒が先に口にした。

「芯護、あの時は助けてくれてありがとう」

「え…」

照れながら、笑いながら男の子が言った言葉は、心からの感謝だった。

周りで騒いでいるのとは違う、いもしない『英雄』にではなくて、

『芯護本人』に贈られた感情。飾り気もなにもない単純で簡単な言葉だったが、言われた芯護の胸にじんわりと滲むものを与えてくれる。

どう応えたらいいのか判らない芯護は、嬉しそうにその反応を楽しむ三人を見て、丹波との会話を思い出した。

『誰がどう考えたって、間違いなくお前は英雄だ』

誰がどう考えたって——“自分がどう考えたって”。

芯護が英雄であることに変わりはないんだ。

周りで浮かれている連中も、ありがとうと言った男子生徒も、彼を連れてきたトオル達も、皆がそう思ってくれている。

勝手な話だ。頼んでもいないのに、奉って崇めたって何にもならないのに。
でも。

「…どういたしまして」

返す言葉をようやく見つけた芯護は、英雄も捨てたもんじゃないな、
と思えるようになっていた。

——— 思えるようになったのに。

「んまー、見てご覧なさいよバーノさん。意地っ張りで素直じゃない
苾護ちゃんが『どういたしまして』ですって！」

「良いですわね、レンザさん。こうやって少年は、大きくなってい
くんですね。」

「青春ですわ。」

「台無しだ馬鹿野郎共」

耳に手のひらを当てて固く目を瞑った。

聴こえていた喧騒が遠くなり、瞼の裏を凝視する。無心でその状態を維持していると、肩を三回叩かれたので目を開ける。

「……行っただか？」

「うん。諦めるの早くなってきたね」

「ああ、運の良いことにな。ハアア…」

自分の机周りにトオルしかいないことを確かめて、芯護はホッと胸を撫で下ろした。

歓迎とお祝いムードが冷めやらぬ教室で、芯護が戻ってから授業が二つ消化された。生徒のほぼ全員は、教師の話はそっちのけで芯護に寄ってきて騒ぎ、自分のせい(?)で学級崩壊した図には日頃からよくサボる芯護すら恐れおののいた。特待生外界組の追っかけにも言えたことだが、こいつらの情熱は確実に方向性を誤っている。と、ストーカーまがいの行為に手を染めながら超無自覚な芯護は思う。辛抱して付き合うのも馬鹿らしいので、奥の手として『見ざる聞かざる動かざる』の体勢にてクラスメイトを回避していた。

芯護が石像ばりに固まっているトオルが彼らを応対し、大人しく引き下がっていったら肩を叩いて知らせる。この方法が功を奏して、集まってくる頭ののぼせた有象無象の数は大分減った。それは喜ぶべきことではあるのだが、一躍時の人となった芯護の気苦労は蓄積

したまま、いつかの時みたく机に沈み込んでしまった。

「メンドクセー……どいつもこいつもはしゃぎやがって、こっちの迷惑も考えろよな」

「仕方ないよ、やっぱり皆、興味あるんだから。俺もね」

「ねだられても出せないもんは出せないだよ。『器』はセイレと連が持っていてるって、何度説明すれば済むんだ」

皆がどうして芯護に熱を入れているのか。それは生徒達の関心が、芯護の産み出した律神器にあるからだ。そうでなければ、落ちこぼれーズの特攻隊長が特待生並みに持ち上げられたりはしない。

しかし、だ。まさか自分が『器』を産み出して、どころか外界組にも劣らない人気を集めて持て囃される立場になるとは思ってもみなかった。芯護は複雑な心境だった。律神器を発現したのは自分が望んだから、あの状況下ではやむを得なかったからで、名声が欲しくて発現したのではない。高慢高飛車な特待生ディスケルグならともかく、問題行動で目立ちながらもそれなりに地味な部類に入る芯護からすれば、皆からの扱われように不満を持つのは当たり前だ。

というか、これまでちやほやされた経験が絶するほどに無かったのだ、芯護は照れ臭いのだ。他所で騒ぐなり噂するのは勝手だが、直接自分を巻き込むのは勘弁して欲しかった。

「…悪いな、面倒なこと頼んで」

「気にしなくていいよ。それよりも、注目集めるのが嫌なら他の場所逃げたらどう？」

“あれ”を突っ切れていうのか？ 逃げ場があるようには見え

ないぞ」

トオルの提案に芯護は目をやる。

廊下では、“落ちこぼれが律神器を発現して悪人を成敗した”との噂を確かめるべく、他クラスの生徒がごった返していた。物見高い彼らは教室までは入って来ないようなので、実質この場に留まっているのが現状の妥当案となった。

「幸い、さっきので午前授業は終わりだからな。あいっらだってそう長くは居残らないだろ。全員食堂に引っ込んだ後に抜け出せば良いさ」

「でも、俺達が食堂まで行く時間は足りるかな？　ここって位置的に結構離れてるけれど」

「最悪、飯は抜く。トオルはレンバノと合流して食堂に行ってこいよ。俺は自分の部屋に戻って夜まで閉じこもるから………」と、また来た！」

話しているうちに、機を窺っていた生徒二人が近づいてくるのが見えた。芯護は手を素早く耳に、目でトオルに合図して閉じる。最後に見たトオルはやれやれといった感じで二人組へ向かい、芯護の捉える感覚は暗闇とほんのり聴こえる喧騒だけとなった。

身動きの取れない芯護はすることがなく、無心でいるのにも飽きた。そう長くは続かないだろうが、この騒動がいつまで継続されるのかと、暇を潰しがてら自分の先行きなどを心配する。一週間か二週間か…、いやまさか、一ヶ月はあり得ないだろうけれど、外界組に対する熱の下がり幅が低いこともあるから望みはかなり薄そうだ。

出来ることなら数日くらいで冷めてくれないかなー、なんて逃避気味に現実から目を逸らし、じっとトオルの合図を待ち続ける芯護は、

(…………音が消えた?)

微かに聴こえていた話し声や物音の一切が無くなっていることに気づいた。いつまで経っても肩は叩かれないし、不審に思った芯護は薄く目を開けて、

教室から人の姿が、芯護一人を残して忽然と消えている光景を見た。

「…、トオル？」

教室全体を注意深く見回しても、机の下に潜って探しても誰も見当たらない。人が何の脈絡も無しに消えた……？ と芯護が狼狽えていると、左右に二つずつ設けられた教室入り口の一つから声がした。

「芯護、皆先に行っちゃったよ。俺達も急がないと」

「え？」

声の主はトオルで、教室後方の半開きの扉から顔を出していた。急に消えてしまったことに驚きつつも、すぐに居場所が知れて安心した芯護は、トオルの言葉が腑に落ちなかった。

口振りからして生徒は全員教室を出たようだが、たむろう生徒達は雰囲気的にまだ食堂に行く気配はなかった。それに“急げ”とは、話の流れから『自室に逃げろ』となるだろうに、ではなくて『生徒達の後に続け』と言っているように聞こえた。

第一、目と耳を塞いで周囲の状況が判らない芯護を放っていくのは、気配り上手なトオルらしからぬ行動だ。色々と不可解な点が多くて悩んだ芯護は、動くよりも先に浮かんだ疑問の方を問いただした。

「急げって、何処に行くんだよ。なんで俺に教えてくれなかったんだ」

「何言ってるんだよ、さっき連絡があったでしょ。昨日の事件の説明も兼ねて避難訓練するから、緊急避難場所の隔離施設について、“耳に声が届いただろう？”」

てっきり聴こえたかと……、と釈明するトオル。芯護は『耳に声が届いた』のヒントから、なんとなく覚えていた記憶の情報を引っ張り出す。

特待生外界組の中には、音響の万理を秘めた『器』を発現する律神士がいる。音の振動を操ることによって長距離まで届かせて、障害物は反射を繰り返してかわし、伝えたい人物へ直に言葉を伝達する。覚えがある。芯護がしょっちゅう眺める『気になる少女』（えひな）といつも一緒の、仲の良さそうな女子生徒。黒のおかっぱ頭に、見た目に反して豪華な首飾りを付けた、勝ち気そうな少女。

名は確か――、

「聴こえないわよ。私の【木霊】は、アンタ以外を対象に言葉を伝えただけだからね」

芯護の背後から声がした。

トオルの顔は仰天して、芯護も即座にそちらを向く。そこには特待生外界組の一人が立って、きつく芯護を睨んだ上で、首から下げた【木霊】の首飾りに両手を添えている。

その姿勢は、律神器を発現する時の彼女の構え方だ。

「髓から震えろ………【木霊】へルクウラ！！」

「いイゝッ！？？」

ギイイイン！！と、

鼓膜が破れんばかりの大音響が壁となって芯護に襲いかかった。

身体はいとも簡単に弾き飛ばされ、机を滅茶苦茶に押し退けながら教室前方の黒板に叩きつけられる。受け身を取ることすらままならずに、背中から強くぶつかって肺が圧迫されて、床に崩れ落ちてむせてしまう。

芯護の目に、トオルが必死な形相で何かを叫ぶのが見える。その声は、キーンと鼓膜に残る耳鳴りに打ち消されて聴こえない。

息苦しさで痛みで何が起こったのか判然としないながら、自分が危機に晒されていることは否応なしに理解できた。倒れている場合ではないと芯護は身体を起こして、散らかった教室の半ばまで歩いていた少女を注視した。

（痛……、何処から、現れた？ いや、それよりも俺は攻撃されたのか？ なんのつもりだ、こいつ……）

少女は姿を見せてからずっと芯護を睨みつけている。特待生外界組で【木霊】の『器』の発現者と接点はなく、恨まれるようなことをした覚えのない芯護は惑う。

彼女が、ろくに話をしたことのない芯護に敵意を剥き出すのはどうしてなのか。思い当たらなくて考えあぐねていると、耳鳴りの治まってきた芯護に不吉が告げられた。

「加減したとはいえ、音の全方向を固定してぶつけたのに立ち上がれるなんて、しぶといわね。次はさっきの二倍で試してみようか」

「……!？」

手足の先にまで痺れる感覚が突き抜け、全身をまんべんなく痛めつ

けた先程の一撃を、倍の威力で放つ。

喰らえば最悪どうにかなってしまうのではないか。嫌な予想図が浮かんだ芯護は身を隠そうと場所を探して、隠れて振動する空気の波からは逃れられないと知る彼女は悠長に手のひらを首飾りへ。囲うように構えて大きく息を吸い込み、音の力を放とうとして、少女の前に先回りしたトオルが飛び出した。

「やめろ!!」

「バ…!? 出てくるな、トオル!!」

「——はあ、邪魔よ」

焦った芯護が庇いに行くより早く、少女の方が動いた。吸い込んだ息をほとんど吐き出し、唇を尖らせて高く鋭い音を吹き鳴らす。音は芯護の耳には聴こえなかったが何かをしたのは明白で、少女と向き合っていたトオルは短く悲鳴を上げて倒れてしまった。

親しい間柄の人間に危害を加えられた。それだけで、芯護の頭は血が昇って沸騰した。

「お前、トオルに何をした!?!」

「…」

何も答えない少女に、自然と右手に力を込めた芯護が詰め寄る。

女性に手は上げない、相手は格上で敵う相手ではない………自分にとって重要でないそれらは、引くくるめて無視。彼女に拳を振り上げる。

少女は殴りかかる芯護に対して、身動き一つしなかった。律神器で迎え撃つこともしない彼女は、芯護の為すがままにされる。

避ける必要はない。何故なら、彼女の仲間である特待生が、すでにこの場に現れていて、代わりに芯護を狙っていたのだから。

「風穴空ける、【颯風】へビアクウア」

幼さが残りながらも落ち着き払う、大人びた声がして――、ゾクリと芯護の背筋に悪寒が走った。身の危険が迫っている、と考えるより早くその場にしゃがみ、一足遅れて頭の真上を右から左へ、高速で何かが駆け抜けた。

キュガッ！！ と過ぎ去った先から鮮烈な音が鳴る。音の詳細を確かめる為に芯護が顔を向けると、厚さのある壁に拳大の真ん丸い穴を発見する。

避けていなければ、芯護の胸元に空いていたであろう、位置に。

「チッ、外れた。運の良い」

「……………クルミア」

穴と反対側に立っているのは、髪を頭の両端で結んだ小柄な少女。特待生最年少にして律神士、クルミア。

おでこ辺りに付けた髪飾りを妖しく光らせる彼女は、感情の起伏に乏しい鉄面皮に見慣れない眼鏡を掛けて、膝をつく芯護と相対している。

前方に【木霊】。

右方に【颯風】。

二人の目的は同じで、揃って標的である芯護を仕留めるべく動き出

す。

身を低めた状態の芯護は逃げることも隠れることも叶わない。窮地に立たされた芯護であったが、そこへさらに特待生が現れて状況が一変した。

「……………スト——ップ!!」

「み、ミーシャ？」

ズバン!!と激しく扉が開かれ、血相変えたミーシャが教室に飛び込んできた。次から次へとやって来る特待生に、芯護はもう啞然としてしまう。

先客二名とは違って襲いに来たのではないらしいミーシャは、説明を求める芯護には見向きもしないで、というよりはあからさまに逸らし気味で、襲撃コンビの方へ近づいていく。

「理恵子もクルミアも何してるの？ 脅して従わせるだけって言ったじゃない！」

（それはそれで物騒な話だな…）

芯護は場違いに思ったが口には出さなかった。

憤慨するミーシャに、二人はどちらとも堪えていない様子で、まずはクルミアが白々しく言い訳をする。

「抵抗の意思を確認したから自衛手段を行使した。そっちの一学生は、」

チラッと倒れて動かないトオルを見て、理恵子と呼ばれた少女が言葉を引き継ぐ。

「イレギュラーね。避難するよう前もって知らせたのに、教室に残ってた上に邪魔しようとしたから、気を失う程度の超音波を鼓膜に流したのよ。外傷はないわ」

「そういう問題じゃなくて！ 私はもつと穏便に済ませてくれると信じていたのに、まさか説明もなしに攻撃するなんて…」

納得のいかないミーシャは息を荒らげて二人を問い詰める。その脇で、理恵子の発言を証明するように動かなかったトオルが呻き声を上げた。ゆっくり身体を起こすところを見るに、無傷というのも嘘ではないらしい。

トオルが無事なのを知った芯護は多少落ち着きを取り戻して、冷静になった思考はミーシャ達の会話から情報を取り寄せる。

やはり…というべきか、自分が狙われていることは間違いないようだ。その為に他の生徒達をあらかじめ逃がしておいて、理恵子とクルミアが襲ってきた。何にせよ、自分がここにいて助かる確率は低そうだ。

そうと判れば、いつまでもここに留まりはしない。三人が言い争いをしている隙に教室を抜け出さなければ。

（行けるか……？）

「……ミーシャ、これは私達の総意で決まったこと。あれを最優先で始末するとミーシャも賛同した」

「してないわよ。始末じゃなくて捕獲でしょ！ 疑いがあるから取り調べるってブロイツの言葉を忘れていないでしょうね？」

「私としては、ヒナにつきまとうストーク野郎を大義名分付きでヤ

れば、それで」

「それが理恵子の本音？ 随分積極的に参加したがつてたのはそれが理由だったのね？」

ギャーギャーと三人の口喧嘩は白熱して、渦中の芯護を見失っている。途中まで意識がなく状況がさっぱりなトオルがそれを観戦していて、忍び足で後ろに下がる芯護は連れていくかを迷った。が、やめた。

狙われているのは芯護一人。一緒にいれば巻き添えにしてしまうし、単独で逃げた方が都合が良い。

と、ジリジリ後退していた芯護と、警戒を怠っていなかったクルミアの視線が、迂闊にも重なった。

「む。逃亡？」

「……………不味い」

「え？」

「あ、こら！」

ミーシャと理恵子にも気づかれて、芯護はチツと舌打ちして走り出す。幸い、扉までそう距離が残っていない。僅かな差で出られよう。逃走を図って全力疾走する芯護を、みすみす逃しはしないとクルミアが律神器を発現させようとする。手を真っ直ぐ芯護の頭に定め、

【颯風】の髪飾りが一際強く輝く。

「逃がさない。——ビア、」

「だから待ちなさいってば！ 『器』の発現は禁止！！」

クルミアの発現を済んだところでミーシャが呼び止めた。理恵子も同様にミーシャの圧力を受けて封殺されて、まごついている間に芯護は扉に辿り着く。

教室を出る前、芯護は振り返って後を追おうとするトオルを確認した。芯護の身を案じてのことだろうが、ついてこられると何かと厄介なので、芯護は厳しい声でトオルに怒鳴る。

「俺に構うな、そこにいろ！！」

「え、しん……？」

突き放されたトオルはビクリと震えて、立ち止まったかどうかを確かめている場合でない芯護は廊下に出た。

何処へ逃げるか、逃げ場はあるのか、考えなく飛び出した芯護は行き先に迷い、なんにせよ殺意満々の理恵子とクルミアからは距離を置くべきだと判断してひたすら走る。頭の端で残してきたトオルを気に掛けていたが、あそこにはミーシャもいる。トオルの身に災難が降りかかることはないと思いたい。

問題はトオルよりもこちらの方だ。芯護は誰もいない廊下を駆け抜けながら、途中にある他の教室を窓から覗いて調べ、何処にもぬけの殻なのを確かめていく。トオルの話した通り、全員避難訓練として指定場所に移動しているのか。

生徒を避難させた理由は、これまでのやり取りから考察する限り芯護以外にいない。律神器を使用してまで全校生徒と芯護を引き離したり、武力派の外界組が襲ってきたりと事がやや大袈裟過ぎる。一体何をやらせばこれほど大規模な対応をされてしまうのか。

（あり得そうなのは……、まさか昨日の奴か？ 俺が教室の壁を壊したから……違うか。そんな理由でここまでではないだろ）

仮にそれが正しかったとして、だとするとこの扱いはない。壁二枚と自分の命が天秤に掛けられ、壁の重さに負けたとあっては芯護も黙ってられない。

「ふざけんなよ。特待生に命狙われるいわれはないぞ………うお！？」

苛立ち紛れに悪態を吐いていると、何かに足を取られて滑る。焦った芯護はバランスを取って転倒を防ぎ、立ち止まらずに進みながら滑った原因を目にした。

水だ。

校舎外縁の側の窓が開けられていて、外で降り続けている雨が入り込んで廊下が水浸しになっている。

誰かが閉め忘れたのか、けれど雨は連日降り通しだから開けておく理由がなく、ならばわざと開けられたのか。誰かの悪戯なのか、滑って転べば怪我をするのに危ない。しかし追われている芯護は窓を閉めてはいられないので、廊下の端に寄って雨を避けて直進。

……—するのを、運命の神様は許さなかった。

「はい容疑者。カームバック」

「ぐふえ?!」

ひたすら軽い口調を耳に捉えて、何者かの右足の甲が、首の喉笛に引っ掛けられて捕らえられ。

ガクン、と急停止して息が詰まった。その次には、芯護の身体は来た道へ引き戻されていた。

「うおおおお!」

物理的にあり得ない力に引き寄せられるかの如く滑っていく芯護は、遠ざかっていく何者かの正体を見る。——憎き犬猿の仲でこれまた特待生外界組のディスクエルグだ。ヘラヘラと笑い、包帯を巻いた手をズボンの裾に収め、自由にしている足には銀色の輝かしい具足が履かれている。律神器は発現済みで、臨戦態勢は万全………といった具合に。

「一名様ごあんな〜い。………【俊足】へソルシンク」

ディスクの言葉より先に。

本人の姿が急速にブレて、目で追いきれない残像が芯護の真横に迫った。『一名様ごあん』と芯護が聞いている頃には、踵を突き出しの強力な蹴りが脇腹を直撃。九の字に折れ曲がった芯護は壁に――叩きつけられることなく開け放たれた窓へ吸い込まれていった。雨が降りしきる野外に放り出され、芯護は冷たい水溜まりのある地面を数回転がった。新調した制服は泥だらけの濡れまくれ、ついでに口に入った泥水を吐き出す芯護もキレまくりで、罵りながら起き上がる。

「ぶえ、ううえ………チックショウ！！ ディスクの奴！！」

「ダメですよ？ 言葉遣いは丁寧に、淑やかに、――たゆたえ、

【水明】〈ヘリレイズ〉」

誰かに叱られた。

と、芯護が反応を返すより早く雨が降り止んで――“水の固まりが芯護の頭を覆った。”

「ごぼぼ！？ ごぼげぼぼご！？？」

息つく暇もなく顔を水に塞がれて、つい吸い込んでしまい肺に流れ込む。溺れる、死ぬ、と必死に両手で掻いてもがいて、手は水をすり抜けるばかりで頭から外せられない。息止められるの今日何度目だ！？ と泡を吐いて絶叫すると、水を操っている張本人から声を掛けられた。

「逃げないで下さい。争わないで、そうすれば、誰も傷つきませんから。ね？」

何やら、にこやかな顔で語りかけてくるのは長髪の女性らしいが、液体の揺らめきで光が歪み、顔を確かめられない。

否、確かめるまでもなかった。のんびりゆったりな口調に天然気味な言動とくれば、考えつく人物は一人しかない。

頭に思い浮かぶのは、美しい水色の髪に羽衣の律神器を纏わせた、神秘的な印象の少女――、

「フォーラム君、水をどけないと彼が溺れてしまうよ」

そう、フォーラムだ。視界がチカチカ瞬き出して危うく、芯護は酸素補給で埋め尽くされた頭で答えを手繰り寄せて、次なる人物の声を聞き逃す。

苦笑混じりのその声と、本当に溺れかける芯護の姿で、フォーラムはやっとやり過ぎていることに気づいた。あらあら大変とマイペースを地で行きながら羽衣を握り、揺らぐ水を四散させる。

水責めから解放された芯護は、大急ぎで水を吐き出して呼吸して、胸には空気と安堵感が一杯広がり、

「かといって野放しにも出来ないね。代わりに、僕が彼を抑えよう」

ズンツと。

目に見えない重圧が、芯護の身体全体にのしかかった。

「な……ん………！？」

支えていた手が地面のぬかるみで滑り、体勢を維持出来なくてベシヤリと潰れた。泥だらけの芯護は上から降り注ぐ力に抗おうと試みるが、手足はおろか指一本を上げることすらままならない。

身動きを封じられた芯護へ、真上からこの現象を引き起こした人物

に声を掛けられる。芯護の記憶には残っていない、栗色の髪に柔和な顔つき、クルミアとは違った形の眼鏡を掛けた男子生徒だ。

「お願いだから大人しくしてくれ。君が無抵抗でいるうちは、僕達も君に危害を加えないから」

ふざけろ加えてる真っ最中だろッ、と反論したかったが、芯護にはそれすら口に出す余裕がなく。

それでも、自分は何も悪いことをしていない、諦めてたまるものかと地べたを這いずる。往生際悪く抵抗を試みる。そして――、

「……………【純心】へシャクアス」

キーン、と煌びやかな音色を聴いて。

黒髪の少女が発現した聖槍の矛を、軽く首筋に当てられて。

「降参、してくれるかな」

「…はい」

諸々の事情により、芯護は白旗を上げざるを得なかった。



北側の校舎の二階から三階は、壁と天井の区切りをなくして一つの空間に統一されている。特待生と教師以外に入ることが許されないそこは特待生全般の活動拠点であり、彼ら専用の特別教室となっている。

広々とした室内には質の良い調度品が数多く並べられ、解放感溢れている。居心地抜群であるこの空間を一般生徒は『神々の娯楽場』などと呼び、興味本位で忍び込んだ二学生から明かされて以来、羨む声が続出して特待生昇級を目指す促進剤となった。

忖護も昇級にこだわることはなかったが、興味がない訳でもなかった。

見れる機会があるなら見ておきたい。自分達が通っている教室とどう変わるのかを見比べてみたい。と、

その場所に立ち入る機会が訪れるまでは、そう考えていた。

率直に一言で表すならば、針のむしろだ。

一般生徒が立ち入れない特別教室の一階部分。談話室として利用されているそこで、芯護は背もたれつきの木椅子に座らされている。ふかふかな赤色の絨毯の弾力に足の裏をくすぐられながら、取り巻く特待生外界組の容赦ない視線の嵐に晒されている。

律神士に囲まれては逃走不可能と判断しているのか、身体を拘束するような器具は取り付けられていない。泥と雨水はご丁寧に洗われて、服は特待生の誰かが用意した運動着に着替えさせられた。

彼らは四方に一つずつ設置されたソファに座り、芯護へ敵意や好奇心やら悪意と喜楽の綯い交ぜやらを向けている。後は無表情で判別がつかないのと、残る一人はこの場を離れて行方は知れない。

書架が立ち並ぶ二階から外界組以外の特待生が見守る中、芯護の正面に座するクルミアが代表として尋問を始める。

「何故ここへ連れてこられたか判っている？」

「：知らねえよ」

芯護は偽りなく答えた。不躰で愛想もへったくれもない返事だが、律神士五人からよってたかってボコボコにされた挙げ句に強制連行されての返事だ。いつもの芯護なら閉口するか勝算のない戦いを挑むかの二択で、会話が成立しただけでも上出来と言える。

芯護の反抗的な態度を聞いたクルミアは、当然ながら快くは思わない。ますます眉尻を吊り上げて脅し文句を聞かせる。

「こちらは拷問も視野に入れている。早めに洗いざらい吐くことを薦めるけれど？」

「だから知らないもんは知らないんだよ！ 先ず、何があったのかを教えろよ。それが判らなきゃ、答えようがないだろうが」

「……フン、まあいいけど」

信じてない、とあからさまにクルミアの顔にはあったが、これでは一向に話が進まないのので、進展させるという名目で事の成り行きを話し出す。

簡単に、かつ重大なことを、さらりと。

「昨日、侵入して捕まった男が何者かに殺害された。地下に設けた牢屋の鉄檻は鋭利な刃物か何かで切断され、男は檻ごと斬り伏せられていた」

「殺害……って、殺されたのか？」

言葉の意味をすぐには呑み込めず、間を置いた芯護は聞き返した。

『秩序の学舎』では馴染みのない、不吉な言葉だ。先日的一件でも最悪の事態には至らず、これまで人が亡くなるようなことがなかったのだからそれも当然で、『死』と縁遠い暮らしに身を置いている芯護は少なからず動揺する。

対称的に外界組の面々は冷静沈着、芯護の反応を逐一観察するクルミアは顔色一つ変えずに進めた。

「私達はこれを仲間割れか、口封じではないかと疑っている。お前が発現した『器』の形状は剣だった」

「そう、らしいな。あまり覚えてないけど……って、それでやったのが俺って決めつけてるのか？　ていうかそれ以前に、剣で牢が切れるかよ」

「通常は不可能。ただし、律神器ならば話は変わる」

どう言い逃れする？　とクルミアの挑戦的な眼差しに、当の芯護は現実味に乏しいやら馬鹿馬鹿しいやらで真面目に受け取れなかった。昨晩は気を失っていたことを丹波やセイレから聞いていないのだろうか。

こんなもの、議論する余地もなかった。さっさと疑いを晴らして帰ろうと手っ取り早い要求を突きつける。

「なら証拠は？　俺の『器』で斬られたって証拠はあるのかよ？」

「物的証拠なんて必要ないわよ」

答えたのは、正面のクルミアではなく左後方にいる理恵子だった。証拠は提示されずに自分を犯人だと特定することも出来ない、これで終わりだと気を抜いていた芯護が怪訝そうに振り向くと、汚物でも見るような蔑んだ目の理恵子を見た。

「うわ、酷い目つきだな。……それより、必要ないってどういう意味だよ。証拠が無いなら俺が殺したって判らないだろ」

「クルミアが発現に成功した【透視】の眼鏡なら、そこで何が起ったのかを一部始終“視れる”のよ。それであんたの姿がしっかり映っていたんだからね。……目つきが酷いのはあんたの存在が醜悪だからよこの変態性犯罪者」

「誰が変態……ッ、……【透視】？」

舞い戻って芯護はクルミアの顔を見る。

教室で見た時にも感じた、そこまで似合っていない丸縁の眼鏡を確かに掛けていた。が、これが本当に律神器なのかは無学な芯護には判らない。

芯護が返答に困り果てると、今度は左右に座って黙視していたディスケルグとフォーラムが交互に口を開いた。

「さうてさて、クルミアの実力は本物で疑う余地なし。片や容疑者は、『秩序の学舎』きつての落ちこぼれで信頼指数はゼロ。あいや、英雄くんだったか。さあ、どう言い逃れてみせるのかね」

「芯護さん、でしたよね？ 人を殺すということは、とても、とっ

ても悪いことです。どうか素直に罪を認めて、悔い改めて下さいますように」

「……お前らには何を言っても無駄そうだな」

犯人は芯護君で間違いありません。——漂う空気はそれ一色ばかりで、芯護は段々言い返す氣力を失ってきた。どう弁論したところで“過去の事実を視てきた”とされれば、芯護の言うこと全部が薄っぺらい言い訳にしかないのだから。

芯護に身に覚えはなく、犯行は到底あり得ない。それなのに、クルミアの一言でアリバイが不成立になるとは冗談がキツイ。覚えがないだけで、実は意識が戻らない内に身体が独りでに？　と考えてもみるが、突拍子過ぎて想像がつかない。

何より、芯護にとって重要なのはそこではなかった。

芯護が今一番気にしているのは、後にも先にも自分が殺人の容疑者であること“ではないのだ”。

有らぬ疑いを晴らすことより優先すべきこと。

何を差し置いてでも考えなくてはならないこと。

芯護の真後ろに大人しく座っているその人、依妃奈のことだ。

「……………」

(…なんで、『アイツ』は、一言も、喋らないんだ……………！)

特待生専用の教室に来てから、来る前から、芯護が降伏したその瞬間から、彼女はひたつっつっつすらに黙り込んで芯護を見ていた。

穴が空くほど……生ぬるい。むしろ通り越して別の物体を見ているのでは、つまり壮絶なる無関心ぶりで、芯護なんてつまらない生物には眼もくれていないのではと疑わせるほどに無味乾燥とした表情を、けれども整った顔立ちはこの上なく愛らしくて、見る者に癒しと憩いをもたらしてくれるが現状気休めにもならず。

その素っ気ない態度が芯護にとってどれほど心揺さぶられるものなのかを、知る由もない顔で。

(……ずっと黙ってるなよ、言いたいことはないのかよ、お前も俺が犯人だと思ってるのか、思ってるのか、どっちなんだ、てか昨日色々あったのにどうして素なんだよ、俺お前を助けたんじゃないのかよ、どうして変化がないんだよ、なんで話しかけたりしないんだよ、話すことがあるだろうよ、なんでも良いから話せよ、いやでも実際話しかけられたらそれはそれでヤバくないか、俺大丈夫なのか、普通に喋れるのか、声上擦ったりしないよな、どうすればいいの、どうしたらいいんだ、俺は、一体、どう、俺、俺は………ぬゝあゝゝゝゝゝ！！)

捕獲からここまでの間に引き起こしていた混乱が、意識をクルミア達に集中させている間は治まっていたのだが、つい気になって様子を探った途端にぶり返してしまった。

自分でもどうして取り乱してしまうのかが判らないのでにっちもさっちもいかない。頭の中が依妃奈に関することだらけで、他の誰かの話し声も耳を素通りする始末。

悶々と苛々の板挟みで冷静さを欠いた芯護は、頭に血を昇らせて知恵熱でも発しそうなほどテンパると、やがて限界を迎えた。

「……………どうすれば！　なんなんだよ！？？」

気がついた時には、苾護はいきなり立ち上がって握り拳を作り、依妃奈へ向けて意味不明な言葉を口走っていた。

「「……………」」

苾護の突然の奇行に、皆はしばし呆然。程なくして女子三人から、

「……………何、精神異常？」

「狂ってるわね」

「どうか、されたんですか？」

どれをとっても相応の反応を返してくれて、苾護の心に重大な損傷を与えて。

一人、ディスケルグは隠しもせずには笑い転げて、くじけかけた苾護の心が怒りによって持ちこたえかけて。

依妃奈は。

「…」

反応を返さなかった。

石像が如くピシッと姿勢良ろしく、視線だけを苾護へと送り、

「…」

これだけ。

悲しいくらいに、それだけ。

芯護は、凍りついた時間を少しずつ溶かしながら拳を下ろして、何事もなかったかのように着席。頭を抱えて一言。

「……………死にたい」

「罪の重さに堪えかねて？ 自殺は許さない」

「うっせ黙れ鉄面皮」

「……死ね、【颶風】へビアクウア！！」

「たった今死ぬのは許さないって言わなかったか！？」

「ただいまー…」

ズドン！ とクルミアから放たれた攻撃が芯護を狙い、二人がところ構わずドタバタ暴れる。そこへ芯護捕獲時に一人離れて居なくなっていたミーシャがそろそろと顔を出した。

芯護にとって、外界組で唯一の知り合いが帰ってきた。ミーシャならば自分の話をしっかり聞いてくれるのでは。そう淡い期待を抱いて彼女に声を掛けようとした芯護は、その手前でクルミアの律神器によって木の葉のように吹き飛ばされる。

二人が死闘を（片方が断然優位で一方的に）繰り広げている横では、ディスケルグが軽快な調子でらしくもなくミーシャの労を労った。

「ようお疲れ様、ミー……じゃなくて、猪ちゃん」

「わざわざ言い直すな」

ミーシャは返礼としてディスクレグの頭を叩いて黙らせ、全員を見渡せる位置に立つ。他の面々はミーシャに注目して、騒いでいたクルミアも床に撃沈した芯護にトドメを刺すのを中断した。クルミアは興奮気味な息遣いを整えつつ何事もなかったように振る舞い、ミーシャに事後報告を求める。

「ミーシャ、あの一学生は？」

「一通り説明して、口外しないって約束させてから避難指定区域に行かせたわ。大分渋られたけれどね…」

ミーシャは浮かない顔で疲れたように聞かせた。

……あれからミーシャは、トオルを連れて『秩序の学舎』地下にある緊急避難指定区域に足を運んでいた。道すがら、芯護への強襲の理由を包み隠さず、今回の件を内密にするよう頼んだ上で話す為に。

トオルはこれに猛反発して芯護に付き添うと言い張ったが、これにはミーシャの強い説得でどうにか了承を得られた。ミーシャとしては、これ以上友達を殺人の容疑者扱いをしたくはなかったから、その為にトオルを送り届けてくるとクルミア達に頼み込んだのだ。

「出来るなら、あの生徒も帰して欲しくはなかった。これに近い人間は仲間である可能性が高い。単独で何らかの行動を起こすかも知れないし、他に仲間がいらないとも限らない」

「クルミアの言い分は聞いたわよ。でも、皆集まった中で二人欠けていたら他の生徒だって怪しむでしょ？ 事情を知らせていれば、友達にも巧く言い訳して貰えるし……あー、うん。それはそうと、ね。話さなきゃならないことがあるのよ」

途中で話題を変えたかと思うと、急にミーシャの齒切れが悪くなる。その理由は、ミーシャが答える前に教室入り口から姿を現した。

「ここに戻る途中で、バッテリー会っちゃって……」

「貴方達は何をしているの？ 勝手に生徒達を先導して、その内一人を捕まえて。説明してくれるのでしょうか？」

「まうた忖護か。お前はよくよく面倒ごとに巻き込まれるなあ」

一人は胸辺りで切り揃えた褐色の髪と、物腰堅めな雰囲気で外見の年齢を十歳近く重ねた印象を持った女性、アイン・セイレ。

一人は黒髪ポニーテールで、いつもの黒鎚を肩に担ぎ、もう片手に蔓の途切れた鞭を持った女性——否、男性の丹波。

事情を知らされていなかった二人の『秩序の学舎』教師は、セイレは目を吊り上げて怒り気味に、丹波は面白半分呆れ半分の声を上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7700h/>

～シャクアスラヴィア～【純愛記】

2010年10月12日02時50分発行